

建築 と 社会

ARCHITECTURE
and SOCIETY

7

2012



特集：建築と窓

日本建築協会

「建築と社会」誌

特集一覧 ●1990～2011

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日

本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。取り上げてきた特集テーマは下記のと

おりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（税込・送料別注）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1990 vol.71	●商品化住宅 のデザイン*	●ニュータウン・ ルネサンス	●東海の都市 景観 ●佐賀市文化会館*	●スケール感	●ブレハブ 住宅技術の 現在と未来	●国際花と 緑の博覧会	●建築家のための 設備知識— 中規模オフィス ビルによる ケーススタディー	●高強度化— 設計の多様化 をめざして*	●やわらかな 住宅管理・ ユーザーの 役割	●都市のナイス ・プレイス ●兵庫県営繕 の歩み	●第37回 青年技術者 と和歌山景 の展望と景観*	●高級感—建物の 顔：感性の時代 を迎えての 外装材
1991 vol.72	●新しい都市 空間づくり —I—	●オフィス・ プレジャー ●新しい都市空間 づくり—II— ●建築の風景	●東海支部 復活30周年 記念	●大阪東海上 ビルディング	●今、京都 ●建築家のための 設備知識—複合 商業ビルによる ケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設 局営繕部	●一般号*	●建築をめぐるトラ ブルとその解決 ●建設現場のイメ ージアップ作戦	●空間のアイデン ティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅 政策への提言 ●大林組創業 100周年記念	●建築と土木— 構造技術の 世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフな コンクリート ●21世紀の住まい を考える シンポジウム
1992 vol.73	●夢物語— 人がかわる— まちがかわる—	●こだわりの インテリア ●近畿の郵政建 築15年の歩み	●建築と デザイン —東海支部—*	●建築家のための 設備知識—集合 高層住宅の設備 システム—	●地球環境 時代の建築	●街創り、住まい 創り—住宅・都 市整備公団関西 支社10周年—	●木構造を使っ てみませんか— 一集成材によ る構造—*	●接着— 建築分野への 限りなき可能性	●中国地方の 町並みと建築 家の「語り、夢、 作品」	●屋台—飯盛の 魅力に学ぶ— ハウジングの メインストリーム を探る	●いま建築教育 に何が期待 されているか	●京のかたち と色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 東畑建築事務所 創立60周年 記念作品集	●大阪府営繕	●東海美術館 ・博物館	●市民劇場の 舞台設備	●環境— 限りある自然 と建築との かわり	●都市の スカイライン	●映画の中の インテリア ●けいはんなプラ ザ・住友ホール	●建築の再生— 構造技術の 役割— ●大阪府営繕	●国際的パート ナーシップの 可能性	●福祉の まちづくり	●都市型住宅 再考	●第40回青年技術者 ●環境—人に やさしい空間創 造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の 新時代 ●広島 街創り アジア競技大会	●九州のインス タレーション と貌	●伊勢・神宮 式年遷宮と 神宮界隈*	●建築のエネ ルギーシス テム	●明日に向か って—会員 作品—*	●いま、医療 施設は	●住空間にお ける居どころ への視点	●まちなかの 看板 ●竹中工務店 の集合住宅	●水と建 築 ●日本 建 築 総合試験所	●建築設備のCG シミュレーション ●村野、森建築 事務所	●構造美— 建築の中の美 ●集合住宅団地 リニューアル	●第41回 青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる 風合の世界 *	●音—騒音から 操音/創音へ	●飛騨・美濃— まちの活性化 と地方文化—*	●トイレから 見た都市 文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサル デザインとは	●私の 空 間 作法—会員 作品	●新しい「都 市・建築」 の視点*	●建築構造と 社会の接点 ●日建設計*	●ライフライン と建築設備*	●第42回 青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災 から 学 ぶ *	●大阪府住宅 供給公社創立 30周年記念*	●遠江—その 地方振興と 文化—*	●立体駐車場 設備 ●大建設計	●災害！非常時に 生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、ブル がおもしろい	●住まいの 未来像	●マルチ メディアが つくる世界	●キーコンセプト の新時代	●最新の大規模 スポーツ競技 施設の設備	●私の空間作法 96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロン グライフ化 をめざして	●鉄ものがたり *	●東海支部会員作品 ●銀沢・能登・風土・文 化とちがなみ・建築*	●創立80周年記念 /建築と私と社会 —80人の眼—*	●木造建築物の伝統 技術とその将来	●住む空間の 復興—法、制度の 運用と新たな展開へ— ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市 整備公団改 革への提言	●クロスワード 都市OSAKA *	●モザイク都市 の住むかたち ●昭和設計 40周年	●私の空間 作法 —会員作品—	●第44回 青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづ くりの予感 ●東畑建築事務所 創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、 そして建築	●東海支部 会員作品 ●信州—諏訪と その周辺—	●街並みの演出— 最近の外構材料	●生活環境の 安全・安心	●生活環境の 安全・安心	●地球環境 保全と建築	●建築設備— ビルメンテナンス の立場から	●建築への証 言「98— 21世紀に 向けて	●ゆれをとめる —たえる技術 からかわす 技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療 施設	●第45回青年技術者 ●県とともに歩んだ JRX日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ” のデザイン ●建築を綾どる 小粋なモノの仕掛人	●大阪府都市 整備局	●東海支部 会員作品 99 北信濃—街並み 修繕と地域文化 の再構築	●都市の パブリック	●関西建築界の流 れと東畑謙三の 足跡とまどる	●改正建築基準 法—まちづくり、 すまいづくりへ の展開—	●改正建築 基準法 —パートII—	●私の目であ る環境問題	●アーバンイン テリア—都市 空間としての インテリア	●木とともに	●私の空間作法 —会員作品—	●第46回 青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザ インの動向を見る ●安井建築設計事務 所創業75周年	●中国支那—しな み海道と中国地方 の街づくり—	●東海支部 会員作品2000 越中・富山—地域文化 の復興と新たな 施設づくりの流	●こころを癒す 環境デザイン	●測る—測定方法 と測定結果が 意味するもの—	●改正建築 基準法 —パートII—	●スケルトン& インフィル	●100年後への メッセージ ●日建設計創業 100周年	●来 世 紀 に 引き継ぐ— わざ、もの、 こころ—	●時間	●私の空間作法 —会員作品— ●21世紀の高齢 者の居住環境	●第47回 青年技術者
2001 vol.82	●エス・ティ・ ティファリ ティーズ	●21世紀の建 築設計教育	●東海支部 会員作品 ●岐阜・大垣	●I T社会に おけるきず な	●自然素材をめ ぐる「もの・ わざ・ひと」	●成熟社会を ささえる まちづくり	●現代の日本 の空間・文 化を探る	●環境—近未来に 向け て今できること— ●大建設計—作品特集 1996-2001—	●建 築 の 力 都 市 の 力	●緊張 ●都市基盤整 備公団関西 支社	●私の空間作法 —会員作品—	●第48回 青年技術者 ●NHK大阪放送局 ・大阪歴史博物館*
2002 vol.83	●国土交通省 近畿地方整 備局営繕部 *	●再生・リサ イクル	●東海支部 会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安 全・安心 —パート2—	●塗装の いろいろ	●都市再生に向 けた建築基準 法集団規定の あり方	●いま、インテ リアデザインは ●満洲 リバープレイス	●建築をささ えるセンサー	●建築とボラ ンティア	●時を超えて— サステナブル エンジニアリ ングの現在—	●私の空間作法 —会員作品—	●第49回 青年技術者 ●大阪市中央 公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所 創立70周年	●九州の地域づ くり・まちづ くり	●東海支部 会員作品2003 愛知・名古屋—この地 の文化、芸術と建築、 街づくりを考える—	●サステイナビ リティ—次時代に 引き継ぐ都市・建築、 暮らしのデザイン—	●建 築 と 五 感	●都市計画法及 び建築基準法 等の改正	●コンバージョ ン—インテ リアから発信 するまちなみ—	●介護と建築・ 設備	●建築とノスタ ルジー—建築の主 観的価値につい て—	●力と楽しくつ き合う方法	●私の空間作法 —会員作品—	●第50回青年 技術者—青年 技術者顕 彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部 会員作品 ●愛・地球博 *	●省リスクな 「まち再生」 *	●リニューア ルの技	●地域住民主体 のまちづくり と支援制度	●Product Design+1	●銭湯—心地 よさを求め て—	●建築家とは 何か	●巨大地震に よなえて	●私の空間作法 —会員作品—	●第51回 青年技術者
2005 vol.86	●震災から 10年	●「健やか」 ●長崎医療 センター	●東海支部 会員作品2005 ●東海における施設づ くりへの新たな試み	●建築の経済 化	●住まい方 の変化	●人工栽培	●次世代に伝 える「木」の建築 ●「建築と社会」 1000号記念	●改正建築基 準法と景観 緑三法	●火災から 守る	●構造の過去 から未来へ *	●私の空間作法 —会員作品—	●第52回 青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デ ザインとま ちづくり	●「地方空港 の時代」—まち と共存する空 港づくり—	●東海支部会 員作品2006 ●十東海支部 特集3部作*	●都市再生の 本質—光と 影のはざま で—	●変容する家 族形態—あ たらしいライ フスタイル	●身近な省エネ ギー—エネルギ ーをたくわえ、有 効利用する—	●設計図が伝 えるもの	●建築物の安 全・安心 *	●第53回 青年技術者	●「セキュリ ティ」	●もしも… —構造が未 来へつなぐ 夢—	●私の空間作法 —会員作品—
2007 vol.88	●光り輝く 京都の景観 まちづくり	●学校新時代	●東海支部会 員作品2007 ●十東海支部 特集3部作	●創立90周年 記念—この 10年、これ からの10年	●あそび考	●こだわりの 創る住まい のカタチ	●住まいの設 備と空間の 移り変わり	●建築系雑誌 が伝えるも の	●建築基準法 等大改正	●第54回 青年技術者	●ガラスを 考える	●楽しい構造 の世界
2008 vol.89	●私の空間作法 —会員作品—	●PFI事業、 その後	●東海支部会 員作品2008 ●十東海支部 特集3部作	●まちづくり 2011年宣言	●新ホテル物 語	●設備に役立 つ地震対策	●中国地方を訪ね て見ようもの ●小林聖心女 子学院	●建築と景観	●第55回 青年技術者	●木造住宅を 巡って	●建築において ROBOTが 活躍する日は 来るのか？	●自然と戦う 構造
2009 vol.90	●私の空間作法 —会員作品— ●阪神電車中區—新 鮮な中區—島崎新時代	●水の都 にぎ わいのある未 来に向けて	●東海-TOKAI オムニバス	●楽しい福祉	●体 感 す る イン テ リ ア	●建築空間が 求める空気 環境（空気 質）	●建築と水	●実用レベル で展開され る施工管理 のIT化	●第56回 青年技術者	●地域の歴史 資産を活か したまちづく り	●第16回 会員作品特集 “私の空間作法”	●構造家日記 —頭の中を のぞいてみ たら—
2010 vol.91	●創業110周年 記念特集 NIKKEN SEKKEI	●建築とエコ 技術	●東海支部復活 50周年記念号 東海—TOKAI オムニバス	●食と建 築・ 都市	●ホスピタリ ティのあるケ ア空間	●太陽光発電	●建築と石	●再生・受け 継ぐ・繋がる	●第57回 青年技術者	●建築ストック 社会の形成 への展望	●LED照明の活 用・将来を考 える—人・地球 への思いやり—	●東京スカイ リー
2011 vol.92	●「100年」—第1回地 スック再生実証試験—ス トック活用時代の表明— 第17回 会員作品「私 の空間作法」	●BIMは設計 を 変 革 す る か？	●東海支部復活 50周年記念号 東海—TOKAI オムニバス	●まちなかの サードプレイ ス	●変遷する “身の置きど ころ”	●ECO—建築 設備が出来る ECO技術—	●建築と土	●鉄道駅に注 目する	●第58回 青年技術者	●火災に強い 建築を考 える	●コンクリート という素材	●構造教育と 社会

*は欠号

会長就任ごあいさつ

香西喜八郎



このたび日本建築協会の会長に推挙されました香西喜八郎です。身が引き締まる大任ですが、95年の歴史の重みに押し潰されることなく、会員の皆様の衆知を集め、来る100周年への土台づくりに努力いたす所存ですので、宜しくご指導をお願いいたします。

日本建築協会は1917年、大阪の興隆期に片岡安が中心となって設立されました。彼は健康で文化的なまちづくりのために、都市計画法と市街地建築法の成立や居住環境の改善に民間の視点で尽力いたしました。その意義は今日まで1084号の発行を重ねる機関誌「建築と社会」の誌名に表されているように、建築を社会との関係で捉えたことでした。その後、まちづくりに関わりのある行政、コンサルタント、設計、施工、建材、教育、研究等、全てのジャンルの専門性と教養を有する個人や法人の交流及び社会奉仕団体として発展して来ました。連携による相互研鑽と情報発信等の社会貢献が市民に評価された結果であると考えられます。

建築の目的は経済活動、社会活動、文化活動、暮らしの場づくり等多様です。その視点は立場により異なりますが、まちづくりに関わる者や法人が集まり忌憚の無い議論をし、コミュニケーションを深めるプロセスの中に協会の存在意義があります。

今日建築に関する各種の団体は会員減少問題に遭遇しています。ネットで世界に繋がっているので、手づくりのコミュニケーションには価値を置かないのかもしれませんが。政治経済の変動期にあり、3.11東日本大震災後の閉塞感が漂う自己責任の社会が参加を阻んでいるのかもしれませんが。このような時代であるからこそ、主としてハードな社会基盤の形成を担う我々の役割をアピールしようではありませんか。時代が要求する地球環境保全や災害に対する安全性、少子高齢化対策等に関して市民に魅力のあるプログラムを提供し、会員の増強を図り、財務体質を改善したいと考えます。

協会は平成25年度の移行を目指して一般社団法人への申請作業を粛々と進めています。団体の役割を明確にして盤石の体制で臨みたいと思います。

環境を形成し文化の発展に寄与する「建築」の重要性をアピールする活動は建築を造る側の義務であると考えます。この意図に賛同され、今後も物心両面のご支援を宜しくお願いいたします。

会告

総会議決のお知らせ

平成24年 6月21日開催の平成24年度
第1回通常総会において、下記の議
案がそれぞれ原案のとおり承認され
ました。

- 第1号議案
平成23年度事業報告の件
(詳細p3)
- 第2号議案
平成23年度収支決算報告の件
(詳細p4)
- 第3号議案
役員選任の件
(詳細p7)

* 6月21日付けで退任の理事

●理事

上原正行 U建築工房
久保博司 大成建設(株)
森畑 武 MO建築研究室 & RG
與謝野久 (株)日建設計
前田 亮 西松建設(株)
大寺正直 中央電設(株)
銭高善雄 (株)銭高組
安本志郎 事務局

退任された理事の方には、長年にわ
たり会務遂行にご尽力いただきあり
がとうございました。

再任及び新任の顧問及び理事、監事
はp7の会務分掌の表のとおりです。

通常理事会議決の
お知らせ

平成24年 6月7日開催の平成24年度
第1回通常理事会において、下記議
案がそれぞれ原案のとおり承認され
ました。

- 第1号議案
平成23年度事業報告(案)の件
- 第2号議案
平成23年度収支決算報告(案)の件

- 第3号議案
役員選任(案)の件
- 第4号議案
総会等の開催について

臨時理事会議決の
お知らせ

平成24年 6月22日開催の平成24年度
第1回臨時理事会において、下記の
議案がそれぞれ承認されました。

- 第1号議案
会長選任の件

- 第2号議案
役付役員選任の件
- 第3号議案
常任理事並びに常設委員長委嘱の件
- 第4号議案

理事の会務分掌の件

いずれもp7の会務分掌の表のとおり
です。

評議員会議決の
お知らせ

平成24年 6月7日開催の平成24年度
評議員会において、下記議案がそれ
ぞれ原案のとおり承認されました。

- 第1号議案
評議員会議長互選の件

- 三木敏男氏を選任
- 第2号議案
役員(顧問、理事、監事)候補者推
薦の件
- 報告事項

平成23年度事業報告(案)の件
平成23年度収支決算報告(案)の件
総会等の開催について

平成23年度事業報告書

平成23年4月1日～平成24年3月31日

1. 総 会

- (1) 第1回通常総会 平成23年6月17日
議事 ①平成22年度事業報告(案)の件
②平成22年度収支決算報告(案)の件
③役員選任(案)の件
④一般社団法人の申請について(案)の件
- (2) 第2回通常総会 平成24年3月28日
議事 ①平成24年度事業計画(案)の件
②平成24年度収支予算(案)の件

2. 理 事 会

- (1) 第1回通常理事会 平成23年6月2日
議事 ①平成22年度事業報告(案)の件
②平成22年度収支決算報告(案)の件
③役員選任(案)の件
④一般社団法人の申請について(案)の件
- (2) 第1回臨時理事会 平成23年6月22日
議事 ①役付役員選任の件
②常任理事並びに常設委員長委嘱の件
③理事の会務分掌の件
- (3) 第2回通常理事会 平成24年3月28日
議事 ①平成24年度事業計画(案)の件
②平成24年度収支予算(案)の件
③報告事項

3. 評 議 員 会

- (1) 第1回定時評議員会 平成23年6月2日
議事 ①評議員会副議長互選の件
②役員(顧問、理事、監事)候補者推薦の件

4. 役 員 会 等

- (1) 常任理事会 9回

5. 常 設 委 員 会 等

- | | | | | |
|---------------------|-----|-----|-------|-----|
| (1) 編集委員会 | 委員会 | 12回 | 小委員会等 | 99回 |
| (2) 事業委員会 | | 7回 | | |
| (3) 教育委員会 | | 5回 | | |
| (4) 出版委員会 | | 11回 | | |
| (5) 建材委員会 | | 1回 | | |
| (6) 10年委員会 | | 11回 | | |
| (7) 史料研究会(再読関西近代建築) | | 5回 | | |
| (8) 関西の建築界群像委員会 | | 3回 | | |
| インタビュー | | 13回 | | |

6. 特 別 委 員 会 等

- (1) 工高生デザインコンクール審査委員会 1回
(2) 青年技術者選考委員会 1回

7. 建築と社会、特集号

- | | |
|------|--------------------|
| 4月号 | まちなかのサードプレイス |
| 5月号 | 変遷する「身の置きどころ」 |
| 6月号 | ECO～建築設備が出来るECO技術～ |
| 7月号 | 建築と土 |
| 8月号 | 鉄道駅に注目する |
| 9月号 | 第58回青年技術者 |
| 10月号 | 火災に強い建築を考える |
| 11月号 | コンクリートという素材 |
| 12月号 | 構造教育と社会 |
| 1月号 | 自然災害に立ち向かう力を求めて |
| 2月号 | 今、私が思う『和』 |
| 3月号 | 東海支部特集 |

8. 講 演 会

- (1) 講演題目:「東京スカイツリー600m超えを目指す」
講 師: 吉野 繁氏(㈱日建設計)
講 演 日: 平成23年6月17日
参 加 者: 50名
- (2) 第7回「これからの建築と社会」講演会
講演題目:「東日本を襲った津波と大規模自然災害への備え～今後の展望」
講 師: 藤田武彦(独立行政法人港湾空港技術研究所)
講 演 日: 平成24年2月29日
参 加 者: 45名

9. 見 学 会

大阪富国生命ビル
平成23年7月15日 参加者37名
大阪ステーションシティ
平成23年10月19日 参加者38名
「野村碧雲荘」特別茶室見学会
平成24年2月14日 参加者31名
東リ株伊丹工場
平成23年7月8日 参加者20名
武庫川女子大学食物栄養科学館
平成23年10月5日 参加者14名

10. 建築工事实務講習会

本部主催「施工計画・仮設見積」
平成23年12月2日
①施工計画(仮設・地下工事)
講 師: 大村 泰正/清水建設関西事業本部
②施工計画(躯体・仕上・設備工事・工程)
講 師: 池内 昌志/浅沼組大阪本店
③仮設見積
講 師: 阪井 聡/大林組大阪本店
受講者: 32名
東海支部主催「施工計画・仮設見積・積算業務」
平成24年1月26日
①施工計画
講 師: 日吉 智紀/清水建設名古屋支店
②仮設見積
講 師: 福井 浩二/大林組名古屋支店
③積算業務
講 師: 時武 治/竹中工務店名古屋支店
受講者: 36名

11. 新 建 材 の 紹 介

建材の特性等の検討及び今後の会誌「建築と社会」の誌面で紹介の方法等について検討を行った。

12. 表 彰

①優秀卒業生の表彰: 本人の研鑽意欲の向上を促し激励するため、高等学校、専門学校建築科の優秀な卒業生44校57名を表彰した。
②読者と選ぶ「建築と社会」賞の表彰: 協会誌「建築と社会」の趣旨にふさわしい社会性、環境などに配慮した有意義な建築作品や論文を表彰し、6月17日の総会后、表彰式を行った。
作品部門: ・佐野記念病院/介護老人保健施設 栄公苑 岡田泰典、西田佳代
論考部門: ・白石晟一における石の「発見」 倉方俊輔
・京都の近代和風建築の魅力ー対龍山荘を中心にー中村昌生

13. 青年技術者の顕彰

- ・満35歳以下の技術者を対象に、昭和29年度から実施しており、第58回は、応募者23名の内、16名を顕彰した。
また、顕彰者を称え激励するため、平成22年度と同様に表彰式、講演会及び先輩・役員との交流会を行った。

14. コ ン ク ー ル

第57回工高生デザインコンクール
設計課題: バックパッカーのための施設
応 募 者: 21校・91点
審 査 会: 平成23年10月15日 表彰式: 11月12日
審査委員: 長坂 大審査委員長(京都工芸繊維大学)他9名
入選作品: 10点(内、最優秀1点、優秀2点)

15. 後 援 ・ 協 賛 の 承 認

- ・「震災から再生へー阪神淡路大震災の経験からー東日本大震災復興支援シンポジウムin大阪」(後)
・特別展「民都大阪の建築力」(後)
・実務者のための戸建住宅の地盤改良・補強工法ー考え方から適用までー講習会(協)
・平成23年度「住生活月間」(協)
・第33回Japan Home&Building Show(協)
・平成23年度大阪府公共建築設計コンクール(協)
・第31回大阪都市景観建築賞(愛称 大阪まちなみ賞)(後)

- ・建築士業務の責任と処分の解説講習会～建築士のためのトラブル事例とその事前回避策～(後)
・「建築・建材展2012」(第18回)(協)
・2011年児童画展(後)
・2011年度かんでん 住まいの設計コンテスト(後)
・第30回大阪都市景観建築賞(大阪まちなみ賞)講演会(後)
・第12回講演会「建築紛争の現状と課題(その3)」(協)
・「コンクリートと木のコラボレーションによる持続可能な住まいと地域住環境の設計」連続シンポジウム(5回開催)(後)
・特集展示「中村順平 建築芸術の探究」(後)
・東洋+西洋=伊東忠太ーよみがえった西本願寺「云道院」ー(後)
*「(後)」は後援、「(協)」は協賛を示す。

16. 建築関係団体との交流、連携

- ・平成21年度より進めてきた、関西建築4団体(大阪府建築士会、大阪府建築士事務所協会、日本建築家協会近畿支部、日本建築協会)会長・支部長懇談会における連携活動を引き続き推進した。
これまで、告示15号にかかわる自治体等への請願、建築士受験資格に関わる大学院生インターンシップの毎年の共同受入れなど具体化してきた。
23年度は、災害時協力についての大阪府・大阪市との協定締結、東日本大震災を契機とする「アイデア募集」「記憶の継承」と防災シンポジウムの実施や(社)公共建築協会、国土交通省近畿地方整備局、大阪府、兵庫県、大阪市と共催で、公共建築の日のイベントとして、講演会・見学会「防災と減災-公共建築にできること」を実施した。

17. 建築関係団体合同忘年懇親会、合同新年交礼会

建築関係4団体合同忘年懇親会
平成23年12月14日にシティプラザ大阪にて開催した。
建築関係14団体合同新年交礼会
平成24年1月4日にリーガロイヤルホテルにて開催した。

18. 役員を送った団体

大阪商工会議所	2号議員
大阪建築防災センター	評議員
大阪住宅センター	理事
日本建築総合試験所	評議員
大阪市街地再開発促進協議会	理事

19. 各支部事業活動

京都支部
・会議の開催: 総会1回、役員会2回 会計監査1回
・事業: 見学会1回
2級受験講習会 製図(基本)2日間
製図(応用)延べ6日間

中国支部
・会議の開催: 総会1回 常議員会1回 企画・幹事会7回 講演会1回、懇親会1回
・事業: 支部会員名簿の発行

東海支部
・会議の開催: 総会1回、役員会11回、総務委員会等の委員会21回
・事業: 支部機関紙の発行2回
講演会1回
見学会2回(国内)
建築工事实務講習会の実施
支部会員名簿の発行
総会懇親会・支部会員交流会2回
「建築と社会」東海支部特集編集3月号

・協力事業: 中部建築賞協議会ほか5団体の事業実施に協力した。

20. 会長・支部長調整会議

一般社団法人の申請に向けて、各支部を本部と一体とし申請するために、会長・支部長調整会議を2回、本部・支部事務局調整会議を1回開催した。

平成23年度決算報告書

貸借対照表

平成24年 3 月31日現在 (単位：円)

科 目	当年度	前年度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金・預金	16,722,472	15,995,740	726,732
貯蔵品	73,641	43,096	30,545
未収入金	1,583,900	2,509,750	-925,850
前払費用	0	101,734	-101,734
仮払金	47,247	9,002	38,245
流動資産合計	18,427,260	18,659,322	-232,062
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
基本財産合計	0	0	0
(2) 特定資産			
記念事業積立預金	27,000,000	27,000,000	0
事業基金積立預金	29,000,000	29,000,000	0
退職給付引当資産	8,731,065	8,030,040	701,025
特定資産合計	64,731,065	64,030,040	701,025
(3) その他固定資産			
什器備品	111,260	111,260	0
投資有価証券	447,075	446,647	428
保証金	3,436,650	3,436,650	0
その他固定資産合計	3,994,985	3,994,557	428
固定資産合計	68,726,050	68,024,597	701,453
資産合計	87,153,310	86,683,919	469,391
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	1,506,554	1,065,422	441,132
前受金	3,053,899	4,041,529	-987,630
預り金	185,324	196,874	-11,550
流動負債合計	4,745,777	5,303,825	-558,048
2. 固定負債			
退職給付引当金	8,731,065	8,030,040	701,025
固定負債合計	8,731,065	8,030,040	701,025
負債合計	13,476,842	13,333,865	142,977
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
指定正味財産合計	0	0	0
2. 一般正味財産			
(うち基本財産への充当額)	(0)	(0)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(56,000,000)	(56,000,000)	(0)
正味財産合計	73,676,468	73,350,054	326,414
負債及び正味財産合計	87,153,310	86,683,919	469,391

正味財産増減計算書

平成23年 4 月 1 日から平成24年 3 月31日まで (単位:円)

科 目	当年度	前年度	増 減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
受取会費	39,312,915	40,451,800	-1,138,885
個人正会員受取会費	11,044,650	11,722,500	-677,850
個人正会員（地方）受取会費	972,300	970,200	2,100
団体正会員受取会費	27,279,165	27,750,000	-470,835
準会員受取会費	16,800	9,100	7,700
事業収益	18,071,395	18,956,201	-884,806
編集委員会収益	12,314,691	12,899,923	-585,232
契約約款収益	4,416,340	3,950,030	466,310
出版委員会収益	275,114	389,935	-114,821
事業委員会収益	332,500	337,300	-4,800

科 目	当年度	前年度	増 減
教育委員会収益	510,000	1,170,663	-660,663
建材委員会収益	0	0	0
事業雑収益	222,750	208,350	14,400
雑収益	140,595	520,307	-379,712
経常収益計	57,524,905	59,928,308	-2,403,403
(2) 経常費用			
事業費	32,295,180	33,939,307	-1,644,127
給料・手当	12,815,463	12,984,671	-169,208
法定福利費	2,198,859	2,209,634	-10,775
編集委員会事業費	13,469,127	14,333,998	-864,871
契約約款費	2,577,580	1,919,972	657,608
出版委員会事業費	47,793	168,706	-120,913
事業委員会事業費	215,063	217,422	-2,359
教育委員会事業費	968,384	2,095,381	-1,126,997
建材委員会事業費	0	0	0
雑費	2,911	9,523	-6,612
管理費	24,903,311	25,470,304	-566,993
給料・手当	10,993,313	11,651,058	-657,745
退職給付費用	701,025	714,093	-13,068
法定福利費	1,799,656	1,288,850	510,806
福利厚生費	8,500	2,672	5,828
助成費	1,299,343	1,612,610	-313,267
会議費	918,565	915,912	2,653
旅費交通費	86,870	12,760	74,110
通信運搬費	322,006	373,932	-51,926
集金費	547,479	617,455	-69,976
消耗品費	1,266,335	1,543,904	-277,569
備品購入費	0	115,500	-115,500
修繕費	6,090	22,460	-16,370
印刷製本費	0	44,310	-44,310
光熱水料費	192,871	205,626	-12,755
保険料	21,710	21,710	0
租税公課	577,600	481,800	95,800
清掃費	0	0	0
建物管理費	4,555,908	4,555,067	841
雑費	1,606,040	1,290,585	315,455
経常費用計	57,198,491	59,409,611	-2,211,120
当期経常増減額	326,414	518,697	-192,283
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	326,414	518,697	-192,283
一般正味財産期首残高	73,350,054	72,831,357	518,697
一般正味財産期末残高	73,676,468	73,350,054	326,414
II 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
III 正味財産期末残高	73,676,468	73,350,054	326,414

財務諸表に対する注記

1. 重要な会計方針

- (1) 有価証券の評価基準及び評価方法
その他の有価証券 時価のあるもの…期末日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は移動平均法により算定）によっている。
- (2) 固定資産の減価償却の方法
什器備品…定額法によっている。
- (3) 引当金の計上基準
退職給付引当金…期末退職給与の要支給額を引当てている。
- (4) 消費税等の会計処理
消費税等の会計処理は税込み方式によっている。

2. 基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

科 目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
小 計	0	0	0	0
特定資産				
記念事業積立預金	27,000,000	0	0	27,000,000
事業基金積立預金	29,000,000	0	0	29,000,000
退職給付引当資産	8,030,040	701,025	0	8,731,065
小 計	64,030,040	701,025	0	64,731,065
合 計	64,030,040	701,025	0	64,731,065

3. 基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等の内訳は、次のとおりである。

科 目	当期末残高	(うち指定正味財産からの充当額)	(うち一般正味財産からの充当額)	(うち負債に 対応する額)
基本財産				
小 計	0	—	—	—
特定資産				
記念事業積立預金	27,000,000	—	(27,000,000)	—
事業基金積立預金	29,000,000	—	(29,000,000)	—
退職給付引当資産	8,731,065	—	—	(8,731,065)
小 計	64,731,065	—	(56,000,000)	(8,731,065)
合 計	64,731,065	—	(56,000,000)	(8,731,065)

4. 固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

(直接法により減価償却を行っている場合)

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は、次のとおりである。

科 目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
什器備品	1,112,560	1,001,300	111,260
合 計	1,112,560	1,001,300	111,260

財産目録

平成24年3月31日現在

(単位：円)

科 目	金 額		
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	16,722,472		
現金手許有高	50,071		
普通預金 三井住友銀行大阪中央支店	8,040,012		
普通預金 三菱東京UFJ銀行瓦町支店	3,868,151		
普通預金 りそな銀行北浜支店	2,416,609		
郵便振替 00910-9-39975	2,309,632		
普通預金 マーチャンダイズビル内郵便局	37,997		
貯蔵品	73,641		
切手・はがき	73,641		
未収入金	1,583,900		
会誌収入	1,236,000		
個人正会員会費収入	322,800		
地方会員会費収入	12,600		
団体正会員会費収入	12,500		

科 目	金 額		
仮払金	47,247		
見学会・会議保険料	17,247		
防災フォーラム立替金	30,000		
流動資産合計		18,427,260	
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
基本財産合計		0	
(2) 特定資産			
記念事業積立預金	27,000,000		
定期預金 三菱東京UFJ銀行瓦町支店	11,000,000		
定期預金 りそな銀行北浜支店	13,000,000		
定期預金 三井住友銀行大阪中央支店	1,000,000		
普通預金 りそな銀行北浜支店	2,000,000		
事業基金積立預金	29,000,000		
定期預金 三菱東京UFJ銀行瓦町支店	9,000,000		
定期預金 りそな銀行北浜支店	20,000,000		
退職給付引当資産	8,731,065		
定期預金 三菱東京UFJ銀行瓦町支店	8,731,065		
特定資産合計		64,731,065	
(3) その他固定資産			
什器備品	111,260		
書棚 1 式	111,260		
投資有価証券	447,075		
中期国債ファンド 三菱UFJモルガン・スタンレー証券	447,075		
保証金	3,436,650		
本部事務所賃貸契約による保証金	3,436,650		
その他固定資産合計		3,994,985	
固定資産合計		68,726,050	
資産合計			87,153,310
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	1,506,554		
会誌発行費	874,433		
集金費	2,400		
租税公課	507,600		
防災フォーラム分担金	122,121		
前受金	3,053,899		
個人正会員会費収入	1,695,720		
団体正会員会費収入	1,202,079		
地方会員会費収入	77,700		
準会員会費収入	8,400		
会誌収入	70,000		
預り金	185,324		
給与源泉税預り	35,390		
報酬源泉税預り	68,876		
健康保険料本人負担分預り	28,800		
介護保険料本人負担分預り	2,850		
厚生年金保険料本人負担分預り	49,235		
印税預り	173		
流動負債合計		4,745,777	
2. 固定負債			
退職給付引当金	8,731,065		
固定負債合計		8,731,065	
負債合計			13,476,842
正味財産			73,676,468

収支計算書

平成23年 4 月 1 日から平成24年 3 月31日まで (単位：円)

科 目	予算額	決算額	差 異
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
会費収入	37,991,703	39,312,915	-1,321,212
個人正会員	10,601,578	11,044,650	-443,072
個人正会員 (地方)	932,563	972,300	-39,737
団体正会員	26,449,162	27,279,165	-830,003
準会員	8,400	16,800	-8,400
事業収入	17,905,850	18,071,395	-165,545
編集委員会収入	11,725,000	12,314,691	-589,691
契約約款収入	4,230,000	4,416,340	-186,340
出版委員会収入	500,000	275,114	224,886
事業委員会収入	290,000	332,500	-42,500
教育委員会収入	1,000,000	510,000	490,000
建材委員会収入	0	0	0
事業雑収入	160,850	222,750	-61,900
雑収入	556,169	140,595	415,574
前受金収入	0	3,036,216	-3,036,216
前払費用収入	0	101,734	-101,734
仮払金収入	0	1,892,872	-1,892,872
預り金収入	0	5,923,852	-5,923,852
貯蔵品収入	0	0	0
事業活動収入計	56,453,722	68,479,579	-12,025,857
2. 事業活動支出			
事業費支出	31,288,847	32,295,180	-1,006,333
事業関係人件費支出	15,533,874	15,014,322	519,552
編集委員会事業費支出	11,815,000	13,469,127	-1,654,127
契約約款費支出	2,529,973	2,577,580	-47,607
出版委員会事業費支出	130,000	47,793	82,207
事業委員会事業費支出	230,000	215,063	14,937
教育委員会事業費支出	950,000	968,384	-18,384
建材委員会事業費支出	0	0	0
雑支出	100,000	2,911	97,089
管理費支出	25,164,875	24,202,286	962,589
管理関係人件費支出	12,766,635	12,792,969	-26,334
退職給付支出	0	0	0
福利厚生費支出	10,000	8,500	1,500
助成費支出	1,601,435	1,299,343	302,092
会議費支出	945,000	918,565	26,435
旅費交通費支出	70,000	86,870	-16,870
通信運搬費支出	410,000	322,006	87,994
集金費支出	650,000	547,479	102,521
消耗品支出	1,520,000	1,266,335	253,665
備品購入費支出	120,000	0	120,000
修繕費支出	30,000	6,090	23,910
印刷製本費支出	50,000	0	50,000
光熱水料費支出	225,000	192,871	32,129
保険料支出	25,000	21,710	3,290
租税公課支出	607,143	577,600	29,543
清掃費支出	20,000	0	20,000
建物管理費支出	4,560,000	4,555,908	4,092
雑支出	1,554,662	1,606,040	-51,378
前受金支出	0	4,023,846	-4,023,846
前払費用支出	0	0	0
仮払金支出	0	1,968,617	-1,968,617
預り金支出	0	5,897,902	-5,897,902
貯蔵品支出	0	30,545	-30,545
事業活動支出計	56,453,722	68,418,376	-11,964,654
事業活動収支差額	0	61,203	-61,203
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入			
投資活動収入計	0	0	0
2. 投資活動支出			

科 目	予算額	決算額	差 異
特定資産取得支出	701,025	701,025	0
退職給付引当資産取得支出	701,025	701,025	0
記念事業積立預金支出	0	0	0
投資有価証券取得支出	0	428	-428
投資活動支出計	701,025	701,453	-428
投資活動収支差額	-701,025	-701,453	428
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
財務活動収入計	0	0	0
2. 財務活動支出			
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV 予備費支出	50,000	0	50,000
当期収支差額	-751,025	-640,250	-110,775
前期繰越収支差額	47,828,000	17,440,068	30,387,932
次期繰越収支差額	47,076,975	16,799,818	30,277,157

1. 資金の範囲
資金の範囲には、現金・預金・未収入金及び未払金を含めている。
なお、前期末及び当期末残高は、下記 2 に記載するとおりである。

科 目	前期末残高	当期末残高
現 金 預 金	15,995,740	16,722,472
未 収 入 金	2,509,750	1,583,900
合 計	18,505,490	18,306,372
未 払 金	1,065,422	1,506,554
合 計	1,065,422	1,506,554
次期繰越収支差額	17,440,068	16,799,818

平成24年度

日本建築協会役員会務分掌

平成24年 6月22日現在・順不同・敬称略

名誉会長 佐野正一 (株)安井建築設計事務所 顧問 野口邦彦 大阪市		
*会長 香西喜八郎 (株)東畑建築事務所 副会長 足高 晴夫 (株)きんでん 会勢・事業担当 副会長 天野 直樹 (株)竹中工務店 企画・財務担当 副会長 大井 昇二 (株)大林組 会勢・事業担当 副会長 久徳 博文 大阪ガス(株) 総務・事務局担当 副会長 設楽 貞樹 (株)安井建築設計事務所 会長職務代行 編集・研修担当 副会長 本多 友常 和歌山大学 編集・研修担当		
理事 ○印は常任理事及び委員長 ○印は常任理事		
(総務) 6名 大林 剛郎 (株)大林組 栗原 信英 栗原工業(株) 佐野 吉彦 (株)安井建築設計事務所 立野 純三 (株)ユニオン ○松原 徹雄 元(一財)日本建築総合試験所 ○山形 政昭 大阪芸術大学 (財務) 4名 奥村太加典 (株)奥村組 木村 之彦 木村工業(株) 森本 晴夫 三和建設(株) *大原 眞一 東リ(株) (編集・出版) 9名 *○井上まるみ 住まいの研究室 三柴 利雄 鹿島建設(株) 佐藤 榮一 (社)日本建築材料協会 竹中 統一 (株)竹中工務店 立成 良三 (一財)大阪住宅センター 浅野真一朗 関西電力(株) 吉村 英祐 大阪工業大学 ○米井 寛 (株)東畑建築事務所 松村 孝治 (株)東畑建築事務所 (会勢) 12名 浅沼 健一 (株)浅沼組 池内 哲郎 野里電気工業(株)	鳶田 守弘 (株)鴻池組 小橋 鴻三 清水建設(株) 近藤 徹 不二熱学工業(株) *○児玉 謙 (株)日建設計 今井 雅則 戸田建設(株) 藤井 實 エスケー化研(株) 藤原 富男 (一社)大阪建設業協会 福田 泰造 福田泰造建築事務所 *高松 隆夫 広島工業大学 中井 進 (株)日建設計 (事業) 6名 中田 誠 (独)都市再生機構 城口 俊雄 (株)大阪城口研究所 ○瀬戸川 葆 関西住宅品質保証マネジメント(株) *伴 治人 西松建設(株) 澤邊 繁克 (株)熊谷組 清王 政志 (社)大阪空調衛生工業協会 (研修) 6名 岩橋 貞雄 八千代電設工業(株) 上林 研二 地域生活空間研究所 *山田 文啓 大成建設(株) 千種 幹雄 (株)昭和設計 永原 穰 王建工業(株) 和田 克朗 元(一財)日本建築センター	
常務理事	*森本 勉	理事合計51名
監事 3名	杉山 泰生 元(社)日本建築協会 三木 徹 (株)安井建築設計事務所	前田 隆司 (株)前田商会

注：*印は新任

細則抜粋 第17条 会務分掌理事のうち若干名を常任理事に選任する。

平成24年度

日本建築協会評議員

議長：三木 敏男

副議長：嘉納 秀一

平成24年 6月1日現在・順不同・敬称略

区分	任期 (23.6.1～25.5.31)	任期 (24.6.1～26.5.31)
技術 2		三木 敏男 (株)サングローブ 村上幸三郎 村上デザイン事務所
総合 12	肥後 行人 (株)鴻池組大阪本店 浅野 博光 (株)奥村組西日本支社 重見 法人 三井住友建設(株)	川崎 博章 (株)浅沼組 川本 勝一 安藤建設(株) 赤松 千州 (株)竹中工務店 *村田 俊彦 (株)大林組 山本 清彦 戸田建設(株)
	今西 邦夫 (株)今西組 伊藤 忠昭 (株)金山工務店	中道 正伸 (株)中道組 原 眞一 コーナン建設(株)
電気 4	嘉納 秀一 三宝電機(株) 嶋田 雅景 (株)クリハラント	河島 秀光 (株)きんでん 森 博明 三和電気土木工事(株)
空調 3	吉武 秀幸 (株)三冷社西日本支社 若林 尚史 若林設備工業(株)	安原 和利 (株)精研
建材 2	深江 隆司 アスワン(株)	*森村 泰明 森村金属(株)
中国 4	清田 剛一 (株)大方工業所 村重 保則 現代建築設計事務所(株)	國澤 幹男 國澤企画・監理 嶋津 孝之 広島大学
東海 6	後藤 利秋 (有)和光建築計画研究所 中村 哲士 アトリエーN 篠原 佳則 (株)安井建築設計事務所	小宮 三辰 三辰設計 *河田 克博 名古屋工業大学 芳山 明久 東海支部 幹事
京都 3		長瀬 博一 (有)長瀬建築研究所 高田 光雄 京都大学 山田 昌次 花豊造園(株)

15人

21人

総計36人 *印は新任

平成24年度

日本建築協会支部長 (順不同・敬称略)

京 都 上林 研二 地域生活空間研究所

中 国 *高松 隆夫 広島工業大学

東 海 福田 泰造 福田泰造建築事務所

注：*印は新任

平成24年度
日本建築協会委員

■編集委員会

会誌「建築と社会」の企画・編集

◎米井 寛／東畑建築事務所

○勝山 太郎／日建設計

●特集小委員会

計画分科会

〈計画系〉

飯田 匡／大阪大学大学院

鈴木 克彦／京都工芸繊維大学大学院

高橋 和也／大阪市計画調整局

田中 直人／摂南大学

*不動 剛志／東畑建築事務所

紅谷 昇平／人と防災未来センター

松田奈緒子

三宅 次郎／阪神電気鉄道

△守井 辰／日建設計

吉村 英祐／大阪工業大学

〈建築計画系〉

荒木 宏之／大成建設

*大西 広朗／東畑建築事務所

*清原 健史／安井建築設計事務所

静 茂夫／大建設計

下坂 浩和／日建設計

野田 隆史／竹中工務店

*福田 容明／鹿島建設

*矢嶋 陽平／鴻池組

△米山 剛史／UR設計

〈インテリア・住宅系〉

海老原治男／大林組

*川合 隆之／積水ハウス

*小西 貴宏／都市再生機構西日本支社

黒柳 亮／竹中工務店

*谷垣 浩一／日建スペースデザイン

ペリー史子／大阪産業大学

△間瀬 一博／安井建築設計事務所

構造分科会

秋田 智／安井建築設計事務所

石田 大三／日建設計

岸本 光平／竹中工務店

小芝 淳一／ZEN建築構造事務所

志摩 好宣／鴻池組

瀧野 敦夫／奈良女子大学

角田 耕一／大林組

△橋本 宗明／北條建築構造研究所

松村 健／東畑建築事務所

向井 洋一／神戸大学大学院

設備分科会

△赤澤 正治／竹中工務店

*岩城 憲治／大林組

梶井 宏修／近畿大学

北野 勝也／きんでん

*樺田 輝雄／大阪市都市整備局

谷野 太志／新菱冷熱工業

夏井 重行／元・富士ネオ工業

野崎 正二／大阪市都市整備局

橋本 直樹／日建設計

福谷 周／安井建築設計事務所

梶井 貴廣／総合設備コンサルタント

宮崎ひろ志／関西大学

村上幸三郎／村上デザイン事務所

施工材料分科会

桜井 和男／竹中工務店

△高橋 秀一／大和ハウス工業

中川 恒／鹿島建設

*中野 敬史／大林組

藤丸 啓一／清水建設

渡邊 聡／日本建築総合試験所

法令分科会

*岩見 吉剛／兵庫県住宅建築局

*越智 有子／大阪市建築指導部

河野 学／元・大阪府立工業高等専門学校

*小松 輝樹／堺市建築都市局

△*平山 英／大阪府建築指導室

吉田 純／京都市建築指導部

*吉岡 忠／奈良県土木部建築課

鷲尾 真弓／神戸市建築指導部

●作品作風小委員会

居内 章夫／徳岡昌克建築設計事務所

池上 明／エーアイアーキテクト スタジオ

○稲垣 和江／イナガキケンチケンキュウシヨ

井上 雅祐／大林組

加嶋 章博／摂南大学

*菊池 浩輔／安井建築設計事務所

倉橋 尉仁／東畑建築事務所

倉渕奈千子／田中啓文総合建築研究所

澤田 純一／兵庫県県土整備部

輦野 淳司／竹中工務店

豊田 充広／高松建設

鳥居 久人／昭和設計

西田 佳代／日建設計

芳谷 晴彦／清水建設

増田 敬彦／増田敬彦一級建築士事務所

*廻 はるよ／京都造形芸術大学

●広告企画小委員会

*小川 雄介／竹中工務店

*小山 昭／東畑建築事務所

権代 晃／清水建設

永平 達也／大林組

○前田 衛／日建設計

山辻 直樹／大成建設

■事業委員会

見学・講演・説明・展示・懇親会などの企画および実施

◎瀬戸川 葆／関西住宅品質保証マネジメント

○夏井 重行／元・富士ネオ工業

○南 次郎／元・浅沼組

●情報見学小委員会

△大喜多孝哉／大林組

石井 太志／日建設計

伊藤 好之／清水建設

岩下 智／鴻池組

河合 哲夫／竹中工務店

北野 勝也／きんでん

小平 弥史／昭和設計

田崎 祐生／武庫川女子大学

下記のとおり各委員会委員を委嘱しました。

◎委員長 ○副委員長 △幹事 ☆顧問 *24年度新委員 所属名は略称 順不同・敬称略

*植田 豊／ジェイアール西日本コンサルタンツ

寺西 興一／摂南大学

豊田 充広／高松建設

樋上 新治／ランシプランニング

福島 隆／鹿島建設

三浦 憲／大林組

森 雅章／安井建築設計事務所

脇田 隆史／東畑建築事務所

■出版委員会

建築に関する図書の企画・編集・刊行、ならびに講座の企画・実施

◎井上まるみ／住まいの研究室

上原 正行／U建築工房

神谷 剛／竹中工務店

*菅原 敏晃／竹中工務店

田中 正司／鹿島建設

玉水 新吾／ドクター住まい

仲本 尚志／竹中工務店

*西 博康／清水建設

藤本 暢子／神田建築工房

藤山 宏／造景空間研究所

*森根 義久／日建設計

☆山田 修／修建築事務所

■教育委員会

建築教育についての調査・研究、講習会の企画・実施、ならびに工高生デザインコンクールなどの企画および実施

◎山形 政昭／大阪芸術大学

●講習会小委員会

池内 昌志／浅沼組

大村 泰正／清水建設

*勝野 哲博／戸田建設

阪井 聡／大林組

清水 健司／竹中工務店

白塚 芳郎／鴻池組

山下 敏彦／鹿島建設

*吉永 英樹／松村組

●工高生教育小委員会

宇都 直人／大阪市立都島工業高校

岡本 展好／大阪市立都島工業高校

*加治 大輔／大阪芸術大学

門脇 裕之／大阪市立都島工業高校

谷口 幸雄／田建設計・マネジメント

寺地 洋之／大阪工業大学

永島 敏郎／安井建築設計事務所

中村 眞二／東畑建築事務所

●大阪府住まいまちづくり教育普及協議会

大喜多孝哉／大林組

川上比奈子／摂南大学

■建材委員会

建材コンサルタント・新建材の紹介

◎松原 徹雄／日本建築総合試験所

*阿部 泰浩／都市再生機構西日本支社

上原 優一／清水建設

河津 龍大／日本建築総合試験所

菅 知史／鹿島建設

阪本 重信／大成建設

新谷 英夫／奥村組

徳山 正司／鏡高組

豊永 秀男／竹中工務店

西出 浩／大建設計

松田 俊幸／大林組

松本 章／東畑建築事務所

安江 広／日建設計

☆和田 克朗／元・日本建築センター

■特別委員会

100周年に向けた記念企画の実施

●関西の建築界／群像

◎本多 友常／和歌山大学

*伊藤 翔／大林組

奥 貴人／安井建築設計事務所

*神田 泰宏／竹中工務店

久下 武彦／日建設計

國本 暁彦／竹中工務店

*黒川 祐樹／日建設計

*駒井 洋次／昭和設計

杉山 美納／東畑建築事務所

*中川 卓／日建設計

*中村 圭祐／竹中工務店

中村 祐記／大林組

*藤原 芳寿／昭和設計

*三谷 勝章／大林組

*三宗 知之／東畑建築事務所

*三矢 大祐／東畑建築事務所

●史料研究会（再読 関西近代建築）

◎山形 政昭／大阪芸術大学

安達 英俊／安達英俊建築研究所

石田潤一郎／京都工芸繊維大学

植松 清志／大阪人間科学大学

梅宮 弘光／神戸大学

桐浴 邦夫／京都建築専門学校

酒井 一光／大阪歴史博物館

橋寺 知子／関西大学

吉田 高子／近畿大学

和田 康由／大阪市立都島第二工業高校

☆坂本勝比古／神戸芸術工科大学名誉教授

●10年委員会

◎設楽 貞樹／安井建築設計事務所

赤木 隆／日建設計

門野 陽／鴻池組

川上比奈子／摂南大学

熊田 将男／安井建築設計事務所

清水 健司／竹中工務店

△菅原 幸也／日建設計

△中村 文紀／東畑建築事務所

○前川 治彦／前川治彦建築研究所

*三井 達雄／大林組

出版委員会企画 第35回〈プロのノウハウ〉 講座

若手技術者のための 『現場直伝！ 躯体工事の100ポイント』

この講座は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。(2単位)
(社)大阪府建築士会、(社)日本建築
家協会(2単位)



企画 (社)日本建築協会
著者 中川 徹
発行所 (株)学芸出版社
発行日 2012年6月1日
体裁 四六判 220頁
定価 2,200円+税

日時 2012年 8月28日(水)
18:00~20:00
会場 (社)大阪府建築士会
*大阪市中央区谷町3-1-17
ジョイント大手前ビル5階
講師 中川 徹
定員 40名(先着順)
受講料 会員1,500円、一般2,000円、
学生1,000円
テキスト 『現場直伝！躯体工事の100
ポイント』
当日特価2,000円(税込)
(ご持参の方は購入不要)
申込 ①催し名「第35回プロのノ
ウハウ講座」
②氏名
③会員・一般の別
④所属
⑤受講票郵送先住所、〒
⑥連絡先電話番号
⑦CPDを申請される方は、
申請先の団体名を、お知
らせ下さい。
申込先 (社)日本建築協会編集事業課
TEL: 06-6946-6981
FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaaj.or.jp

スーパーゼネコンの技術部長を勤めら
れた著者とは、日本建築協会で10数年
来のお付き合いである。

私は施工会社設計部で主に計画、デザ
インの分野を見ていたので、構造、施
工分野のことを評することに少々ため
らいはあった。しかし通読して、「き
わめてわかり易く書かれている」と納
得できた。

前書きに若者世代の風評イラストが
描かれているが 近年の建築業界の
現状を見事に捕らえている。そして各
章ごとに分類されている項目が、多
すぎず、少なすぎず、十分解説されて
いる。永年にわたり後輩の指導をしてこ
られた蓄積が読み取れた。

各項目について、左ページに文章、右
ページに図表、写真、イラストをと著
者自ら企画され、短文で要領よくまと
めることに腐心されたと伺っている。

小生が非常勤講師をしていた時、生情
報に対し、大学生たちが敏感に反応し
たことを思い出す。だから構造、施工
系の授業には打ってつけの副本になる
だろう。

耐震補強工事のことも含め、法規改正
後のフォローも行き届いている。

打放しコンクリート、目地の話、PC
工事のことなどは デザイン系の若手
技術者にも、ぜひ読んでもらいたいも
のだ。

(出版委員会委員長・元竹中工務店
大阪本店設計部設計部長 上原正行)



●中川 徹 (なかがわ とおる)
1946年 三重県に生まれる
1971年 名古屋大学工学研究科修士課程卒業
同年4月 清水建設入社
1992年 大阪支店(現・関西事業本部) 建
築技術部長
2005年 関西事業本部大阪支店品質長
2011年7月 清水建設退社 現在に至る
■在任中の主な社外活動
1992年~ 京都工芸繊維大学非常勤講師
日本建築協会建材委員会委員
同 教育委員会委員
同 出版委員会委員
2000年 日本建築協会評議委員
2002年 日本建築業協会関西支部技術専門
委員会委員長
2006年 大阪建設業協会建築委員会副委員長
■著書
・『建築を志す人々へ』共著 1997年 (株)学
芸出版社
・『建物の結露 トラブル事例と解決策』
共著 2003年 (株)学芸出版社



〔会場地図〕
地下鉄谷町線・中央線「谷町四丁目」駅
1-B出口上がってすぐ

どうぞよろしく!

(社)日本建築協会常任理事・出版委員長
住まいの研究室室長

井上 まるみ



建築関係団体の老舗である日本建築協会の平成24年度理事という大役を仰せつかることになりました。長年にはなりますものの出版委員会の末席にいらしていただいております私が、山田修先生、上原正行先生という大先輩の後、常任理事並びに出版委員会委員長という役を引き継がせていただくことになりましたものの、どうお役に立てるのであろうかと心の中は心配で震えています。

日舞の初舞台をふんだ時、舞い始めてから舞い終わるまで、震えていた幼い日が浮かんでまいりました。まさに初舞台の上の私です。先輩諸氏そして会員の皆様の指導をいただき、微力ながら努力させていただきます。

◆原風景&いくつになっても

幼い頃といえば……。小学校1年生まで暮らしていたのは「黎明ヶ丘」と呼ばれた地（三重県の南のはずれの紀州）でした。3300坪の土地の中ほどに和館と洋館があり、その洋館は西村伊作が設計したのだと父から聞いていました。

「黎明ヶ丘」は対象デモクラシー期に武者小路実篤が、日向の国に起こした日本最初の「新しき村」（大正7年）に続く、日本で二つ目の理想郷、新しき村（大正8年）であったようです。

新しき村ー「皆が助け合い自己完成するよう努めよう。昼は耕して自給自足をし、夜は芸術を語り合って共同生活をする」一大正ロマンティズムの最中だった時、黎明ヶ丘に夢に向かって駆け抜けた紀州の青年達が集まっていたのでしょう。

今の仕事をするに至ったのは、もしかすれば、無意識の中に黎明ヶ丘の血と西村伊作の洋館と祖父母が暮らしていた和館を見ていたからかもしれないと……。この3300坪は幼い私にとれば、近所は遠く、1人遊びか、家族（大家族）や尋ねてくる親戚の方々とこの中で過ごした私は、それから半世紀以上過ぎているものの、皆の中に入っていくには覚悟とエネルギーを要するという情けなさを今も引きずっているのです。

◆いつも初心者

今、小さな設計事務所を東京、大阪で開設しています。住まいを作品と呼ぶことへの疑問を感じ、住まいを設計するとは？を自問自答する中、暮らしを設計すること、子育てのこと、食事のこと、などなど、日々の暮らしをどう考えるか、そしてその中に文化の伝承があり、それを忘れないように……。このようなことを考え、住まいの設計をしています。

事務所を開設して早や25年を迎えますが、家族家族により、ハード面においても心の面においても1件1件異なるものであり、“これでいいのだろうか”といつも初心者なのです。

◆想い

生活者に建築やまちへの理解・知識・感覚が育っていけば、生活者の中に建築が寄り添っていき、しいては日本のまちも魅力的なまちになっていくのではないだろうかと思いを馳せています。それには生活者の方々へ、その方々がわかることばで発信することだと思います。「わかってくれなくて困る」「困った人だ」と専門家の口からよく出ますが、この感覚では伝わっていかないのです。



設計した住宅のひとつです

日本建築協会の活動の1つともなっている「大阪府住まい・まちづくり教育普及協議会」では、子供達への出前授業を行っています。子供達が日々の暮らしの中で小さい行動を、そして大人になった時に大きな目で建築・まちに対しての大きな行動が出来ることを願って、リーフレット作りも進行中、その担当として微力ながら頑張っています。



生まれ育った紀州・熊野



ミラノサローネ出展の椅子
「四季を羽織る」

建築と社会

ARCHITECTURE
and SOCIETY

7 | NO.1084 | 2012
日本建築協会

■特集予告

- 8月号／巨大地震に備える
- 9月号／第59回青年技術者

印刷 2012年6月26日
発行 2012年7月1日
発行人 社団法人日本建築協会
発行所 社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電話 06-6946-6981
印刷所 ㈱中島弘文堂印刷所
定価 1200円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます。

J o u r n a l o f t h e A r c h i t e c t u r a l A s s o c i a t i o n o f J a p a n

特集●建築と窓

【総論】		
建築と窓●香山壽夫	18	
【各論】		
各論1 茶室と窓●中村昌生	22	
各論2 ロマネスクとゴシックの窓—霊性の光二態●西田雅嗣	24	
各論3 近代主義建築と窓●千代章一郎	26	
各論4 近代日本の建築と窓●酒井一光	28	
各論5 ライトの窓 その変容の意味●水上 優	30	
各論6 ルイス・カーンと窓—自然光と人間をめぐる洞察の軌跡 ●松隈 洋	32	
各論7 マドを通して建築をみる●古谷誠章	34	
各論8 フェルメールと窓●小林頼子	36	
【編集後記】	38	

会告	会長就任ごあいさつ、総会議決のお知らせ、通常理事会議決のお知らせ、臨時理事会議決のお知らせ、評議員会議決のお知らせ、平成23年度事業報告書、平成23年度決算報告書、平成24年度日本建築協会役員会務分掌、平成24年度日本建築協会評議員、平成24年度日本建築協会支部長、平成24年度日本建築協会委員、『現場直伝！躯体工事の100ポイント』出版記念講演会	1
種々雑感	どうぞよろしく！●井上まるみ	10
作品作風	甲南女子中学校・高等学校 京都産業大学壬生校地むすびわざ館および 付属中学校・高等学校	12 14
gallery	石あかりロード●山田浩之	16
法令コーナー	創建当時の姿に復元—大阪府庁「正庁の間」85年ぶりの お色直し—●石塚なぎさ	39
関西の建築界 群像	須賀定邦●杉山美納	40
構造の頁	低炭素型のコンクリート「クリーンクリート®」の建築 物への適用●辻 靖彦	42
再読 関西近代建築	綿業会館●安達英俊	43
入賞発表	第11回読者と選ぶ「建築と社会」賞入賞発表	47
information	KATAGAMI Style—もうひとつのジャポニスム、ベルリ ン国立美術館展 学べるヨーロッパ美術の400年、開館20 周年記念 マックス・エルンストフィギュア×スケープ、 ハウステンボス美術館所蔵 M.C.エッシャー展 変容・無 限・迷宮、美術の遊びとところV 三井版 日本美術デザ イン大辞展、夏季特別展 空想動物の世界—聖なる古代 の物語、企画展Ⅱ 京都画壇の画家シリーズⅣ 没後70年 竹内栖鳳展、「建築仕上診断技術者」講習	53
月間の動き	平成24年5月	60

今月の表紙

作品：國府理 撮影：豊永政史 協力：アートコートギャラリー



Natural Powered Vehicle

2004年／セイル付き自動車／700×130×410 cm

「今日は風がないので到着はいつになるか分からないな。」京都から東京まで数時間で行ける世の中で、そんな暢気なことを言ってみたくて、軽自動車に小型ヨットの艀装品をそのまま移植して作った。しかし撮影のために訪れた水辺では、ヨットと同じ装備を持ちながら水面を自由に滑ることも叶わず佇む後姿が少し寂しそうに見えた。（國府）



所在地——神戸市東灘区森北町5-6-1
敷地面積——37,578.28㎡
建築面積——3,047.56㎡
延床面積——10,317.19㎡
構造規模——RC造（一部SRC造、S造）地上4階
工期——2010年12月～2012年2月
最寄駅——JR甲南山手駅
撮影——時空アート

甲南女子中学校・高等学校

中高一貫教育の名門私立女子校の新校舎である。

90周年を迎えたこの甲南女子中学校・高等学校には2つの大きな特長がある。
1つ目は恵まれた立地環境。神戸・六甲の豊かな自然の恵みに抱かれた標高75mの敷地からは、大阪平野から瀬戸内までパノラマで一望でき、さながら緑に抱かれた展望台にいるようである。そして2つ目は積み重ねてきた歴史。既存校舎群は、庭から茶室に至るまで、すべて村野藤吾氏の作品であり、40年以上経たぬ今なお、独特の風合いを醸しながら皆に愛されている。新校舎の計画にあたっては、これら2つの特長を最大限に活かし、甲南女子ならではの校舎づくりを目指した。

■風と光と緑の学び舎

建物中央に3層吹き抜けの「光のアトリウム」を設け、それを取り巻くように教室を配置した。六甲の自然の恵みを建物内部まで導き入れ、次代を担う生徒たちが、風・光・緑といった自然の中で、大いに学び、語らい、活動し、それぞれの心象風景としていつまでも記憶に残る学び舎づくりを目指した。

■伝統と創造の学び舎

既存校舎への増築であるため、新校舎は村野作品との調和に配慮して、素材、色彩、意匠等を決定した。さらに、新校舎から村野氏独特の造形美や庭を望める計画とすることで、甲南女子の長い伝統に対して、敬意を表した学び舎としている。

■肌で感じられるエコスクール

「光のアトリウム」を通して自然通風・自然採光を促進する構成とし、屋上芝生広場を設ける等、学校生活を通じて、生徒が環境への取り組みを肌で感じられるエコスクールとした。

また、太陽光発電パネルで普通教室の照明用電力をまかない、さらに建物の照明を全てLED化する等、先駆的な取り組みを行っている。

(藤原直樹／双星設計 倉橋樹仁／東畑建築事務所)



村野藤吾氏の庭を望む新校舎



新校舎外観



大阪平野から瀬戸内までを望む立地環境



眺望のよい普通教室



六甲山を背景とした屋上芝生広場



新校舎階段



所在地——京都市下京区中堂寺命婦町1,1-10
敷地面積——23,827.71㎡
建築面積——12,647.11㎡
延床面積——34,948.51㎡
構造規模——RC造 SRC造、S造、地下1階、地上4階
工期——2011年1月～2012年2月
最寄駅——JR山陰本線（嵯峨野線）丹波口駅
撮影——古川泰造

京都産業大学壬生校地 むすびわざ館および 附属中学校・高等学校

「通り」が織り成す「街」の学び舎

“地域とつながり、社会との連携の中で「知」を発信し、総合的な教育の場を形作る”—このコンセプトのもと、学校法人京都産業大学が、創立50周年記念事業の一環として京都・壬生の地に建設した、大学施設「むすびわざ館」と「附属中学校・高等学校」である。事業主のコンセプトを体現する建築として、地域の文脈、周辺環境との関係性を軸に、「通り」が織り成す「街」のような学校づくりを目指した。

学校全体を貫く大きな「通り」と、大小様々に交差する「通り」が形成する共用空間に、中庭やデッキテラス、吹き抜けが彩りと変化を与え、光、緑、風といった自然の要素が建築の内外を繋いでいく。結節点となる場所には溜まりとなる空間を配し、「通り」が単に諸機能を繋ぐ廊下ではなく、それ自体がコミュニケーションを誘発する装置として学校の骨格をなすよう構成した。教室や図書館、体育館などの機能空間だけでなく、それらを繋ぐ共用空間の豊かさが学校建築の大切な要素となる。この学校の「通り」は、まさに「京の通り」のようにひとつの「街」を形成し、建物の内外の境界を超え、生徒たちの成長する姿と共に地域へとつながっていく。

(梅田善愛・瀬山充博・木村直記／竹中工務店)



2 階平面図



gallery

石あかりロード

石彫家

山田 浩之

香川県高松市牟礼町は、世界一高価な花崗岩“庵治石（あじいし）”の産地として有名です。

“石の町・牟礼町”には、源平屋島合戦の史跡が数多く残され、牟礼町をもっと元気な町にするための「むれ源平まちづくり協議会」が発足しました。

町内外の有志が集い、「原風景」をテーマに牟礼町の良さについて何度も議論し、行き着いたのが「源平史跡」と「石材産業」でした。この時代背景の違う二つを一緒にPRする事は容易ではありませんでしたが、史跡と史跡をつなぐために石あかりを設置するアイデアがだされました。これが「石あかりロード」です。これにより「むれ源平まちづくり協議会」が目指した“牟礼町の二つの良さ”をコラボレーションさせることができました。



山田浩之（やまだ ひろゆき）

1967年 香川県に生まれる

1986年 有限坂本石芸社・坂本清氏（伝統工芸士）に師事

1991年 山田忠石材で父の仕事を継承

1993年 新構造展に初出品、裸婦石膏像で新人賞受賞

企画編集 居内章夫（作品作風小委員会）



建築と窓

「窓を征するものは建築を征する」と言われる。すなわち窓は、外部に対してはその建築の表情を形づくる主要な要素のひとつであると同時に、内部に対して光や風や景色をいかに取り込むか、また、外部と内部をいかに繋ぐか、を通して建築空間の生成を決定的に特徴づける要素でもあるからだ。窓を読み解くことで、その建築を設計した者の思想をたぐることもでき、建築空間を探求する者にとって、窓は永遠の関心事のひとつといえる。

今特集では、古今東西の建築の空間生成において窓がどのような役割を果たしているのか、また、過去に建築家（または画家）が何を考えてどこにどんな窓をつくってきたのか、等をいくつかの事例を通して考察することで、建築空間と窓の関わりについて再考する機会としたい。

編集委員 米山 剛史

【総論】

建築と窓

香山壽夫

【各論】

茶室と窓

中村昌生

ロマネスクとゴシックの窓

西田雅嗣

近代主義建築と窓

千代章一郎

近代日本の建築と窓

酒井一光

ライトの窓 その変容の意味

水上 優

ルイス・カーンと窓

松隈 洋

マドを通して建築をみる

古谷誠章

フェルメールと窓

小林頼子

【編集後記】

建築と窓

建築家
東京大学名誉教授

香山壽夫

1937年、東京生まれ。
東京大学名誉教授、香山壽夫建築研究所所長。
東京大学建築学科卒業。ペンシルヴェニア大学美術学部大学院修了。ルイス・カーンに師事。ペンシルヴェニア大学客員教授、東京大学教授、明治大学理工学部教授、放送大学教授、聖学院大学教授等を歴任。
おもな受賞に日本芸術院賞、日本建築学会賞、村野藤吾建築賞、建築業協会賞、アメリカ劇場技術協会賞など。おもな作品に彩の国さいたま芸術劇場、可見市文化創造センターala、聖学院大学礼拝堂・講堂ほか。著書に『建築家のドローイング』『ルイス・カーンとはだれか』『建築を愛する人の十二章』などがある。

■窓は建築の目

「目は心の窓」と言う。誰でもよく使う言葉だ。人の目を見れば、その人の心がわかる。何を考えているのか、どういう人なのか、人の目にそれは表れている。生き生きとした目に会おうと嬉しい。目によって、私たちは互いの心を伝えあっている。言葉以上に、と言ってもいいかもしれない。だから、時に、それが表れていない目に出会おうと、私たちは、とまどうのだ。不安になるのだ。

目が心の窓なら、「窓は建築の目」、と言っていていいだろう。窓を見れば、その内にある空間はどのようなものなのか、内に住む人はどのような人なのか、都市に対して、どのような姿勢で向かいあって暮らしているのか、よくわかる。窓は、いつも私たちに語りかけている。だから、稀に、窓のない建築に出会うと気味が悪い。中にどういう人が居るのか、どういうことが行われているのか、わからないから気味が悪いのだ。牢屋のような建築だ、と言うのはその故である。

カーテンウォールやダブルスキンの半透明のガラスに包まれた建物が、多くの場合、なんとなく冷たく、あるいはよそよそしく親しめない感じになるのは、そのことに通じている。ガラスや金属の素材が冷たいからではない。いくら粧っていても、目に表情のない顔は、親しめないのと同じく、建物に窓という目がないとき、私たちはそれとどう向かいあっていいのか当惑するのである。

街歩きの楽しみは、住みなれた自分の街であれ、見知らぬ旅先の街であれ、様々な窓を見ることにあるといい。窓に現れている人々の姿、生活の様子を見ることは、誰にとっても、いつでも、どこでも、まことに楽しいことに違いない。窓とは、誰にとってもそういうものなのだ。窓は、いつも、通りを行く人に向かって挨拶を送っている。楽しく散歩する人は、その窓に向かって挨拶を返す。

窓は勿論、表の通りに向かってだけでなく、様々な方向、様々な対象に対して開かれる。庭に向かって、足下の石に向かって、あるいは遠くの山や海、あるいは高い空に向かって。窓から入ってくるものは、景色や外光だけではなく、風も入ってくれば、鐘の音も

入ってくるだろう。木の葉も蝶も小鳥も舞い込んでくるかもしれない。何を、どの程度に導き入れるのか、あるいは遮るのか。それが、とりもなおさず、建築の内部空間を決定することであり、同時に、建築の外部への対しかたを決めるということにほかならない。窓が建築を決定するとは、そういうことである。窓をみれば、建築家の姿勢がわかる。従って、建築家は窓の意匠に、力を込めて向きあうのである。

1929年、ブエノス・アイレスで学生たちに向かって、ル・コルビュジェが語った素晴らしい言葉とスケッチがある。窓のかたちとその意味、そして、それに対するときの建築家の心構えの、見事な表明だ。

君は窓をどんな風につくるか。ところで一体窓とは何の役目を果たすものであるか。何のために窓はつくられるのであるか。君は本当に知っているか。知っていたら、云ってみたまえ。…

今、ひとつ、全く同等に重要な問題、君はどこにその窓を開くか。君は光が奔入する場所に従って、それぞれ相異なる感覚を生ずることに気づくだろうか。さあ、窓を開くことができるあらゆる方法を描いてごらん。そして君はそれが最上であるか、云いたまえ。(図1)

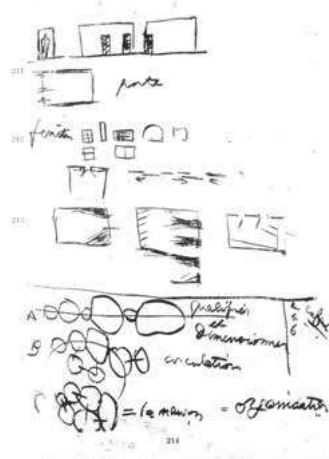


図1 ル・コルビュジェ「扉、窓」1929年
©FLC/ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2012
E0015

ルイス・カーンも伝統的な建築物を見つづける窓について問い直し、自分の設計行為を通じて考え抜いた建築家であった。カーンは、私たち学生に向かって、歴史的な様々な建築作品の図面集や写真集を示しつつ、その空間の特徴を具体的に説明したものだだったが、その関心の中心は常に空間と光、そしてそれを作

り出す窓のかたちにあった。カーンの、後によく知られるようになった言葉、
構造体は光を与え、
光は空間を作り出す。

“Structure gives Light
makes Space” (図2)

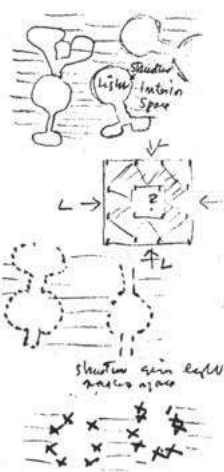


図2

は、その時、ペンシルヴェニア大学マスタークラスの私たち学生に向かって語られたものである。また、1963年、友人であるエシェリックのための住宅設計において、窓のかたちとはたらきについて、徹底的なスタディを繰り返し、窓についての根源的な問い直しを行った。一言で言うなら、カーンは、窓のはたらきを、一度ばらばらに分解して根源に還元し、それぞれに最適なかたちを対応させた上で、再び組み立て直し、その結果、これまでにない生き生きとして多様な窓を生み出した。(図3) そしてその窓は、抽象的なガラスの箱という貧困に墮していたモダニズムの建築に新しい生命を吹き込んだのである。



図3

■窓の第一形式／「壁の穴」としての窓

窓のかたちについて考える時、「壁の穴 (Hole in wall)/壁の開口」という理解が、最も一般的なのだろう。子どもの描く絵も、絵本の中の家の窓も、大体、壁に開かれた穴、すなわち開口として描かれている。建築空間とは、これもわかりやすい一般的理解として述べるな

ら、ある物的囲いによって、人間を包む空間を限定したもののことである。そしてまた、その物的な囲いのわかりやすい例は壁である。そしてまたその囲いは、人間を中に包み込みつつ、外とつながっていなければならない。すなわち、建築空間とは、閉じたま同時に開いているものでなければならない。従って窓の最も一般的でわかりやすい理解は、「壁の穴」というものであることは至極尤もなることになる。

その一般的といっている基本的な建築理解を古典主義様式として定式化し、歴史理解として体系化し、建築設計教育のシステムとして確立したのが、フランスの美術アカデミーと美術学校 (エコール・デ・ボザール) である。日本においてこのシステムは定着しなかった。明治において、一瞬移入されたかにみえたが、続いて流れ込んだモダニズムの嵐の中で消え去った。いや、消え去ったというよりは、定着せず理解されてもいないに関わらず、批判の対象として残存してきたと言ったほうがいいだろう。

ところが1964年、私の学んだフィラデルフィア・スクール (ペンシルヴェニア大学の美術学部は、アメリカにおける「ボザール」の本流であった) においては、ボザールの理念はまだ立派に生きていた。カーンの建築理解がここに根ざしていることは、よく知られているので、改めて繰り返す必要はあるまい。新参者の私においても、ボザールの歴史理解、建築教育は、力強い合理性と生き生きとした具体性を持つものであることは、たちまちにして納得できるものであった。建築デザインの教育においては、全ては手法として理解され、習得されねばならない。観念ではなく、言説でもなく、手の方法、目の能力として体得されねばならない。これが、美術教育の根幹である。

初歩の第一段階で習得せねばならないのは、古典様式のオーダーであるが、これを古典主義の装飾法として受けとったら、全くの誤りで、これは、人を包み込む物的囲いをつくる基本的手法として受け取らねばならぬ。まずしっかりとした囲いをつくる。それができたら、第二段階で、それに穴を開ける。すなわち窓をつくる手法を学ぶのだが、それは内部空間をつくり出し、同時に外部空間をつくり出す手法を学ぶことである。まさに、先に述

べた、建築の原初的かつ一般的理解のうえに組み立てられているものと言っている。壁の限定がしっかりできていれば、そこに開かれる。開口部も力強く特徴あるものとなり得る。壁がつかれない者には、開口をつくる資格はない。こういう段階を順次踏んで、あのボザール卒業設計作品が示している、複雑華麗な作品世界に到達することになる。(図4)



図4

窓の設計課題の第一歩は、^{まぐさ}楣 (lintel) によって上辺を支える矩形の窓だ。しっかりとした厚い壁に穴を開くためには、楣もまわりの枠もどういうかたちと細部を持つべきか。そしてその矩形の穴は、どちらの方向の何に向かって開かれるのか、そしてそこから流れ込む光は、どのような内部空間をつくるのか。

矩形の窓の意匠においては、窓枠の線形 (モールディング) が大切なのは言うまでもないが、ボザールの様式主義はその装飾的效果だけにかかずらっていたと判断するのは誤りで、その縦横の寸法比、そして特に大切なのは、人間の目の高さに応じた窓台、楣の高さの決め方で、西洋建築が装飾法として輸入された明治日本の洋風建築教育には、それが欠け落ちていたように思われる。

窓の外観だけでなく、内からのかたちを重視する考えかたは、すでにルネサンスの理論家、建築家アルベルティが「教会堂の窓は、目の位置より高く設けよ」といった注意にすでに現れているし、窓の縦横の比例を重視したボザール教育が基本にあったからこそ、H.H.リチャードソンは、組積造建築において常識となっている縦長矩形の窓に対して、横長連続窓の面白さに気づくことができた (図5)。そしてさらに、F.L.ライトは、横長の窓

から生まれる空間の水平な連続性をさらに発展させることになったのである。



図 5

組積造の壁の開口部を大きくしようとすると、楣構造では限界があるので、どうしてもアーチを用いることになる。アーチ型の開口、特に古典的な半円アーチ（ローマン・アーチ）は、形態的に強い特徴がある。それは、半円形によって示される円の中心が、視界の中心線をつくり出して、窓が切り取る外景へ視線を強く導く力を持つことだ。アーチ窓が切り取ってくれる外景が、魅力的となるのはそのことによるので、風景を絵のように切り取って見せるために、特別な方向に向けて設けられた「ピクチャー・ウインドウ」では多用されることになる。

もうひとつ、アーチ窓は、上に凸形であって、ゲシュタルト的に上昇性をもつという強い特徴がある。視線を上へ導いたり、あるいは上方から来る光の効果や、天空への上昇性を強調したいとき、たとえばキリスト教の礼拝堂等、アーチ窓が用いられるのは、そのことに大きな理由がある。

アーチ窓を中心として、両側に矩形窓を置くと、「パラディアン窓」になる。(図6)。上昇性、中心性と水平性をあわせもち、それぞれの要素の強弱を状況に応じて加減できるところにこの窓の妙時がある。パラディオが愛



図 6

用したのでこの呼称があるが、セルリオの本でフランス・イギリスに普及したから、「セルリアーナ」と呼ばれることも多く、新古典主義の建築ではこれを用いていないものを見つけるのが難しいほど広く用いられている。

壁の開口としての窓について考えるとき、見落としてはならないのは、壁の厚みの中でつくり出される窓の特徴、すなわち窓の断面のかたちだ。壁の厚みを通り抜けていく間に、光は多様に変化し、微妙な影の濃淡が生み出され、あるいは光の強弱が制御される。これについては、言葉をあれこれ用いるよりは実例を訪れ、見るにしくはない。私がこれまで経験した数多い印象的な実例の中で、強いてひとつ挙げるなら、フランス・プロバンスの山中にシトー会修道士が自ら建設した12世紀ロマネスクの傑作、ル・トロネとなろうか。(図7)



図 7

ル・トロネを見ても明らかな如く、この光を外から最初に受け入れる内部空間である窓のまわりは、輝く空間となって際立つ。石工であれ、修道士であれ、誰であれ、この空間の素晴らしさをただちに認識したわけで、この窓のまわりの壁から、座席を削り出し、あるいは窓台を机や書見台にした。これらの座席は「ウインドウ・シート」と呼ばれ、あるいは

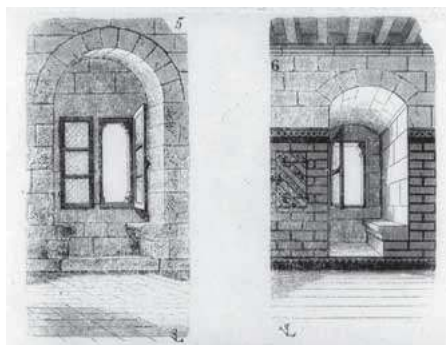


図 8

常々この空間は小さな部屋となって「ウインドウ・ルーム」と呼ばれるものとなる。(図8) ルイス・カーンはこのことを見て「窓は部屋

になりたがっている」と私たちに語った。このウインドウ・ルームを壁から外に突出させるものが「ベイ・ウインドウ」だと考えていいだろう。

■窓の第二形式／「動く壁」としての窓

閉じている壁が開くと開口部となって、光や風が入ってくる、閉じると壁、あるいは淡く光がにじみ込んで来るときもあろうが、空間としては閉じられる。これは広く建築に用いられている工夫であるので、これを広く窓として次々考えてみたい。すぐさま反論があろう。それは「窓」ではない、「戸」だ、と。日本語の用語としては、一般的には確かにそうかもしれない。しかし、この論では、言葉の定義の議論ではなく、広い意味での、空間の囲いの開口の問題を論じたいので、「動く壁」を窓の第二の形式として考察したい。ただし、同じ開口部でも、「入口」、あるいは「門」は、訪問者、客の出入りを制御するという、固有の大課題を持った建築の基本要素であって、それはここでは論じないことにする。

日本のごく一般の住居の畳の部屋を考えると、庭に面して床から鴨居までふすまか障子が立てられている。その外側に板の雨戸が立てられている。その間にガラス障子があるのが今では普通だろう。夜、全部が閉められたとき、そこは閉じた壁となる。朝、開くと、朝日と共に風も、小鳥の声も一挙に流れ込んでくる。これは誰も普通に経験している日本の空間の囲い方だ。しかし、開閉するたびに、空間の性質が劇的に変化することは、初めて日本家屋に泊まった外国人にとっては驚きとなる。

床まで開く窓の特質は、床に座っている人の低い視線（通常床より90センチ位で考える）がずっと外まで通っていくところにある。これは、畳で座ることを基本と考えればあたりまえのことなのだが、建築基準法の規程する高さ、手すりや窓台をつけなくてはならないとなると、大変なことになる。従来の日本家屋や旅館の2階の手すりや窓台は45センチ位の高さになっていたのは、この視線の通りを守る極めて納得のいく決め方だった。低い位置の視線を確保してくれることに加えて、床面に沿って、足下に外気が流れてくれる快適さも、腰壁のある窓では得られない特徴である。

床まで開く窓においては、室内に入ってくる外光もそれ独自の特徴をつくり出す。外光はまず、縁先や窓際の床を照らし、そこからの反射光が下から上にはね返って次に室内奥の天井を明るくし、さらにその反射から、室内最奥へ至る。谷崎潤一郎が「陰翳礼讃」で述べている「奥の奥の部屋の……、金襴や金屏風が、……、遠い庭の明りの穂先を捉えて、ぼうっと夢のように照り返している……沈痛な美しさ」は、そのようにしてつくり出された光である。日本的な空間の特質は、このような光の受け方によって生み出されることに着目すると、またその面白さは限らないものとなる。

上に突き上げて開く窓は、原始的な建物から今日まで、世界各地で広く用いられている窓である。造作も操作も簡単なことが、古くから用いられる理由であろうが、この窓も、開閉によって劇的な空間の変化をつくり出す。平安時代に現れた寝殿造において定型化した^{しとみど}蓐戸も、突き上げて、吊金物に引っ掛けて水平の位置で固定する。開くと、ぐるりと連続する開口部が庭に向かって生まれ、水平に保たれた蓐戸の下面に、庭先の外光が映る。日本的空間のひとつの典型は、ここに成立する。

蓐戸に限定せず、突き上げ窓一般について考えてみると、その良さは、はね上げる角度によって、日照や通風の程度が適度に制御できることにある。視線も、上に導くには具合が悪いが、下へ導きたい場合には、まことに効果的な窓をつくり上げる。修学院離宮の上の茶屋の蓐戸を開くと突然目下に広がる下の庭の景色などは、その好例である。(図9)



図9

突き上げ窓は、開いた時に、軒先のように開口部を雨から守る働きもある。日差しが強くと、また突然のわか雨に襲われることの多い国で多く用いられるには、そこにもひとつの理由がある。イタリアの民家の窓に、必ず

といていい程、一般的に取り付けられている木製のよい戸は、左右に開くだけでなく、その一部(多くの場合下半分)が、突き上げになっている。その開きと突き上げを様々な組み合わせで、日差しと通風、そして密集して居住している都市の視線を、巧みに制御していることに、いつも感心する。

開口部の上部をつき上げ窓にしておいて、下部を前に倒して水平に保ち、そこを縁側や縁台のようにしたり、あるいは町の商店の場合には、商品の陳列台や客の待合のように用いる例もある。そのバリエーションは、時代と地域によって実にいろいろなものがあるので、探し始めたら面白くてたまらなくなる。ロバート・ヴェンチューリは、この面白さに気づいて夢中になり、その印象をひとつのスケッチにまとめて、私にくれたことがある。そこに短く記して曰く、「傘としての屋根、家具としての壁(“Roof as Umbrella, Wall as Furniture”)。家具とは、後で取り付けて動かせるものの意で、“mobilia”=動かせるもの、という意味である。まさに「動く壁」の建築を見事に言い当てている。(図10)私の知る限

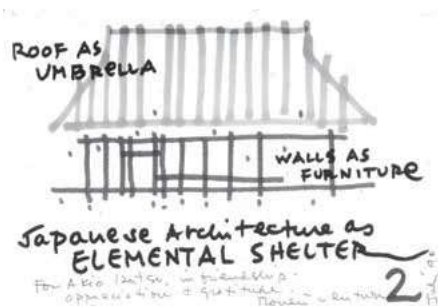


図10

りでの動く壁の建築の極めつきは高台寺の時雨亭だ。(図11)。いつも訪れるたびに、しばし口をぽかんと開けて見とれ、見ているうちになんとも爽快な気分になる。空間が爽快だけでなく、その原理的明快さが、いつも現代建築の設計の複雑さの中でもがいている心を解放してくれるからであろう。

日本の伝統的な建築の開口部を観察していると、動く壁、すなわち、板戸、ふすま、障子、あるいは格子戸等々が、それぞれに様々な大きさやかたちをとりつつ、多様に重なりあっていることに気がつく。そしてそれぞれがまた、様々な動くわけだから、その結果形成される窓は、限りなく多様なものとなる。すなわち、壁は、動きつつ、重なっているのだ。



図11

そしてこのように考えを抽象化して整理してみると、第一形式といった「壁の穴」も、壁の厚みの中で、少なくとも内側と外側の二枚、実際にはその中間に、いろいろな面が重なりあって生み出された働きであることに気がついて、このふたつは、根本において別ものでないことに気がつく。

実はこのことは、カーンが1961年、赤道直下のアフリカ・ルワンダを訪れたとき、原住民の民家を観察したことにつながるものであって、彼は「すべての窓は、その前に壁をもつべきだ」と考え、スケッチを描き計画理念をまとめた。このことが、後半生のカーンの爆発的な創作活動の出発点、起爆剤となったのである。カーンの強い影響をうけた若き友人、ロバート・ヴェンチューリが、「全ての建築において、壁は、少なくとも2枚ある」と定義したのも、ここに基づいている。

しかし、窓の面白さは、その定義の仕方や抽象化にあるのではない。そんなことで窓をいじくりまわすだけではもったいない。実際に自分の全身を浸し、全感覚で反応することにある。事例に全身を委ねるとは、観察し、あるいは創作する中で、目と手を動かすことだ。その面白さを互いに伝えあうことこそ、建築を共にする喜びにほかならない。(図12)



図12 軽井沢の香山山荘

(こやま ひさお)

茶室と窓

京都工芸繊維大学
名誉教授

中村昌生

1927年愛知県生まれ。

現在京都工芸繊維大学名誉教授、福井工業大学名誉教授、京都伝統建築技術協会理事長。年来、茶室・数寄屋の研究を通じ、日本建築の伝統を追究。1980年伝統建築技術の継承と発展のため、同志と（財）京都伝統建築技術協会を設立。

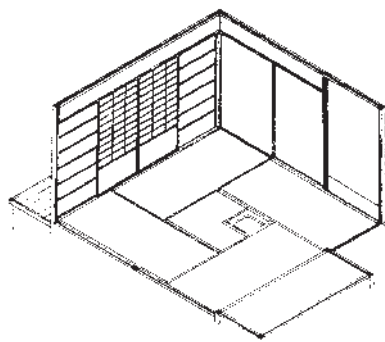
建築学会賞、日本芸術院賞、第一回圓山文化賞などを受賞。1998年京都市文化功労者。

著書に『茶室と建築』『数寄屋邸宅集成』ほか多数。

■紹鴎の茶室

四畳半茶室をはじめて完成したのは、千利休の師でもあった武野紹鴎（1555年没）であった。紹鴎四畳半は一世を風靡し、「京堺」の茶人たちはこぞってこれを建てたと、山上宗二（1590年没）は伝えている。利休もまたその一人であった。

紹鴎四畳半は、塗框で張付壁の一間床をそなえていた。そして床は唐物（名物）を飾る場所で、名物を所持しない人は「床なしの座敷」が相応であると紹鴎は説いた。紹鴎はまた、茶室にとって明るさの加減が重要であると教えていた。明るすぎたはいけないというのである。茶の湯に適当な明るさを保つには、茶室を北向に建てるのがよい、南向は明る過ぎてよくないというのが、紹鴎の主張であった。室内の明るさを、座敷の方向で調節したのは、窓がなく、客の入口からしか採光できなかったからである。



紹鴎四畳半の復元図

こうした紹鴎四畳半は、所詮「唐物持」の茶室であった。このような四畳半の流行は、むしろ「侘数寄」（侘茶）を衰退させる。「侘数寄」を茶の湯の主流にのせてゆくためには、侘数寄しかできない茶室をこそ、普及させねばならない。利休はこのような使命感を抱いたのであろう。

■利休の茶室

紹鴎が侘数寄を許したのは四畳半より狭い座敷であった。そこで利休は、二畳という極端な小室に侘数寄のための空間を創出したのであった。その成果を今に伝えている遺構が妙喜庵の茶室待庵（国宝）である。

利休はここで、紹鴎四畳半とは全く異なり、丸太の柱を立てて土壁で囲い、窓をあけると



待庵客座を見る 田畑みなお撮影

いう、草庵の構造に一変させたのである。縁も除かれ前面は土間庇となった。そして窓には下地窓（塗残窓）の手法を導入した。壁を塗り残せば窓になる下地窓は、その大きさも形も、位置も、壁面に自由に定めることが可能である。紹鴎から教えられた、茶室の微妙な明るさをつくりだすには最適な手法であった。あたかもスポットライトで室内を照らすような効果がある。これだけでは明暗の分布が際立ち過ぎるから、棹をつけた連子窓を併用して、理想的な明暗の分布を創り出すことに成功したのである。

しかし客の出入口は窓の効果を失わせる。そこで板戸をたてても不自然でない潜り（蹴口）を工夫した。客が入って板戸をしめれば、入口も壁と同じである。窓の効果だけが室内を支配することになる。そしてまた、草庵の茶室にとって、こうした窓の布置は、内外の意匠の形成に大切な要素となった。下地窓には障子をたてねばならない。そのために室内では敷鴨居や戸当りを取り付ける。それらは障子の框や組子と共に壁面の意匠を構成する。座敷の佇まいに与える影響は大きい。待庵の



待庵蹴口の壁面を見る 田畑みなお撮影

窓を見ていると、茶の湯に絶妙な明るさをつくるために、窓の大きさ、配置に細心の工夫を注いだことが伝わってくる。躰口の上の連子窓を、隅柱から僅かに隔てていることに、それがよくあらわれている。そのように決定された窓の配置が、そのまま全体に揺るぎのない静かな意匠を生みだしている。



又隠客座を見る 田畑みなお撮影

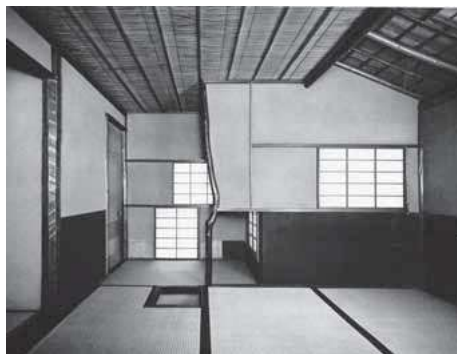
草庵の茶室にとって、窓は採光以外にも、通風・換気の機能もあり、室内の開放感の度合いも左右する。待庵は利休にとっても初の試みであったと思われ、彼の追究した侘茶の空間の理想は、晩年聚楽屋敷に設けた四畳半に示された。そこには壁面に二つの下地窓と化粧屋根裏にあけられた突上窓しかない。突上窓をあけない限り、実にほの暗い、出入口も躰口と襖一本引の茶道口だけである。極めて明かりと開放感が抑制されている。こうした空間に、精神性の深さと茶の湯の理想境を、利休は求めたのである。

■織部の茶室

利休以後、武家の茶人たちによって、草庵の茶室にも新しい傾向が推進された。

利休が縮小化を進めたのに対し、むしろ基準を改め三畳台目に広めた。利休後の茶の主流の先頭に立った古田織部（1615年没）は、三畳台目に二本襖を隔てて相伴席を付した茶室を工夫した。これは燕庵形式と呼ばれるもので、武家社会を中心に大流行した。江戸時代の数寄屋の書には、待庵と並んで茶室の代表作として取り上げられる程であった。今も京都の藪内家の燕庵として伝来している。

この茶室には、窓が10あけられている。利休流の茶室からは「織部ノ囲ニ窓多シ」と非難を浴びた。織部は窓にも、色々な効果を意図し、利休の草庵とは異なる茶の境地をつくりだそうとしたのである。



燕庵点前座を見る 恒成一訓撮影

利休はなるべく視覚的な効果を抑えようとした。織部はむしろ視覚的な効果を生みだそうとした。点前座の壁に、下に下地窓、その上に連子窓を、少し軸線をずらして色紙散らしのようにあけて、色紙窓と呼んだ。織部は何の機能も意図していない、「座敷の景」のための工夫であると説明していた。いわば点前座の舞台装置である。床の掛物に光を当てるための窓を墨蹟窓と呼ぶ。織部はこの茶室の床に墨蹟窓をあけたが、彼はそこに花入を掛け、採光を無視した。

客座の下座には、躰口上の連子窓と対する側に下地窓、そして床に対する側にやや大きく下地窓、化粧屋根裏には突上窓がある。色紙窓からの光は床前の上座にも及ぶ。このように窓が数多くあけられることによって、視覚にうつる景が豊かになるだけでなく、多様な角度から入射して、交錯し紡ぎ合う光の戯れが、主客の遊び心を誘うのである。織部は、利休の草庵には抑制されていた遊び心のある茶の境地を、草庵に求めたのである。多窓化の展開は主としてそのためであった。

■遠州の茶室

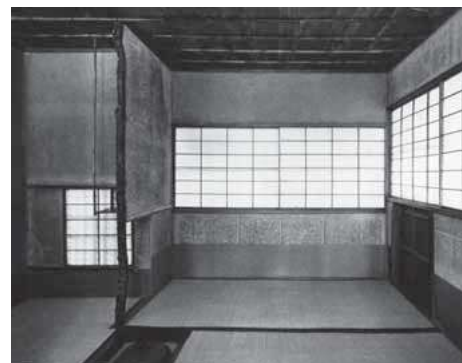
この作風をさらに推進したのは小堀遠州（1647年没）であった。彼の最も得意とした間取りは、織部のような相伴席のない四畳台目であった。親友松花堂昭乗の八幡滝本坊にも、この茶室を設けた。この四畳台目には十一の窓があけられた。遠州は点前座の上も化粧屋根裏にして、そこにも突上窓をあけた。世間では遠州の茶室には「暗き所なき由」とさえ言われた。

南禅寺金地院八窓席（重文）は、遠州が崇伝の依頼で造った確かな遺構である。縁の上から躰口に入る形式の三畳台目であるが、窓

は六窓しかない。その代り外部に面して矩折りに大きく連子窓が開かれ、ほの暗さや閉鎖感を感じさせない。先の四畳台目でもそうであったが、彼はよく、躰口の上に連子窓、さらに下地窓を重ねてあけていた。遠州独特の手法とみられるが、これは通風、換気への配慮でもあったろう。

このような多窓化の傾向は、織部や遠州に限ったことではない。例えば織田有楽（1622年没）にも九窓亭（春草廬）と呼ばれる三畳台目の遺構がある。相伴席もない三畳台目に九窓を配置するのは、かなり賑やかな壁面になるが、整然とした構成をみせている。

また窓の数で八窓庵とか六窓庵と呼ばれている遺構がある。織部系か遠州系などに属するものが多い。武家茶人で異色な作は、大和小泉慈光院の片桐石州（1673年没）作の二畳台目である。下地窓は点前座の風炉先窓だけで、客座は二方に連子窓をあけ、天井も一面に平天井で、二畳の客座を、明るく寛いだ雰囲気をつくりだしている。



慈光院茶室客座を見る 恒成一訓撮影

下地窓と連子窓は、草庵の茶室にまことにふさわしい素朴で鄙びた形式であるが、茶匠（作者）たちにとっては、窓の配置は最も厳しい仕事であった。それによって茶室の明暗の度合い、微妙な機能、意匠、座敷の佇まいが大きく左右されるのである。利休以後、時流は草庵も多窓化へ展開したが、千家は、利休以来の伝統を堅持し続けていた。如心斎（表千家七代）が利休百五十年忌に聚光院に寄付した閑隠席は、窓は二つしかなく、彼の門下の鴻池了瑛の玉林院蓑庵にも、千家の伝統が継承されている。

茶室の窓は、茶の湯の空間として聖化するために、枢要な働きを演じたのである。

（なかむら まさお）

ロマネスクとゴシックの窓

— 霊性の光二態 —

京都工芸繊維大学大学院
准教授

西田雅嗣

1958年北海道生まれ。京都工芸繊維大学卒業後同学修士課程修了。熊谷組勤務を経て1987年より京都工芸繊維大学工学学部助手。1999年に東京大学にて博士（工学）の学位を取得。現在は京都工芸繊維大学大学院建築造形学部専門准教授で、建築史・建築論を専攻。フランス国立科学研究センター共同研究員、京都市立芸術大学他の非常勤講師。西洋中世建築が専門で、毎年フランス・ロマネスク建築調査に赴くが、日仏比較建築論もフランスとの共同研究で実施。2008年に建築史学会賞を主著『シトー会建築のプロポジション』（中央公論美術出版、2006年）で受賞。フランス国立古文書学校、フランス高等研究院、ソルボンヌ大学他フランスで多数講演・講義も行う。

1891（明治24）年の本邦初の近代国語辞典『言海』には、「窓」は「間戸」の意味だと書いてある。現在の最大の国語辞典『日本国語大辞典』（小学館）も、『紫門和語類集』や『和句解』などの近世の語源解説を引いて、「戸」に関係のある意味を記す。「間戸」というのを字義通り受け取るのなら、あいだを塞ぐ戸ということであろう。日本では柱と柱の間を塞ぐものとして「窓」が認識されて来たといえるかもしれない。日本の伝統的な建築は柱と梁の軸組が基本である事から来るのであろう。日常の会話でも「窓」といったときに思い浮かべるのは、どんな建具か、アルミサッシなのか木建なのか、窓枠は、といった開口を塞ぐものに注意がいく。「建具」は「立てる」もので「穿つ」ものではない。やたらと「建具」の種類を列記してあれだけ細かく日本建築の各部の説明をしている『家屋雑考』（澤田名垂、1842年）にしても「窓」の項目はない。常用の国語辞典、例えば今手元にある『明鏡国語辞典』（大修館）や『大辞泉』（小学館）には「外界との仕切り」とまで書いてある。

「窓」はフランス語では <fenêtre> という。これはラテン語の <fenestra> から来た語で「壁に穿たれた穴」という意味である。外界と内部の間に既に確固たる仕切りがあって、この仕切りを前提として、そこに「穴」を「穿つ」のが「窓」である。ヨーロッパでの「窓」は「戸」ではなくて、「穴」として認識される。同じ「窓」といっても日本の「戸」とヨーロッパの「穴」では、全く正反対の指向である。日本人とフランス人が会話をしている、同じ窓を指差して同じ窓を見ながら話をしているのに、かたや「塞ぐ」ものとして考えて話しているのに対して、もう片方は「穴」として見て対話しているのである。1872年（明治5年）に、イギリスで出ていた本を翻訳出版した本邦初のヨーロッパの建築書『西洋家作雛形』で、日本人訳者が <opening>、<door>、<doorway>、<window> といった「開口」に関わる英単語を全く解さず、とんちんかんな訳をしたり、無視して訳しているのもうなずける。「窓」の概念がそもそも違うのである。<window>も<wind>を通す穴である。

では、ヨーロッパには「外界との仕切

り」としての「窓」の概念はないのかというと、そうでもない。フランスでは <fenêtre> の他に、「窓」をいうのに <croisée> という語もかつては使われた。近世の大工技術書などでは <fenêtre> よりも <croisée> が使われる。<croisée> とは「十字、交差」の意味で、要は「十字形の枠・棧で仕切られた窓」、もしくは「窓枠」である。<croisée> が用いられる時、「窓」は「外界との仕切り」として認識されている。

いいたいことは簡単である。「穴」としての「窓」のありかたはロマネスクの教会堂の「窓」に顕著に見られ、「仕切り」としての「窓」はゴシックの大聖堂などのステンドグラスの性格の大きな特徴だと指摘したいのである。かたや厚い重厚な壁の上にトンネルヴォールトの天井を載せた量塊的建築、かたや繊細な石造の骨組みに細い窓棧の大きな開口を持つ雲つような尖った軽やかな建築として、同じ中世の建築でありながら対立的に説明される事の多いロマネスクとゴシックである。こうしたステレオタイプ的な見方は、研究者としては用心してかからなくてはいけないのは重々承知の上で、両者の「窓」について語ろうとするとどうしてもステレオタイプの誘惑から逃れられない。ロマネスクとゴシックの移行期の建築や、地方によってはこうした対立的な見方では説明のつかない建築も多く存在するのを承知の上で、やはりロマネスク、ゴシックの根本的な建築のあり方を考えた時、この見方はやはり一定の意味を持つ。

* * *

既にキリスト教の建築が建築的な完成を遂げていた時代に書かれたテキストだから、この文章に書かれているような考えが中世の教会堂建築の形式的完成のモチベーションであったなどとはいえる筈もなく、むしろ後知恵というべきだが、13世紀後半、ゴシックの様式が既に達成され多少の変化を見せ始めた時代、マンドの司教ギヨーム・デュランは、教会建築のシンボルイズムを建築各部にわたって解いた『典礼の霊的意味』と題した書物でこういう。

「透明なガラスで出来ている教会堂の窓は、教会堂やその中に集う信者を邪魔する風や雨を跳ね返す聖なる書物である。また一方、窓

は信者の心臓であるところの教会堂の中に、(神である) 真の太陽の光を通し、窓はその中に住むものたちを照らす。窓は教会堂の内側の方が大きくなっている。なぜならば霊的な意味は内部でより広がりを持ち、字義通りの意味を凌駕するからである。窓はまた人間の五感を表現している。窓のこの形は、俗界の虚栄に惑わされる事がないように、五感对外界に対してはしっかりと閉じていなくてはならない事を示し、内部に対しては、霊的賜物をより広く、よりたっぷりと受け取れるように開いていなくてはならない事を意味しているのである。」(第24章 筆者訳)

ランスやアミアンにゴシックの大聖堂を建て、それを使っていた人達はこんな風に窓を見ていたのである。外から光を通しつつも内部を外から守る仕切りというアンビバレントな感じが良くわかると思う。そして「光」。聖書には神を「光」に比定する箇所が多数ある。「光」も、明るく照らすという意味に様々な象徴性を付与され神性の重要な一つの表象としてキリスト教では常に重視されて来た。「光」に直結する「窓」は、だから、単なる建具という役割を大きく超えて、教会堂建築のレゾン・デートルとして建築のメタフィジカルな意味の発信を担ったのである。

* * *

ロマネスクの絶頂期ともいえる1144年、パリ近郊のサン＝ドニという所に最初ゴシック建築が姿を現す。シュジェールと呼ばれる修道院長が改築したサン＝ドニ修道院の内陣である。これを最初ゴシックと我々が呼ぶ最大の原因は、その内陣空間の光輝性にある。それまでに比べるとずいぶん大きいステンドグラスが姿を現した。この大開口部実現のために、交差リブ・ヴォールトをはじめとするロマネスクが発明した様々な構造的要素の可能性を集約してゴシックが生まれた。シュジェールはこの内陣の完成時にこう自慢した。

「同様に古い側廊のプロポーションは新しいそれに調和させられる。ただし、祭壇を冠状に配した優美で非常に目につく延長部分は別で、この部分は、内部の美しさを彩る光り輝くステンドグラスの見事で途切れることない光によって全体が光輝くのである。」(『献堂録』第7章 筆者訳)

シュジェールの他にも当時「窓」について語った他の言葉があるが、それを見ると、どうもステンドグラスは「開口」というよりもむしろ「壁」、それも、外界からの光に刺激を受けて自ら内部に向けて光を発する「光る壁」の様に捉えられていたのではないかと思える節がある。<croisée>、「仕切り」である。こうした「窓」の行き着いた先が恐らくパリにあるゴシックの傑作サント＝シャペル(1248年献堂・図1)のステンドグラスである。シュジェールと対立していた12世紀の霊的世界の大立て者クレルヴォーのシトー会修道院長聖ベルナルもこういう。

「たくさんのワインの中に混ざった水の一滴は、葡萄酒の香りと色を持つまでに溶けてしまうように見えます。真っ赤に燃え立つ鉄は、最初の姿を変えて鉄と全く同じように見えます。太陽の光についても、空気が輝いているとは考えずに、空気が光に変わったと考える人がいるかも知れませんが、実は光を拡散させる空気が、自らの姿を輝きに変えているのです。同じように、聖人たちの中では、人間の感覚が、何か不可思議なやり方で、神の唯一の御心の中に溶けて流れ込んでいくのです。」(『神の愛について』第九章28節 筆者訳)

しかし、聖ベルナルを頭目とする12世紀後半のシトー会修道院に属する多くの教会堂たちは、シュジェールのゴシックとは別の「窓」を作った。12世紀後半にあっても極めてロマネスク的色彩の濃い彼らの建築は、その昔10世紀から11世紀にかけての頃に、教会堂の全体に石造のトンネルヴォールトをかけるために壁体を厚くし構造を強化しつつも、それでも神性の表象である「光」のための「窓」をなんとか確保しようとして苦労を重ねてやっと成立したロマネスクの記憶を保持する。ここでは「窓」は正に「壁」に穿たれた「穴」であり、構造と光との板挟みの間にかろうじて成立する「穴」が見せる、選ばれた「光」である。

* * *

聖ベルナル存命時代からの唯一のシトー



図1 サント＝シャペル

会建築の遺構であるフォントネ修道院(1147年献堂・図2)の教会堂に足を踏み入れてみよう。薄暗い身廊の中、真正面の内陣突き当たり至聖所にひときわ輝いて見える「窓」に目がいく。「窓」の適度な大きさが故に「光」そのものが「窓」という縁取りを持って目に飛び込んでくる。ロマネスクが構造との共存の最後に到達した「窓」の姿は、慎重に選ばれた「光」の顕現、つまり「神」の顕現<テオファニー>であった。神の存在を常に感じる場所としての修道院の「窓」には、こうした「穴」こそが相応しい。そしてこの「光」を眺める時、中世の精神性の基盤を作った教父の一人聖アウグスティヌスの次の言葉を思い起こすなら、この「光」の霊性が具体的な寓意を伴っている事に思い至るであろう。

「数に通じていないと聖書の中で転義的に神秘的に述べられた多くの箇所が理解できない」(聖アウグスティヌス『キリスト教の教え』第2巻第16章 筆者訳)

ロマネスクの修道士にとっては、何よりも「数」が、極めて厳密に正確な方法で事物の霊性を表したのである。フォントネの教会堂の至聖所では、三つの「光」が二段、そしてそのちょっと手前の上、身廊から至聖所に入る所の勝利門

アーチ上部の五つの「光」がその上に乗って、合計三段の「光」が我々に何かを語りかけている。もちろん「三」とい

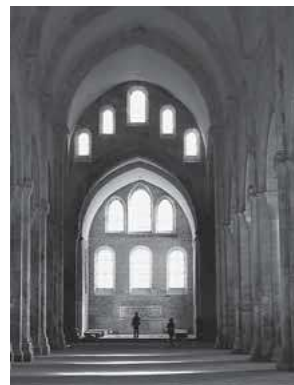


図2 フォントネ修道院教会堂

う「数」は、聖ベルナルたち中世の思想がこぞってその意味を詮索した玄義「聖三位一体」。「三」が二段で「六」。「六」は、古代の異教にあっても「完全数」として尊ばれたし、神の創造の六日間の「六」。「五」は自然現象の周期であり世界を象徴する数「五」。「聖書」を読むプロであり、数多くの「数象徴」の著書も著した中世の修道士たちにとっては、以上の意味する所はたちどころに理解されたであろう。「窓」にはこんな役割もあったのである。

(にしだ まさつぐ)

近代主義建築と窓

広島大学大学院
准教授

千代章一郎

1968年京都生まれ。

1998年京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程修了、京都大学大学院工学研究科生活空間学専攻助手を経て、現在広島大学大学院工学研究院社会環境空間部門准教授。日本感性工学会、こども環境学会評議員、建築歴史・意匠学の視点から、建築景観論、こども環境論、平和都市空間論をテーマに研究している。

日本建築学会奨励賞、日本感性工学会賞出版賞・事例研究賞、こども環境学会賞論文奨励賞、西洋美術振興財団賞学術賞等を受賞。

■「壁」を否定すること：素材の問題

「窓の歴史は建築の歴史だ、少なくとも建築史の特徴的断面をなしているといつてよからう。」

近代主義建築の主導者の一人ル・コルビュジエは、「窓」についてこのように書き、伝統的な民家から古代住居、ロマネスクやゴシックの聖堂、そして今日の鉄・鉄筋コンクリート・ガラスの時代の建築物へと「窓」の歴史を図解していく。ル・コルビュジエの描く今日の窓は、単なる方型の輪郭を持つ。不思議と原初的な民家の窓と似ていなくもない。しかし壁の輪郭が描かれていないために、今日の窓はとても小さな窓なのか、あるいは逆に床から天井まで貫くような大きな開口部なのかは不明である。

おそらくその全てが可能である。鉄筋コンクリートや鉄の骨組みは、組積造による「壁」を開放し、開口部は自由に構成できる。そこにガラスを充填すれば「窓」は完成、というわけである。

ところで、木材を用いた伝統的な日本建築において、そもそも「窓」は「間戸」であり、柱と柱の間でしかない。丹下健三が桂離宮や伊勢神宮の比例を広島ピースセンター（1949）に参照したとしても不思議ではない。近代主義建築の新しい「窓」ははじめからそこにあったというわけである。したがって、桂離宮の美を発見したブルーノ・タウトにとって、たとえば吉田鉄郎の東京中央郵便局（1931）の柱を露出したファサードに近代特性を見ることができたとしても不思議ではない。

ところで、壁の開口部を限りなく拡げていくと、「壁」の開放どころか、はじめから「壁」などない建築物も可能である。ミース・ファン・デル・ローエによるフリードリヒ街のオフィスビル（1919）は片持梁のスラブによって柱が内部に入り込み、いわゆる「壁」がない建築である。そして当然「窓」もない。もちろんブルーノ・タウトによるガラスのパヴィリオン（1914）の「クリスタル」のような、「壁」に代わる表現主義的美学も認められるが、「窓」を指摘することは不可能である。

こうして近代主義建築は、「壁」の透明性を限りなく高めていくことで、「窓」という概念

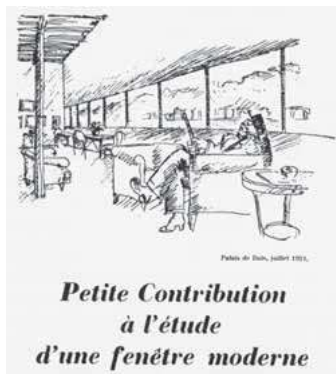
をも否定していく。建築の内外は限りなく融解し、建築物のオブジェとしての存在感は限りなく希薄になっていく。たしかに、理念としてはそうである。しかし木材の規格によって全体が規定され、その隙間に「窓」が構成される日本建築とは異なって、近代主義建築の「窓」においては量産されるガラスの規格が逆に全体のプロポーションを決定していくことにもなりかねない。統一された寸法とその反復が、近代主義が生み出した「窓」の結末である。恐ろしく凡庸で没個性的な「窓」の問題が等閑視され、あらゆるビルディング・タイプに適用されて世界を覆っていくことになる。

■「窓」を空けること：採光の問題

しかしながら、「窓」の問題は近代主義建築から完全に駆逐されはしなかった。レオン・パッティスタ・アルベルティが『建築論』（1452）のなかで、「（石を積んで）壁を建てて、屋根をかけて、孔を空ける」ことによって建築物ができるという時、この西洋の伝統的建設行為、「積む」という身体感覚が遺伝していても不思議ではない。実際、アドルフ・ロースが『装飾と犯罪』（1908）で身体の刺青のごとき装飾を否定したとしても、ロースの建築には「壁」や「窓」がやはり存在する。

一方で、日本建築の茶室の下地窓などは全くそれと対照的で、「窓」はむしろ「壁の土を塗り残す」ことであり、軸組工法ではむしろこの感覚が求められるはずである。しかし西洋の身体は、近代においても実のところ積まれた石によって庇護されていた。「窓」はあくまでそこに「穿つ」ものである。したがってそこに、ファサードのプロポーションという問題が介在せざるを得ない。

「窓」を構成するには節度が必要であり、どこまでも広く高い開口部をつくるのはよろしくない、というのがオーギュスト・ペレの主張である。鉄筋コンクリートの骨組によるフランクリン街のアパルトマン（1903）の窓は、たしかに縦長であり、古典的な表情である。ペレによれば、生きているということは立っているということであり、人間の本性に適って窓は縦長でなければならない。ル・コルビュジエによる「水平横長窓」などは休息と死の象徴であり、言語道断である。



ル・コルビュジエによる「レマン湖半の家」(1923)と同型の光溢れる水平横長窓からの風景。しかし椅子に腰掛けるオーギュスト・ペレは窓からは顔を背けている。

Le Corbusier 《Auguste Perret dans le salon d'honneur de son Palais des Expositions, 1924》Dessin (FLC 2453)

©FLC/ADAGP, Paris&JASPAR, Tokyo, 2012

E0015

ジャック・リュカン監修、加藤邦男監訳『ル・コルビュジエ事典』中央公論美術出版 2007年より転載。

ル・コルビュジエの反論は明快である。横長窓によって、光の横溢する室内が演出されるからである。しかし実は、光量の多少が問題ではない。論点が異なるのである。ペレの建築美学に対して、ル・コルビュジエは人間の物理的な衛生環境を問題としている。アリストテレスの家政学の根本問題が反復されているともいえるが、しかしその「水平横長窓」というスタイルは、「石を積む」という感覚を不安にさせるに十分である。なにしろ、壁の立ち上がりが、「水平横長窓」によって断絶されるからである。石を積み上げたロマネスクの聖堂における窓は光と影を演出する。飛梁によって可能となったゴシックのステンドグラスの透過光は天上へと視線を誘う。そのいずれもが積みあげられた石が生み出す光の芸術であり、庇護された身体そのものを不安にさせるものではない。

■「壁」を否定できないこと：風景の問題

絵画における風景の発見が近世であったように、建築の「窓」からの風景の発見も比較的新しい。ルネサンスの画家は、たとえば格子状の糸を張った「デューラーの網」(『測定論』(1525))から女性を単眼で眺めて主体と客体を明確に分離し、自律した人間が遠近法的に世界を対象化する。たしかに「水平横長窓」の「ピクチュア・ウィンドウ」は対象を枠付けて限定しているが、眺められるのは女性の身体ではない。それは静止画像ではなく、自然的風景の移ろいであり、「窓」の介在がか

えって人間の想像力を喚起する。

一方、「壁」を放棄したミース・ファン・デル・ローエは、ファンズワース邸(1951)においてその豊かな自然環境のなかに柱とスラブだけの白い骨組みを洗練させた。これを鉄筋コンクリートで置き換えれば、ル・コルビュジエの「ドミノ住宅」(1914)そのものである。そこには、「窓」はない。あるいは「壁」に代わる全面ガラスの全てが「窓」ということでもある。建築の内外の境界線は限りなく透明化し、内からの風景はどこまでも連続的につながっていく。棧も極小化し、隔てるものは取えていえばカーテンのみである。いわば「窓」の究極の姿である。ミースの描く素描は象徴的である。そこに彫刻があっても、人間は描かれない。ミースの眼差しは隠されて、どこまでも自然へと解消される風景がそこに拡がっていくのである。「壁」から開放された人間は、逆説的に自然へと埋没していく。その一方で、ル・コルビュジエの内から外への眼差しは人間の図像として必ず描かれる。

ミース・ファン・デル・ローエのごとき透明性は、このように考えてみれば、かなり特異であることが分かる(ル・コルビュジエもそうなのであるが)。新大陸で新しい社会を目指したアメリカ合衆国へ移住したことと、あながち無関係ではないかもしれない。一方、スイス生まれのル・コルビュジエは、フランスに帰化しているが、最後まで西欧人である。そして「壁」と「非一壁」をその建築作品に両義的に併せ持つ。

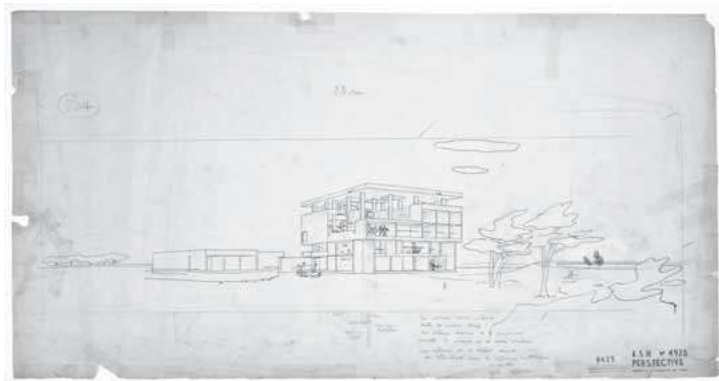
第二次世界大戦後、ル・コルビュジエはインドのチャンディガールの新都市建設に携わり、都市計画の他にいくつかの建築作品を実

践している。アーメダバードに建設されたショーダン邸(1951)はミース・ファン・デル・ローエとは対照的な「窓」がつくられている。その一つは「ブリーズ・ソレイユ」と呼ばれる日除け装置で、太陽光を緩衝させるために考案されたものである。その内部にはすべてガラスで充填されているから、この日除け装置がなければ平滑なガラス面であり、ミース・ファン・デル・ローエ的な風景が構成されるはずである。しかしル・コルビュジエの場合、内と外が直接つながるのではなく、日本建築の庇の空間のように、建築の内と外に緩衝空間が仕掛けられている。日本の伝統的な庇の空間構成を参照したフランク・ロイド・ライトの落水荘(1935)の片持梁スラブの空間構成もまた、ル・コルビュジエとは別の仕方での緩衝空間の技術である。

振り返ってみれば、ル・コルビュジエの平滑な「水平横長窓」でさえ、実作を注意深く見ると、窓の下端には決まって素描には描かれることのない水平の張り出し面があり、窓に寄り添って留まる仕掛けがなされていることに気づく。それはルイス・カーンの「ルーム」という実存的空間に穿たれた窓に寄り添う人物と類同する。「窓」は風景を眺める人間の実存という主題を内包するのである。

ミース・ファン・デル・ローエは空間の骨を透視する。ル・コルビュジエは空間を肉付ける。「窓」のあり方はそれを象徴的に示している。今日、建築を「皮膚」として語ることができるとするならば、それは近代主義建築が切り開いた人間の身体の構えとしての「窓」の多様性の延長に展開されている物語である。

(せんだい しょういちろう)



ル・コルビュジエによるショーダン邸(1951)の素描。ル・コルビュジエの眼差しは「ブリーズ・ソレイユ」の境界領域に表象される。

Le Corbusier 《Villa Shodhan》Dessin (FLC6425)

©FLC/ADAGP, Paris&JASPAR, Tokyo, 2012

E0015

図面画像 協力: Echelle-1

近代日本の 建築と窓

大阪歴史博物館
学芸員

酒井一光

1968年生まれ。東京理科大学工学部建築学科卒業。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了、同博士課程中退。現在、大阪歴史博物館学芸員。専門は建築史。著書に『窓から読みとく近代建築』（学芸出版社）。担当した展覧会に特別展「煉瓦のまち タイルのまち」（2006）、特別展「民都大阪の建築力」（2011）、特集展示「中村順平 建築芸術の探究」（2012）など。

日本が西洋の建築に目を見開いたときから、建築の潮流は大きく変わった。その流れを追うのが日本近代建築史の一側面であるが、しばしばそれは意匠・構造など設計・施工側の視点から描かれる。ところが窓を通して見た時、設計者の心のうちや生活者、使い手の目線にも自然と関心が向かう。本稿では、窓を通して近代日本の建築をみてみたい。

■擬洋風建築：西洋館とのであいの窓

幕末・明治期の大工が西洋館に触れた第一印象は、壁と窓のあつかいに対する彼我の違いだったのではないだろうか。土蔵や城郭建築など大壁造の例にみられるように、日本の伝統建築にも厚い壁に穿つ窓はあったが、開放的な開口部のほうが主流だった。そこで、西洋館に接した人びとは、大壁造の伝統的なモチーフを使いながら建築をつくったと思われる。そうした意識が顕著にみられるのが擬洋風建築である。



写真1 旧中込学校外観

窓と格闘した日本人大工の傑作のひとつが、長野県佐久市の旧中込学校だ（写真1）。旧中込学校は、明治8年（1875）に地元出身の市川代治郎によって建てられた木造2階建ての学校である。正面にヴェランダを持つコロニアル式で、中央に八角形の塔（太鼓櫓）をいただく。市川は当時としては珍しい渡米経験を持つ棟梁というが、建築全体から受ける印象は、同時代の大工が居留地の異人館を参考に建てた擬洋風建築の流れに属している。そこには、当時の特徴的な各種の窓が含まれている。まず、正面2階ヴェランダに面した窓は、居留地の異人館ではフランス窓（床から立ち上がる扉のような窓）を設けることが多かったが、ここでは中廊下の突きあたりを扉とするものの、両脇の窓は下に腰壁がある通常の縦長窓である。しかも、窓上部はアーチ

形に縁取りされているが、ガラスは嵌っていない。形だけの真似である。建物両側面にも洋風の縦長窓があるが、ユニーク



なのはその配列である。1階と2階で、窓が互い違いに配されている。内側からみると木造の柱を半間ごとに建て、その間を交互に窓にしていたことがわかる。1・2階で位置をずらしたことは、市川の創作意欲のあらわれであろう。さらに背面にまわると、まったく表情が異なる（写真2）。1階中央に出入口、2階中央には巨大な丸窓がある。江戸時代の茶室にも大円窓というものがあったが、ここではそれを参照したとは思えない。おそらく、居留地の教会の薔薇窓から着想を得て、2階に丸窓を設けたのではないだろうか。内部に入ると、2階中廊下の突きあたりにこの丸窓がある（写真3）。小学校であったからか、丸窓の位置は極めて低い。子どもの目線からも、難なくみえたはずである。丸窓の八等分された木枠の内側には、青・緑・黄・赤の4色のガラスが用いられている。色ガラスを通して見る景色は、日常の風景を一変させる。「ギヤマン学校」の異名はここから生まれたものだろう。現代人の目にも異様にみえるこの仕掛けは、当時の子どもたちに新しい世界を見開かせ、驚きを与えたのではないだろうか。明治初期、寺院や民家を転用した学校が多かったことを思う時、ここで過ごした子どもたちの空間体験は貴重なものであっただろう。



写真3 旧中込学校2階丸窓

■異人館：こころに響く窓

日本人大工が居留地の西洋館から学び、創造した窓は、形の多彩さであり、それをいかにひとつの建築物にまとめ上げるかという創造性豊かなものであった。ならば、居留地にあった建築群はどのようなものだったのだろうか。居留地は、明治32年（1899）の条約改

正とともに消滅するが、その後も外国人が多数暮らした神戸の雑居地・北野にはたくさんの異人館が残り、新たなものも建てられた。異人館の窓は、フランス窓、出窓、両開き窓など、さながら窓の博物館の雰囲気がある。窓の棧の割付けも変化に富んで美しい。



写真4 シュウエケ邸南側外観

現在、シュウエケ邸として知られる異人館は、建築家A・N・ハンセルの自邸として明治29年（1896）に建てられた。玄関は通りに面した北側だが、庭園に向けた南面がこの建築の見せ場である（写真4）。シンメトリーでありながら権威的ではなく、多彩な表情をみせてくれる。ヴェランダ、縦長窓、そしてサンルームのようなガラス張りの部屋が主な構成要素であり、煙突や屋根を除くと、その豊かでやさしい印象は窓によるところが大きい。



写真5 シュウエケ邸1階客間のボウ・ウィンドウ（中央）と出窓（右）

内からみても、窓はここに響く。外観では建築の構成要素である窓が、内部では暮らしの一部となる。そのとき、窓の棧の割付けは重要である。モダニズム建築にみられるような、大きなガラス窓が必ずしも住む人に心地よいとは限らない。むしろ、ガラス面が小さく細分化されているほど、ぬくもりを感じ、安らぎを覚える。

1階客間東面の出窓は、ボウ・ウィンドウと呼ばれる曲面を描く出窓で、窓面全体が障子のように細分化され、曇りガラスがはまる（写真5）。同じ客間の南側に大きく開かれた

出窓は、棧で細分化しながらも中央のガラス面を大きくとり、ソファに腰をおろしたとき、程よく庭への眺望を確保してくれる。隣り合う2つの窓同志は、兄弟のようでありながら対照的である。隣家に接する東面と庭のある南面への配慮から自然に生まれた、窓の形の多様性といえる。

ハンセルは、外観においてシンメトリーな構成にこだわりながらも変化に富んだ親しみやすい表情をつくり、内部では生活者の繊細なこころの変化を受けとめる窓を生みだした。RIBA（英国王立建築家協会）会員であった彼の實力を垣間みせる作品といえる。

■近代建築：光を感じる窓

大正・昭和初期は、鉄筋コンクリート造建築の普及とともに、日本人建築家が窓を自由に使いこなす時代となった。しかし、窓の形、大小、光による空間の変化など、あらゆる要素を程よく備えたものを選ぶとすれば、戦前ではレーモンドの東京女子大学チャペルに思いがいたる。

昭和13年（1938）に竣工したこの建築の上部には、窓というには特殊な、十字形や円形のプレキャスト・コンクリートの“穴”があり、そこを通して天から降り注ぐ光が独特の輝きをもたらす（写真6）。さまざまな色ガラスを透過した光が降り注ぐイメージは、戦後のレーモンドによるカトリック豊島教会などにもひきつがれた。チャペルにおける降り注ぐ光はキリスト教会の基本であるが、ここでは光が色の粒となり、無限に広がるグラデーションのように感じられる。外の景色を見ずとも、時間や天気の変ろいを意識させてくれる。

彼は東京女子大学において、昭和6年（1931）竣工の本館も設計していた。もともと図書館として設計された明るい光に満ちた内部空間は、モダニズムへの志向であると単純



写真6 東京女子大学チャペル

には言えない（写真7）。大きな窓面は、巨大な板ガラスではなく、小さく分割され表面にわずかに凹凸のある透視度の低い型ガラスから構成され、アクセントとして幾何学的な松葉模様のステインドグラスが組み合わされている。読書の空間としてふさわしいよう、眺める窓ではなく光を感じる窓を設計した点では、チャペルの鮮やかな色光降る窓とともに特色ある窓を実現したといえる。



写真7 東京女子大学本館

圧倒的な光の存在感を示した建築としては、戦後の昭和39年（1964）に丹下健三設計で完成した東京カテドラル聖マリア大聖堂などが到達点であろう。しかし、そこに設けられた光のスリットは、窓の一種には違いないが、すでに人間の身近にある窓という領域を超えてしまっている。それゆえ、戦前のレーモンドによる東京女子大学の作品群は、近代の日本におけるヒューマン・スケールな光を感じる窓の集大成のように感じられる。

■おわりに

私が日本近代の建築の窓に魅力を感じるのには、そこが建築の中でもっとも弱い部分に思えるからである。壁や屋根など、建築の明確な骨格にくらべ、窓はなんともはかない。単に外界との接点というだけでなく、一枚のガラスは人の心のような弱さ・繊細さを感じさせ、建築の中でもっとも感情移入しやすい部分である。それゆえ、人は窓を通して建築の内部を想像し、また内側から外の世界を夢みる。日本近代の建築の窓は、そのスケール感や形状のバリエーション、設計のきめ細かさにおいて、前近代や現代の建築のそれとくらべても、人の営みを強く感じさせる。近代の建築は単にノスタルジーの対象ではなく、いま一度学ぶべき点が多いことを、窓たちは語りかけてくれる。

（さかい かずみつ）

ライトの窓 その変容の意味

福山大学
准教授

水上 優

1992年3月 九州大学工学部建築学科卒業
1998年3月 京都大学大学院修士課程修了
2006年11月 京都大学博士（工学）
2007年4月 福山大学専任講師
2011年4月 福山大学准教授
『建築ガイドブック フランク・ロイド・ライト』（翻訳）丸善 2008年2月
『日本建築学会編 建築論事典』（「ライト」項目担当）彰国社 2008年9月
『現代建築家20人が語る いま、建築にできること』（翻訳）丸善 2010年4月
『フランク・ロイド・ライトの建築思想』中央公論美術出版 2013年2月（予定）

独自の有機的建築を志向する建築家フランク・ロイド・ライトにとって、「窓」とはいったい何であったのだろうか。彼の窓のデザインの変容を概観し、同時期の言説を引き寄せつつ、その意味を問うてみたい。

■プレイリー・ハウスのアートガラス

初期の住宅、プレイリー・ハウスの窓は、そのアートガラスの素晴らしさで知られる。最初期のデザインは透明ガラスだけが用いられ、単純な菱形や、増築されたオークパーク自邸食堂（1895）の窓に見られるような、単純な図形を反復させたものであった。色ガラスを用いて直線によって構成される独特なアートガラスが窓として住宅全体に一体的に展開されたのは、ヘラー邸（1896）辺りからである。以後プレイリー・ハウスでは、その1つ1つの建物に固有のアートガラスがデザインされる。ブラッドリー邸（1900）のように平面ガラスを縁取るようなデザインのもの（図1）や、リトル第2邸（1912）のように複数のアートガラスが連続する構成もあった。多くは幾何学的に構成された抽象的なデザインであったが、ダナ邸（1902）の「漆の木」のようにモチーフが明示されるものや、D. マーティン邸（1904）の「生命の木」やクーンリー・プレイハウス（1912）の「子供達のシンフォニー」のように、特別に名付けられたものもあった。

■コンクリートブロック・ハウスの2種の窓

いわゆる「第1黄金時代」の後、彼は西海岸に4件のコンクリートブロック・ハウスをデザインしているが、このうちアートガラスを用いるのはエニス邸のみであり、またこれがアートガラスの最後の作品となった。コンクリートブロック・ハウスに登場した特徴的な窓のデザインとして2点が指摘されよう。1つはデザインされたブロックに穴が穿たれ

ガラスが嵌められたものであり、もう1つは、スローラー邸における、方立なしで直角方向に突き合わされた板ガラスによるコーナーウィンドウである。前者は採光窓として、後のユーソニアン・ハウスの打ち抜きパネルにも繋がるものであろう。後者は住宅の隅部を解放するデザインとして、彼のいう「箱の解体（Breaking the Box）」コンセプトを表現している。

■ユーソニアン・ハウスの窓

上述のコーナーウィンドウは、プレ・ユーソニアン・ハウスとも言うべきウィリー邸（1933）で、決定的な変容を遂げる。すなわちキッチンと寝室のコーナーウィンドウ（図2）は方立なしで建て付けられて解放され、内部と外部が解け合うような不思議な空間を現象させるのである。このスタイルの開き窓は、落水荘（1935）（図3）をはじめ以降のユーソニアン・ハウスにたびたび採用されている。

独特な幾何学図像を打ち抜いたパネルの初出はマンソン邸（1938）と思われるが、以後ローゼンバウム邸（1939）（図4）等多くのユーソニアン・ハウスに採用される。通常は採光窓になるが、ボープ邸（1939）では寝室の窓（図5）に採用されている。穴開きコンクリートブロックの窓も、ジーマン邸（1950）のように、煉瓦造壁に組み込まれて用いられた（図6）。またコンクリートブロック・ハウスの発展である「ユーソニアン・オートマティック」では、トンキンズ邸（1954）のように、枠だけを残した中空コンクリートブロックが使われ、窓とも壁ともつかぬスクリーンを構成している。以上のような特徴的な窓以外は、ユーソニアン・ハウスの大部分の窓は板ガラスである。「箱の解体」コンセプトとして言われるごとく、「箱に開けた穴」としての開口（垂壁腰壁両付き）はほとんどなく、天井から床まで、天井から腰壁ま



図1 ブラッドリー邸アートガラス



図2 ウィリー邸コーナーウィンドウ



図3 落水荘コーナーウィンドウ

で、という窓がほとんどである。ジーマン邸リビングの窓(図7)は、上部はテラスの軒裏と連続し、下部は室内側に植栽を設けて庭と連続することが意図されている。

■アートガラスの消滅と様式化概念の放棄

プレイリー・ハウスの特徴であったアートガラスは、なぜ用いられなくなったのであろうか。1928年に、ライトはプレイリー・ハウスに採用されたアートガラスについて次のように語る。『状況に応じて変化しながら、この資源(訳注:クーンリー・プレイハウスの窓、ダナ邸の漆の木をデザインした窓)は私の作品のほとんど全てに見られるであろう。これは一般的な建物にも採用されているが、通常は過度であるか、様式化が不十分であるかだ。』[CW1-296]

ここで言われている「様式化 (conventionalization)」という概念に注目したい。ライトのアートガラスが十分な様式化を意図していることが言われている。彼は1908年、建築における様式化概念を次のように語っている。『建物とはその壁に囲まれた内の人間生活の背景あるいは枠組みであり、また外の自然の開花の引き立て役である。それゆえ建築は様式化の最も完全なものである。』[CW1-98] 様式化によって、建築は住宅内部の人間の営みの背景、枠組みとなり、また住宅外部の自然の営みに呼応する。「内 (within)」と「外 (without)」の対比において、建築はその間で両者を繋ぐ役割を担っているのである。

建築の意味を規定するこの「様式化」概念は、しかし、先の1928年の記述以降ほとんど用いられることはなくなる。人間と自然のかわり合いは彼の建築において終始一貫したテーマであるが、ユーソニアン・ハウスの時期になると、両者を結びつける概念は「スタイル」に変わっている。『スタイルは今や建物

そのものに自然な質である。スタイルは内より発展する。』[Tes229] と言われる。両概念の違いは何であろうか。端的に言えば、「様式化」概念は「内と外」の関係をいう概念であり、暗黙のうちに自然を「外」として措定しているのに対して、「スタイル」概念は「内」を全ての始まりと捉え、人間も自然も建築も、あらゆるものは「内から外へ (from within outward)」成長すると捉えているのである。

前期において、様式化概念のもとで(外なるものとしての)植物の外形を抽象化したアートガラスは、スタイル概念が主導する後期においては用いられなくなる。しかしアートガラスに託されていた個性は破棄されることなくコンクリートブロックの開口部や打ち抜きパネル窓に託される。『われわれは「キャラクター」という語を「スタイル」と、また「スタイル」という語を「キャラクター」と大きな矛盾なく使っているようだ。キャラクターとは、首尾一貫した外向きの形状をとり、その本性に調和した形態をとる、ある内向きの力の結果である。』『スタイルはキャラクターの結果である。』[CW1-268] と言われている。植物が多様な花を咲かせ、貝殻のどの1つをとっても同じものがないように、内から外へ向かって成長する有機的建築もまた、多様性と個性を有していなければならないのである。

■ユーソニアン・ハウスの窓の意味

個性を打ち抜きパネル窓等に託し、ユーソニアン・ハウスの窓の多くは板ガラスとなる。『ガラスによって壁そのものが窓となり、壁に開けられた穴として理解していた窓はもう見られない。』[ABG3-364] 室内と屋外の区別を措定しないユーソニアン・ハウスでは、そのような意味での窓はない。同時にそのような意味での壁もない。『壁は消え去りつ

つあるだろう。居住のための洞窟はついに姿を消そうとしている。私の意味する「壁」はもはや箱の側面ではなかった。それは嵐や熱さを防ぐこともでき、それが必要であるときにのみ空間の囲いであった。しかしそれはまた外側の世界を住宅のなかに引き入れ、住宅の内側を外側へ出させるものでなければならなかった。』[ABG3-166] かれがユーソニアン・ハウスで示しているのは、「内から外へ (from within outward)」と現れているあらゆるものの「在り方」である。それを告知らせる働きは、人間と物との間に開かれる「空間」にゆだねられる。彼の言説において「空間」が鍵語として用いられるのは、注目すべきことに、1928年頃からである。『その窓の使われ方は、必然的に、特徴的な新たな空間の感覚をもたらすための有効な手助けとなる。もはやドアや窓を語る意味はない。』[NH81] 先述の、方立なしで解放されるコーナーウィンドウやジーマン邸の窓は、通常の屋外屋内の区別そのものを打ち砕くことによって、内空間 (space within) を現象させることが意図されているのである。

『[建物のリアリティは、その屋根と壁とにあるのではなく、住まわれた内空間にある。]私はこれを建ててきた。』[Tes106]

ユーソニアン・ハウスでは、窓も、壁も、天井も、通常の意味でのそれとしては、存在しないのである。

[CW1]: Pfeiffer, B. B. Ed.: The Collected Writings of Frank Lloyd Wright, volume 1, Rizzoli, 1992.

[Tes]: Wright: A Testament, Horizon Press, 1957.

[ABG3]: Wright: An Autobiography, Horizon Press, New York, 1977.

[NH]: Wright: The Natural House, Horizon Press, 1954.

(みづかみ ゆたか)



図4 ローゼンバウム邸打ち抜き窓



図5 ポープ邸寝室打ち抜き窓



図6 ジーマン邸コンクリートブロック窓



図7 ジーマン邸リビング窓

ルイス・カーンと窓

—自然光と人間を めぐる洞察の軌跡

京都工芸繊維大学
教授

松隈 洋

1957年兵庫県生まれ。
1980年京都大学工学部建築学科卒業後、前川
國男建築設計事務所に入所。2000年4月京
都工芸繊維大学助教授に就任。2008年10月
より京都工芸繊維大学教授。現在に至る。博
士（工学）。専門は近代建築史、建築設計論。
2000年よりDOCOMOMO Japanメンバー。主
な著書に『ルイス・カーン—構築への意志』、
『近代建築を記憶する』、『坂倉準三とはだれ
か』、共著に『再読／日本のモダンアーキテク
チャー』、『日本建築様式史』、『原発と建築家』、
編著に『前川國男—現代との対話』など。

ルイス・カーン（1901～74年）は、建築に
何を求めていたのだろうか。彼が20世紀を代
表する建築家として私たちの前に姿を現した
のは、1953年、すでに50歳を過ぎた時点で竣
工した「イエール大学アート・ギャラリー」
からである。そのため、建築家としての歩み
は亡くなるまでのわずか20年ほどに過ぎない。
けれども、カーンの仕事を振り返るとき、そ
こからは、彼が、一つひとつの建築を通して、
時間の中の限りある人間の営みの核心部分を
どのように発見し、それにどのような形を与
えていったのか、という粘り強い格闘の痕跡
が見えてくる。そして、その過程において、
窓は、たしかに彼の考え方を育んだ大切な手
がかりだったのだと思う。そこで、ここでは、
いくつかの建物を取り上げながら、カーンの
窓をめぐる思考に迫ってみたい。

■自然光と窓の発見—「エシェリック邸」1961年

カーンはいつの時点で窓の持つ意味を発
見したのだろうか。もちろん、それは、設
計を手がけた建築の試行錯誤を通して、次
第に意識されていったのだろう。というの
も、「イエール大学アート・ギャラリー」から
「ペンシルベニア大学リチャーズ医学研究棟」
（1960年）に至るまでの間、彼にとってより
切実だったのは、機能性と合理性を追い求め、
ガラス張りの建築へと突き進んでいた同時代
のモダニズム建築の潮流をいかに相対化して、
建築の根源を見つめ直すことだったと思われ
るからだ。そのため、初期の段階では、空間
そのものの意味の探究に焦点が当てられてい
た。折しも、後者の竣工直後に行われた講演
の中で、カーンは、「建築とは思考に満ちた空
間をつくることだ、と言えるであろう。それ
は施主が指示した必要面積を充たすことでは
ない。それは、人の気持ちのなかに適切な使い
方を呼び起こすことのできる空間の創造である。」
（①p.125）と述べ、次のように語っていた。

「建築の空間は、それ自体のなかにその構
造の特性を現わしていなければならない。大
きな構造体の形態がそのまま大きな空間と
なっている場合には、それは空間ではない。
何故なら、どんな構造を選ぶかという問題は、
形に空間を与えるためにどんな光を選ぶか
という問題と同じ意味であるからである。人工

照明は、光の動きとして変化のないちっぽけ
な静的なものであり、夜の光である。それは
決して日中や季節の変化が創り出す複雑な雰
囲気に及ぶことはない。偉大な建築とは、測
り得ないものから始まり、設計の過程では測
り得るものを通じて進むけれども、最後には
再び測り得ないものとして終わっていなければ
ならない、と私は考えている。」（①p.126）

この言葉からは、自然光を受けとめる構造
をそのまま現わすことによって建築の空間に
生命感が与えられる、という考え方を読み取
ることができる。しかし、窓への意識は希薄
であり、主題化されてはいない。そんな中、
続いて手がけたのが「エシェリック邸」であ



「エシェリック邸」
1961年、暖炉の煙
突が自立して建つ

る。カーンは、「リチャーズ医学研究棟」で試
みた窓際設計が、自然光の眩しさや暑さへ
の配慮を欠いたために研究者たちの不評を買
うという手痛い失敗を経験していた。そこで、
この小さな住宅では、窓の持つ、《光を取り入
れる》、《風を通す》、という二つの機能に対応
した、《嵌め殺しのガラス窓》と《開閉可能な
板戸》を試みている。そして、何よりも、暖
炉の煙突を外壁からガラス越しに自立させて、
吹き抜けのリビングに自然光を導き入れる方
法によって、時間の移ろいを感じさせる空間
への手ごたえを得たのだろう。それは、「測り
得ないもの」をつくり出す窓の意味について
のより深い考察へとつながっていく。

■窓際を設える—「フィッシャー邸」1967年

そのことを象徴するのが、ほぼ同時期に
設計が始まり、6年後に完成した「フィッ
シャー邸」だ。この住
宅のリビングには、ベ
ンチを組み込んだ巨大
な家具のような窓が設
えられている。ベンチ
に座る人にとって、そ
の窓は、外に広がる美
しい緑を切り取り、自
然光が差し込み、刻々



「フィッシャー邸」
1967年、リビングに設
えられたベンチと窓

と移りゆく時間と季節を感じさせる装置として機能する。ここに長く暮らしたフィッシャー夫妻は、後年、次のような感想を残している。

「この家に入ってくる自然光は、夜明けから日暮れまで、変化に富んでいます。宗教的ともいえるほどに、気分が高揚するときもあります。光の筋が凹形の窓を貫通したときなど、カテドラルにいるように思われるのです。この家に住んでみて初めて、一般の住まいが、光についてあまりにも配慮されてこなかったことに気づきました。カーンの非凡な才能のおかげで、この家に「光」というもうひとつの次元を与えられているのは素晴らしいことです。」(②p.158)

この夫妻の感想のとおり、カーンもこの住宅の設計を通して窓への自覚を深めたのだろう。竣工から4年後、次のように記していた。

「部屋の要素について言うと、最も素晴らしいのは窓だ。偉大なるアメリカの詩人、ウォーレス・ステューヴンスは、建築家を励まして、次のように言った、「太陽のどんなひとひらを、あなたの建物はお持ちだろうか。」解釈するとこういうことだ。太陽のどんなひとひらがあなたの部屋に入るのか、朝から夜、今日から明日、季節から季節、そして1年を通じて、どの位の気分のひろがり、その光は与えてくれるのか。喜ばしくも、予測し難いのは、建築家が、選び取った開口部を与えたところの、自由である。その開口部において、日光の一片が、敷居や窓枠の上で遊びたわむれ、入り込み、動き、そして消えて行く。ステューヴンスは、太陽は、建物の側面にあたるまで、自らの不思議さに気がつかない、とわれわれに告げているように思われる。」(③p.177)

この文章からは、窓がいかに人間の生活に喜びをもたらしてくれる存在なのか、に気づいたカーン自身の高揚感が伝わってくる。

■ふたつの窓ー「フィリップ・エクセター・アカデミー図書館」1972年

そして、これら二つの住宅に象徴的に実現した窓は、続く図書館という建築を通して、さらなる深化を遂げていく。その設計途上で記した次のようなカーンの言葉がある。

「エクセターは外縁部から始まった。そこは



「フィリップ・エクセター・アカデミー図書館」1972年、キャレルを見下ろす

物の外周部をレンガでできたドーナツのように、本から切り離してつくった。私は内周部を、コンクリートでできたドーナツのように本が光から離れて保存される場所としてつくった。中心部はこのふたつの隣接するドーナツの結果である。すなわち、それは単なる入口であって、そこは大きな円形の開口を通して、あなたのまわり全面に本が見える場所なのである。従って、あなたは書物によって招待されていると感じるであろう。」(④p.392)

この図書館は、外周部のレンガ造の閲覧室と内側のコンクリート造の本棚の並ぶふたつのドーナツからできている。また、建物の中央には、ちょうどドーナツの穴のように大きな吹き抜けが取られ、天空から自然光が降り注ぐ。こうして、カーンの言葉どおり、外周



「フィリップ・エクセター・アカデミー図書館」中央の吹き抜けの窓

部の窓際には一人用の閲覧机(キャレル)が設置され、窓はついに一人のためのものとして用意される。一方、中央の吹き抜けにはコンクリートの大きな円形の窓が取られ、本棚に並ぶ書物が来館者を招待する神々しい存在として扱われているのである。一人のための窓と歴史を宿した書物の世界と出会うための窓、それは、カーンに、悠久の時間の中で建築が人間に与えてきた変わることのない意味を自覚させたに違いない。

■始源性への志向ー「インド経営大学」1974年

さらに、この図書館で試みられたコンクリートの円形の窓は、彼の遺作となった「インド経営大学」において、強い日差しと出会

光の存在する場所である。閲覧室とは人が窓際でひとりであるところではないか、と私は感じた。そしてこれは個人のキャレルであり、構造の重なりの中に見いだされる場所ではないかと感じた。私は建

物の外周部をレンガで

うことによって、より厳格で自由な姿となって立ち現れていく。それは、おそらく、窓を追放し、ガラスの壁に純化しようとしていた同時代の建築家たちにはなかった、次のような思考から生み出されたのだろう。



「インド経営大学」1974年、中庭を囲む校舎群

「壁は、われわれを長い間包んでいたが、やがてある時、その壁の裏側にいた男が、新しい自由を求め、外を眺めたいと望んだ。彼は開口を作るためにそれを打ち破った。壁は叫んだ、「俺はおまえを守ってやってきたのに。」そして男は言った。「君の親切には感謝しているが、時が変化を呼んだように思うよ。」壁は悲しかった。そして男は、ある良いことを思いついた。彼は、その開口の形を、優雅にアーチを描き、壁に栄光を与えるものとした。壁は、そのアーチと、注意深く作られた枠に満足した。かくして開口部は、壁の秩序の一部となった。」(③p.130)

カーンの窓をめぐる洞察は、一人の人間と向き合うと同時に、それを超越する建築の始源性への志向にまで開かれていったのである。「インド経営大学」の中庭への入口で談笑する学生たちの姿は、人間と建築に尊厳を与えようとし力を尽したカーンが喜びをもって求めた風景だったのだと思う。そこからは現代が見失ってしまった何かが発信されている。



「インド経営大学」中庭への入口

参考文献

- ①ルイス・カーン「構造と形」山本学治訳『現代建築12章』鹿島出版会SD選書 1965年
- ②ノーマン&ドリス・フィッシャー「ルイス・カーンとの7年間」齋藤裕『ルイス・カーンの全住宅』TOTO出版 2003年
- ③アレクサンドラ・ティン著、香山壽夫・小林克弘共訳『ビギニングス』丸善 1986年
- ④デヴィット・B・ブラウンリー、デヴィット・G・デ・ロング編、東京大学工学部建築学科香山研究室監訳『ルイス・カーンー建築の世界ー』デルファイ研究所 1992年

(まつくま ひろし)

マドを通して 建築をみる

建築家
早稲田大学教授

古谷誠章

1955年、東京生まれ

早稲田大学理工学部建築学科卒業、早稲田大学大学院博士前期課程修了。文化庁芸術家在外研修員として、スイスの建築家マリオ・ボッタ事務所に在籍。近畿大学工学部助教授、早稲田大学理工学部助教授を経て、現在早稲田大学創造理工学部教授、日本女子大学大学院非常勤講師。NASCA代表。

おもな受賞に日本芸術院賞、日本建築学会作品賞、日本建築家協会賞、日本建築業協会賞、日本建築学会作品選奨賞、日本建築家協会新人賞、吉岡賞など。おもな作品に茅野市民館、詩とメルヘン絵本館、ジグハウス/ザグハウスほか。おもな著書に『Shuffled—古谷誠章の建築ノート』『「マド」の思想』などがある。

タイトルに「マド」と記すのには訳がある。「窓」と「間戸」の総称としてカタカナで書くことにしている。「窓」には穴かんむりでわかるようにいわば壁に穿たれた「開口」を、一方「間戸」は日本語の「まど」の語源ともなったと言われるように、開口ではなく、むしろそこに建て込む「戸」つまりフィルターの性質を表す。「障子」がその好例で、読んで字のごとく何かを遮ろうとしている。

* * *

さてそうしてみると「窓」の方は英語の「window (wind=風)」だったりイタリア語の「lucenario (luce=光)」だったり、ともかく密実な構造体に風や光を通す開口の意味合いが強く、組積造などではその穴が綻びないよう、楕^{まぐさ}やアーチなど縁かがりが施されている。こうしたエッジの補強の意匠がペディメントやピラスターなど、時代とともに建築壁面デザインの重要な要素となっていった。

一方、「間戸」の方は柱や梁でできた、どちらかといえば開放度の高い軸組造に多くみられ、「明障子」「襖障子」のほか「格子」や「無双」など、透過すべき要素と遮りたい要素によって様々なバリエーションがある。フィルターを固定するためのフレームや中棧の意匠にも工夫が凝らされ、また多くの場合二重三重に性質の異なるフィルターを重ねて透過度を調節している。

いずれにしても建築のマドというのは、大なり小なりその両方の性質をもっており、透けつつ閉じた状態にあるとあってよい。僕は、それらのマドによって生み出される空間を「半透明空間」と呼んで研究をしてきた。開口部はもちろん、壁の部分も実は何かを遮る「間戸」となり、独立した衝立てや屏風ですらマドの一種となる。よく見れば「屏風」とは風を退けると書いてある。この観点からみた建築とマドが本稿の主題である。

* * *

ここでの僕の役割は、現代のマドについて書くとのことなので、この見方に沿って、歴史をやや遡って近代建築のマスターピースをみでみる。まずL・コルビュジェのサヴォワ邸（1929）。言わずと知れた近代建築の五原則にある「水平横長窓」は、「窓」という観点での横に長い開口部の形を指している。古代

から近代にいたる西洋の建築史は、G・ギーディオンが『建築、その変遷』で述べたように、常により大きな開口部や、より広い内部空間獲得の歴史であった。組積造の宿命で縦に細長かった開口が、次第にその横幅を広げて、J・パクストンのクリスタルパレスによって、ついに構造体を穿ち尽くし、開口部を開き切ったとされる。その上でコルビュジェがさらに成し遂げたのが、壁自体の構造からの分離、つまり構造の制約から完全に解放された「自由な立面」「自由な平面」である。自ずと古い様式からも自由になり、窓を水平に切ること、同時に立面上の任意の部分の壁で塞ぐことが可能になった。つまりこの瞬間に「自由な間戸」を手に入れた。今日のカーテンウォールなどはすべてこの延長上にあるとあってよい。

次にミース・ファン・デル・ローエのファンズワース邸（1951）。一般にこの全面ガラスの開口は、できることなら消してしまいたい「何も無いもの」としての窓だと思われるが、僕には逆に、光や風景は透過しつつ外気は厳然と遮断する「透明な壁」のように見える。この遮断が無ければ内部空間が獲得できないからだ。ミースはより開放的な内部空間の獲得を目指してはいるが、けして「外そのもの」にいたかった訳ではないと考える。その開放と遮断の意図は、ずっと以前のチューгентハット邸（1930）の大ガラスの落とし込み戸に、より明確に現れている。（写真1）



写真1 チューгентハット邸

A・アアルトのメゾン・カレ（1959）の窓は、それに比べると外部との連続の感覚が違っている。なだらかに下る庭に向いたリビングルームの大ガラス窓は、大きな軒庇の下にあって、隣の小テラスと同様、できれば無いものとして外部そのものに連続していたいという願望が現れている。アアルトの場合、外気を取り入れたり、外光を制御するために用いるためのマドは、ガラリ戸であったり板戸であったりして、寝室のマドにみるように、巧妙に組み合わせられた「間戸」そのものと

なっている。(写真2)



写真2 メゾン・カレ

もう一つ見逃すことの出来ない、興味深い事例を見ておこう。チューリッヒの街を見下ろす小高い場所に建つ、C・スカルパのツェントナー邸(1968)。ヴェネツィア出身の妻の依頼により、彼が改修デザインを行ったものだ。もとの建物はこの地域に典型的な3層のヴィラであったが、スカルパは庭側に1スパンの増築を行う。かつて外部だった部分に2層分が吹き抜けた新たな内部空間が生まれた。かつてのバルコニーはダイニングから突き出す室内テラスに変わり、外壁には新たに庭側に張り出すバルコニーが付加されている。庭側の新しい立面は、それ自体が大きな「間戸」だといってよい。(写真3) 上階には大きな



写真3 ツェントナー邸(表側)

コンクリート製の片持ち庇の下に眺望の良いフィックスガラスの大窓、下階では庭との繋がりをあえて遮断し、ガラスの引き戸部分にも木製のかなり目の詰んだ格子戸が重ね合わされている。

* * *

こうして見てくると、ヨーロッパの建築家たちが近代に至って構造と開口のくびきから脱し、「窓」に「間戸」を組み合わせた自由なマドを謳歌しているのがわかる。今日のN・フォスターやG・マークットといった、自然採光や通風に意識的な建築家たちのマドにも、「間戸」に環境制御性能をもたせたものが多い。

さてその一方で、元来「間戸」的な伝統に根ざす日本の建築家たちはどうだろう。成城にあった元の丹下健三自邸(1953)や、いま

では江戸東京たても園に移築された前川男自邸(1942)が、西洋近代の影響を受けながらも自らのアイデンティティを探るかのように、より直接的に日本の伝統を意識した「間戸」の意匠を採用しているのは明らかだ。だがいずれも日本建築の延長にあるだけのものではない。丹下はフィルターとしての3枚重ねの変わり障子を模索し、畳による床座の空間に板間を象徴し椅子座の生活を持ち込もうとする。前川の大きな切妻面に穿たれた開口も、日本の住宅のプロポーションを遥かに超越した求心力のある空間である。

このように日本近代におけるマドは、西欧モダニズムのボキャブラリーの中で「間戸」を捉え直すことから始まっている。吉村順三は軽井沢の山荘(1962)の開放的な「縁側」空間を、コンクリート架構によって高々と樹間に掲げ、篠原一男は白の家(1966)の正方形の抽象的な空間に、障子などの「和」的な要素を最小限に配置して、両者の詩的な緊張をデザインし、その後そのスタイルから決別する。丹下と同時期に菊竹清訓はその自邸スカイハウス(1958)で、外周上に「無双」の障子を4面对称的に置き、住居内部と都市の境界線を形作った。さらに内側の明障子はわざと床から浮かして内部空間に浮遊感を与えている。

この延長上にあるその後の「間戸」の住宅として、僕がひとつの到達点を示すものだと思うのが、原広司の工藤山荘(1976)である。(写真4) その立方体の空間は文字通り全周囲を重層する「間戸」で覆われている。内部の空間性はその組み合わせによって透明から不透明まで自在に変化する。まさに「間戸」を重ね着した家である。あたかも木箱の梱包を次第に解いていくように



写真4 工藤山荘
彰国社写真部撮影

に軽やかに光が差し込む家だ。周囲の緑もまるで吸い込まれるかのように家の内部に浸透する。羽目板とその隙間には緻密なモジュールが与えられ、建築の内外に反復される。日本的な「間戸」の重層でありながら、厳密な

幾何学原理を持ってデザインされている。

これをさらに突き詰めて、本来はコンクリートで出来ていそうな「壁」の部分と「開口」の部分に、すべて木を使って全く等価にしてしまったのが、鈴木侑の住宅URH(2000)である。(写真5) 鈴木がそれまで一



写真5 住宅URH 彰国社写真部撮影

途にコンクリート打ち放しに拘り続け、壁と開口の単純な対比に挑み続けたことを考えると、この家のもつそこから一段階昇華された概念が明瞭になるだろう。ここではそれまで対比されていた両者が同質のものとして併存している。この家はもちろん真壁造ではないし、さりとて構造を覆い隠すただの大壁造でもない。前川、丹下に始まる日本での西洋近代との葛藤は、半世紀余を経て完全に融解したといえる。

* * *

ここまで特に住宅のマドに焦点を当てて見てきたが、現代ではさらに多くの意欲的な建築家たちによって、建築に対しての様々な「間戸」のアイデアが生まれている。坂茂の紙の教会(1995)は阪神淡路大震災で被災した鷹取地区に仮設で建てたものだが、構造体を兼ねる紙管の配列が、祭壇側と入り口側でそのピッチを変え、壁自体が光の透過率を変化させるマドでもある。西沢立衛の森山邸(2005)では、分棟化された住棟それぞれの開口同士が重層して、複合的なマド群を形作っている。西沢はその一方で豊島美術館(2010)のように、開口としての「窓」を徹底し、緩やかな天蓋の巨大な「オクルス(oculus=眼)」のようにもデザインして、「窓」と「間戸」の間を自由に往来している。

その両者の間は今後ますます両義的で曖昧なものとなるだろう。発想を柔軟にし、さらに知恵を絞っていくことで、マドの概念にはこれからも新しい建築空間を生む可能性が潜在している。

(ふるや のぶあき)

フェルメールと窓

目白大学
教授

小林頼子

1948年、山口県生まれ。
慶應義塾大学大学院博士課程修了。現在、目白大学社会学部教授。専門は17世紀オランダ絵画史、日蘭美術交流史。主著に『フェルメール論』（八坂書房／1998年）、『フェルメールの世界』（NHK出版／1999年）（以上2著で第10回吉田秀和賞受賞）、『花と果実の美術館』（八坂書房／2010年）、『限定版フェルメール全作品集』（小学館／2012年）ほか。論文に *Vermeer and his Thematic Use of Perspective* (2006), *An Artistic and Cultural Assimilation between Two Different Cultures: Japan and the West during the Edo Period* (2010) ほか。

1650年代も終わりに近づく頃、第一次英蘭戦争の痛手から立ち直ったオランダで、中産階級が豊かさを謳歌し始める。それは、ヨハネス・フェルメール（1632–1675年）が新進の画家として名乗りを上げ、画中に繰り返し窓を描いた時期に重なっている。

■通りから眺めた窓

《小路》（図1）の画面右側を占める3階建てのレンガづくりの家の窓を観察してみよう。ファサード上部の、銃眼の切れ込みのある階段状破風スタイルは16世紀半ば以前に遡る。《小路》が描かれた頃のデルフトでは、1536年の大火、1654年の火薬庫大爆発により、16世紀の面影を残すのは市の東南部だけになっていた。もし本作品が1696年に売り立てられた「デルフトの…家の眺め」だとすれば、フェルメールは幸運にも二つの災禍を潜り抜けた建物を描いていることになる。

実際、ファサードに穿たれた窓は新しいものではない。3階の上下2段の開口部は *kloosterraam*（修道院型窓）と呼ばれ、15世紀以降の修道院建築で多用され、一般化したタイプに属する。都市部の豊かな民家では、その頃から、鎧戸や羊皮紙などで塞いでいた上部開口部に、手ごろな値になったガラスを10×15cmほどに切りそろえ、鉛の棧でつなぎ、木枠をつけて嵌め込み始めていた。下部はたいてい鎧戸のままだったが、外界を遮断してなお明るいという状況は市民の生活意識に大きな変化をもたらしたはずだ。

2階には、「修道院型」を二つ合わせた *Kruiskozijn*（十字形窓枠）の開口部が並ぶ。上部は鉛の棧でつないだガラス窓、下部は、画面右端の窓の状況から推測するに、鎧戸だけで、「十字形窓枠」の開口部としては古さを感じさせる。開口部のサイズは一般に最大で幅1m80cmくらいが限度だったというが、1階の戸口に座る女性の身長を約160cmとすると、2階の窓枠の大きさもほぼその範囲に収まる。

1階には、高さが2階の窓の倍はありそうな縦長の十字形窓が二つ見える。右端の赤い鎧戸の窓と同じく、左側の閉じた緑の鎧戸の内側にもガラス窓があるに違いない。1640年頃にガラス片が20×25cmと大きくなり、棧も鉛から木に変わるが、《小路》の家の1階に

は、ガラスの大きさからみて、17世紀いっばい使われ続けた古いタイプの窓が戸口を挟んで並ぶ。後に触れる室内画でフェルメールが描いたのも、この種の窓である。

《小路》では、上から下へ窓のタイプが徐々に新しくなる。まるで建物のリノベーションの過程を忠実に反映するかのようだ。確かに、イギリス積みの煉瓦の目地の細かい描写、窓枠の色の正確な観察——雨除けの効果で1階の窓枠は下方だけが色褪せている——など、写実性へのこだわりは尋常ではない。しかし、一方で、1、2階の左右の窓の幅が微妙に異なり、1階戸口が建物のやや左寄りにあり、その左右の壁の幅が違ったりと、不思議な細部に事欠かない。実在の建物を発想の原点にしつつ、細部に思うがままに操作を加え、窓の変遷を一図にまとめて見たのではないか——そんなフェルメールの意図を想像したくなる《小路》の描写である。



図1 フェルメール《小路》1658–59年頃
53.5×43.5cm 国立美術館、アムステルダム
小林頼子『フェルメール論』1998年 八坂書房より転載

■室内から眺めた窓

フェルメールの窓への関心は、実際、他の画家に比べてはるかに大きい。1652–1661年頃に始まる室内画の型の洗練度を上げ、窓からの陽射しに恵まれた豊かな市民層の暮らしを再現することに新たな画境を見出したのであろう。その選択は、現実の照射光・反射光の様々に変化する明暗のパターン、登場人物のニュアンスに富んだ心のありようを、他のどの画家とも異なる繊細な仕方で提示することを可能としたに違いない。

《小路》と同じ頃に制作された《士官と笑う女》（図2）の、上下ともにガラスを入れ

た十字型窓枠を見てみよう。下方の奥の窓が内側に開かれ、外光が部屋に射し込み、女性の鼻筋、黄色の胴着、手、その手に載るレーマー杯、彼女が座る椅子の背柱の獅子飾りを輝かせる。その眩さは、緑のテーブルクロスを黄色に変えてしまうほどに強い。手前の男性の左肩と帽子のリボンは逆光の効果で微光を放つ。女性の歯を見せた笑み、彼女の左手の金を受け取るような仕種、そこに注がれた男の右目の視線は、しかとはわからぬが、二人の淫靡な関係を示唆するようにも思える。男女のそんな心模様が、窓の光の効果で、何

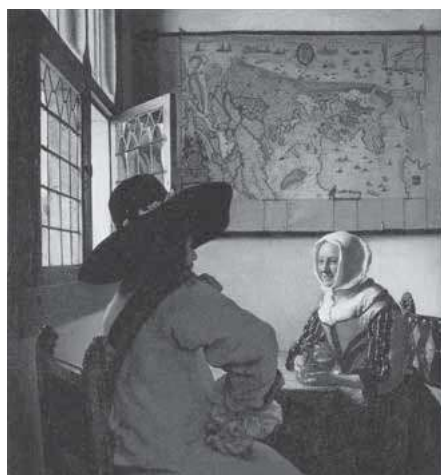


図2 フェルメール《士官と笑う女》1658—59年頃 50.5×46cm フリック・コレクション
小林頼子『フェルメール論』1998年 八坂書房より転載

やら息づいて見えるから不思議だ。一方、開かれた窓には、背後の壁に掛かるウィレム・ヤンスゾーン・ブラウ刊行のオランダ地図（1620年）の一部が歪みつつ透過する。画中の地図には、室内という私的空間を戸外という公的世界に開く機能があるが、開いた窓ガラスに透過することで、外界との連なりは一層明らかになった。ガラスの透明度は、手前の閉まった窓の向こうに、十字形窓枠の中仕切り（奥行き20—25cmほど）や、建造物の一部らしきものが覗いていることからわかる。窓ガラスは、光の入り口となって室内を活気づけ、同時に、その透明度によって、室内を外の世界へとつなげる。フェルメールは、窓が、新たな光の描写の可能性ばかりでなく、新興市民の暮らしぶりや、内と外、公と私の世界の連続性を示唆しうるなかなか奥の深いモチーフであることを楽しんでいるかのようだ。

フェルメールの描いた部屋、そして窓の全容は、《信仰の寓意》（図3）からおおよそ窺

うことができる。天井から下がるガラス球上に、部屋の左側にあるだろう三つの窓、部屋の手前の壁の中央にあるだろう扉がはっきりと映っているからだ。タペストリーの背後の奥の窓はカーテンで覆われ、その隙間から光がわずかに射し込んでいる。タペストリーのすぐ手前の窓では奥の下の方の窓戸が閉まり、一番手前の窓では上部の奥の部分以外はすべて暗い。《音

楽の稽古》（王室コレクション、バッキンガム宮殿）や《手紙を書く女と召使い》（ナショナル・ギャラリー、ダブリン）を参照してその様子を再現すると図4のようになる。

後者に描かれたデルフト・タイルの当時の標準サイズ13cmを基準にすると、床から窓枠下までは1m強、窓枠全体で高さ・幅ともに約1m60cm（縦がやや長い）となる。窓間の壁を約50cmと仮定すると、部屋は窓に添って5m70cm前後の大きさになる。この想定だと、タペストリーは奥の壁から2mほどの位置に下がるが、床の大理石の当時の大きさ（対角線で45cm）からして《信仰の寓意》に描かれた状況とほぼ一致する。フェルメールは、そんな部屋の窓や窓戸やカーテンの開け閉め、部屋を横断して掛かるタペストリーの引き寄せ具合、人物や家具や小物の位置などを調節し、照射光・反射光の交錯する様を楽しみながら室内の様子を想いのままに演出し、描いていたのである。



図3 フェルメール《信仰の寓意》1673—75年頃 114.3×88.9cm メトロポリタン美術館、ニューヨーク
小林頼子『フェルメール論』1998年 八坂書房より転載



図4 《信仰の寓意》の部屋の窓の状態の復元図（小林作成）
向かって右が奥の壁、窓の高さ約1.6m、床下から窓の下まで約1m、窓の間約50cm

もちろん、フェルメールは部屋の様子を見ただけで記録する画家ではない。たとえば天井の梁は主要な（ファサードに穿たれた）窓に対し平行に渡されるのが普通だったが、なぜかどの作品でも垂直方向に描かれている。大理石は最富裕層が用いる高級床材で、フェルメールが描くような民家にはめったに敷かれなかった。おそらく、フェルメールは、17世紀の現実からとったモチーフに依拠しながらも、予想される購買層の求めや絵画効果を考慮し、そのいずれをも満足しうるイメージを追い求め、今に伝わる作品群を構想した。彼の作品は、単純な現実の鏡像ではなく、画家としてのさまざまな戦略の結晶と理解すべきものののだ。

■フェルメールと窓

オランダ社会は、《士官と笑う女》が描かれた頃に、「私」の領域に重きを置き始め、それに応じて、住宅プランも、機能未分化の部屋の連なりから各部屋の独立性を確保したものへと変化する。とはいえ、人々は即座に新築の家に住むわけでもなく、さしあたっては従来型プランの住まいに暮らしながら、そこに「私」の意識を落とし込むしかなかった。たとえば、《窓辺で水差しを持つ女》（1662—65年頃）を最後に、絵の中の窓を閉ざし、ひたすら登場人物の私的営みに焦点を当てたフェルメールのように。とはいえ、ガラス窓の効果は絶大で、室内にはなおも外界の快適な光が届き、豊かさを増す中産階級のプライドを十分に満足させ得た。窓は、フェルメール作品のなかで、現実の建築の構造、社会の枠組みの変化、描画の技量を伝えるためのかっこうのモチーフだったのである。

（こばやし よりこ）

編集後記

建築計画系委員

"What slice of the sun does your building have?" 松隈論考でも引用された、カーンが好んだW・スティーブンスの詩の原文である。ロマンチックでありながら、空間における光の重要性を端的に言い当てている。窓または光と空間との関係は、建築の古典的なテーマである。今特集ではあえてその古典的テーマに挑んだのだが、各論考は示唆に富んでおり、今なおその意義を失っていないことが再確認できたのではないと思う。

(米山剛史)

私の原風景として思い出すのは、実家のマドから望む裏山です。幼少時期はひとりの時間が多く寂しさからか、深々と積もる雪や、嵐で木がうなる風景を思い出します。今回「マド」という特集が組まれる中で、改めて原風景に風や寒さを防いでいたマドという存在が不可欠であったことに私自身気づかされました。読者の方も様々なマドの解釈を紹介したこの特集を一読されることで、すぐ側にあるマドの見え方にも変化があったのではないのでしょうか。

(清原健史)

今回の特集を通じてあらためて建築における「窓」の多様性について再認識させられた。特にガラスが普及する以前の窓と、近・現代の透明なガラス窓とは決定的な違いがあるように感じた。正岡子規の病床の窓に高浜虚子が当時高価な板ガラスを入れ、子規が冬でも外の風景を眺めることができるようにした、という逸話があるが、板ガラスの登場は窓に大きな革命をもたらしたように思える。利休の時代にガラスがあったなら、彼は茶室の窓にガラスを用いただろうか？ (野田隆史)

窓は建築にとって外観と内部空間を特徴づける重要な要素となるが、もっとも大切なことはそこにいる人を快適にさせることだろう。アメリカのアポロ宇宙船には設計の初期段階には窓がなかったそう。ガガーリンの見た青い地球を自分たちも見たい、との宇宙飛行士の希望が聞き入れられて操縦席に小さな窓が設けられたらしい。その窓はロケットの外観を決定づけるものではなかったが、なくてはならないものだったのだ。(下坂浩和)

windowと間戸で語られるように、窓といえど私たち日本人は建具を思い浮かべる。高気密化が進み、窓を開け放つことはすっかり減ってしまったが、朝一番、雨戸とサッシを開けるのが幼い頃の私の役割だった。外国の方が町家に宿泊すると驚かれるようだが、暗闇で満たされた室内が、清しい空気を伴って光で満たされる瞬間は、確かに劇的で、何とも気持ちが良い。特集を通して思い出された空間体験を、どこかで生かしてみたいと思う。

(大西 広朗)

「建築と窓」このテーマは、建築づくりそのもののような気がした。ロマネスクから近代建築、茶室から近代日本建築、そしてフェルメールの窓…、どの窓の記述も、その空間意義そのものを語っている。「構造体は光を与え、光は空間を作り出す」というカーンの言葉に感銘を受けつつ、かつてエシェリック邸を訪れた時のことを思い出した。高天井のリビングと庭との絶妙な一体感、その空間の豊かさへの感動。建築づくりは奥が深く、楽しいと再認識できた特集であった。(静 茂夫)

様々な事例を通して、「窓」に対する手法や思考、意匠について改めて発見できた特集になったと思う。求められている空間に最も適した「窓」への探求は、どの時代も建築を豊かにしているように感じ取れた。学生時代、教室の窓際の席は、私にとってちょっと特別な場所だった事を思い出した。授業中、ポカポカと陽を浴びながら、グランドや空の風景をゆったりと眺めていたなあと。まずは身近な「窓」を内外から見つめ直し、建築と窓をもっと楽しみたい。(矢鳴 陽平)

窓の語源が建築の成り立ちに依じて異なることは興味深い。現代建築においては、窓が「穴」であるか「戸」であるかは曖昧で、ひとつには法による様々な足枷をはめられ、純粹な「穴」とも「戸」ともなり難く、結局のところ両方の意味を持ち合わせた「窓」として扱われていることがほとんどだろう。逆に「窓」が「穴」であるか「戸」であるかの意識を高めてみると、違った発想が生まれてくるかも、とそんな予感がした。(福田容明)

創建当時の姿に復元

—大阪府庁「正庁の間」
85年ぶりのお色直し—

石塚なぎさ

大阪府総務部庁舎周辺整備課課長補佐

大正15年竣工の大阪府庁本館は、現役の都道府県庁舎で最も古く、モダニズムの外観や創建時をしのばせる内部空間が残る建物で、登録有形文化財等の指定を受けてはいないが、歴史的・文化的に価値があるとの専門家の意見もいただいている。

昨年度は、本館のうち建築的価値の高い東館全体を耐震補強することが決まった。

今回は、昨年行った府庁本館の「正庁の間」の復元改修について紹介する。

正庁の間とは

■行事や式典用の特別な部屋

5階中央にある「正庁の間」は、かつて年末年始の行事や人事発令などの式典に使用されていた特別な部屋である。



昭和30年正庁の間で行われた府警本部設立式

250㎡の室内は、5・6階の吹抜で、天井には屋上トップライトからの光が差し込むステンドグラス、内装全体に壮麗な装飾レリーフがちりばめられた大正ロマンあふれる意匠であり、モダニズムの先取的デザインと言われる本館建物の中でもひととき異彩を放つ空間である。

■老朽化し色あせた執務室

しかしながら、近年、庁舎が手狭になったこともあり、執務室や会議室として使用されていたことから、様々な内装の改修が行われてきた。

寄木貼の床にはビニルシートが貼られ、鉄骨柱のやぐらを組んで配線をし、蛍光灯を取り付け、シャンデリアは取り外されていた。

また、年月の経過による劣化も著しく、格子天井のレリーフや壁面にくすんだペンキ塗装が施され、竣工当時の色合いと異なるだけでなく、煙草のヤニの汚れやあて傷、クロスのはがれ、光の通らないステンドグラスなど、創建当時の面影が損なわれていた。



老朽化し執務室に改修された室内

このため、正庁を府民の貴重な財産として、多くの皆さんに親しんでいただけるよう、創建当時の姿への復元改修を行ったものである。

85年目のお色直し

■当時の部材を生かした復元

今回の改修は、ローコストで竣工当時の姿（白黒写真資料による）に戻すことを主眼に、大正当時の部材を生かした改修とすること、壁クロスなどパーツによっては現代の材料や工法を用いて風合いを出し、全体をなじませることを設計コンセプトとした。

壁や装飾は、テストをしながら手磨き・スチームにより洗浄、既存塗膜の除去、出てきたしつくと金箔の下地のベースに応じてひび割れ補修・修復・補強・固定後、パテ処理・塗装仕上げを基本とし、保存状態の良い部分のみクリーニングした金箔をそのまま残した。

寄木貼の床は、シート貼・ベニヤ板を撤去後、壁際の古い床材を中央部の痛みのひどい部分に補充し、周囲には現代のフローリング材を用い、表面を磨いて、床塗装で仕上げた。

シャンデリアは、外して保管していた部材を極力使用し、変形・破損した部材のみ復元して製作しており、洗浄により色が変わってしまったため、新に塗装して仕上げています。

■輝きを取り戻したステンドグラス

日本のステンドグラス黎明期にあたる大正期の製作で、現存するものとして希少であるとともに、天井ステンドグラスとしては、中央25㎡・左右各15㎡、合計55㎡の規模は、国会議事堂参議院議場（昭和11年）に次ぐ国内最大級の大きさである。

デザインは、この時期に見られるアールデコと和風唐草紋様が混在したものである。

使用されているガラスは、アメリカココモ社製のキャセドラルガラス（単色透明）やオ

パールセントガラス（乳白色まじり）で、表面にダイヤ型の凹凸をつけた型板ガラスは、現在では手に入らない貴重なものもある。

修復は、創建時の姿をできる限り保つ「元姿性」とガラスの落下等を防ぐ「安全性の確保」を考慮して行った。

修復前の状況は、中央25㎡のステンドグラスを天井で支える木製枠組が下側にたわみ、一部の枠の交差部に亀裂が発生したり、特に、中心部の色ガラス1.5m角正方形は自重で下垂れするなど劣化が進んでいた。

修復作業は、天井からステンドグラスを取り外して行い、ガラスの洗浄により表面に付着していた汚れを取り除くとともに、割れた色ガラスも新品に交換せず、最新のガラス接着法である紫外線硬化接着剤を施し、大正時代の色ガラスをそのまま使用した。

特に下垂れ変形の大きかった中心の色ガラス部は、一旦分解し一部の接続部材を鉛や銅からしんちゅうに変えて組み直した上、背面に補強材を追加した。

また、後年になって安全対策のため全面に設置していた金網は取り外し、透明強化プラスチック板を下全面に敷いて補強するなど、可能な限り創建当時の外観を再現した。

光源は、屋上トップライトを戦後設置のガラスブロックを取り外してアクリルドームのみに変更し、光を入りやすく改善するとともに、天井裏に蛍光灯を仕込んで、ステンドグラス全面を明るくすることで、室全体の照度を確保することとした。



創建当時の姿に復元された正庁の間

■時代を超えて一般公開

正庁の間は、本年1月末から一般公開を開始した（祝日を除く平日の水・金曜日）。

映画ブラックレインやプリンセス・トヨトミの撮影で使われ、大阪城を正面に望めるこの部屋の来場者は、一室だけの見学にもかかわらず、3ヶ月で1万人を超えた。担当者としては、これだけの多くの方々を訪れていたに驚きと喜びを感じている。

（いづつか なぎさ）

●石塚なぎさ

1965年生まれ。大阪工業大学大学院工学研究科修了。1990年大阪府入庁。

須賀 定邦

—SUGA SADAKUNI—



「ストロングビルディング」を背景に

経歴

1972年 東京都生まれ
 1995年 東京大学工学部都市工学科卒業
 1996—97年 カリフォルニア大学バークレー校
 1998年 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了
 株式会社竹中工務店入社
 1999年— 同社 大阪本店設計部

主な建築作品

2004年 トラスコ中山小倉営業所
 2005年 ストロングビルディング
 第50回BCS賞
 第1回鈴木楨次賞大賞
 第35回建築士会連合会作品展 優秀賞
 日本建築学会 作品選集2008掲載
 2006年 全日空整備食堂施設棟
 日本建築学会 作品選集2009掲載
 2008年 福寿園京都本店
 日本建築学会 作品選集2012掲載
 京都デザインアワード2010入選

特殊解を一般化する補助線の追求

解けないと決まらない。数学の問題を50行の代数で解くのではなく、幾何で一本の補助線をひくことで3行で解く。できたものを見たらみんなできると思うがその一本の補助線が難しい、コロンブスの卵みたいなもの。それを見つけたときのスカッとした感じがデザインの強度に繋がっていると信じているし、むしろそれを楽しみにいっている。自らの設計スタイルについて「よく補助線野郎と言われます」と答える竹中工務店の須賀定邦氏に話を伺った。

ストロングビルディングは初めて最初から最後までかかわった物件。入社して暫くはコンペや人の手伝い仕事が続き、自分で主体的にできる物件がやりたいと思っていたところに声がかかった。周りからは「駐車場でしょう?」と言われたが、漸く物件を与えられたことが嬉しく、設備の詳細に至るまで深くかかわり設計したと語る。

「容積は余らせてもよいからリスクを抱えない」というオーナーの方針で「メーカーの認定駐車場と同等の値段でやる」ということ以外に条件は無かった。20mの高さ規制に1層の店舗と6層の駐車場を確保するギリギリの階高設定を梁が不要なフラットスラブで実現し、コストダウンを図るためにも徹底的に要素を削ぎ落としていった。必要なもののみを残し、建物に求められる機能だけを現していくその行為を氏は「還元」と表現する。コストをかけてではなく、徹底的に削ることで経済原理に則った中でキレイにつくりたかったという。構造を力学的に整理していくことがコストダウンにもなり、デザインを整え機能的な平面を生み出すことに繋がった時「解けた」感じがあった。

全日空整備新棟では、事業形態の変化への対応と食堂の内装に木材を使用するために避難安全検証法を用いることを考えた。ここから廊下をバルコニーとして外周に廻すことを思いつき、どこからでも避難可能なこととコンテンツに追従するフレキシブルさの両方を獲得できたことで決まった。

複雑になりがちな与件に一本の補助線を与えるアイデアで簡単に解いているように見えるが、いつもまずは普通に愚直に解くことから始めるという。突然すごい案を考えようとするのではなく、ふつうならどうするかをやった上でそれがいいのかどうかを考え、そこからはチクチクと地道な作業を積み上げて「ガラガラポン」と発想を転換するそうだ。

福寿園京都本店は、当初オーナーのこだわりの強さからどんどん外観もプランも複雑になっていったが、内側でいろいろなことがおこっていても街に対して猥雑にならず、機能的に動線を整理することと、求められる床を確保するという命題を突き詰めて一から再構成した。

「シンプルな仕組みから複雑なものができていたり、それがいいとも簡単にできていたりすることにすごく説得力がある。それがいろいろな理由から“これしかできない”となるのは危うい」と、あえて空間をずらしたりカタチをつくるのではなく、機能的なパズルを合理的に解ききることで“特殊解”を一般化しようと試みる姿勢を貫く。「解くことを追求しすぎると難しくなり、一般には共有しづらい」というが、つくるものの潔い姿は皆が共感できるシンプルなコトバで語れるところまで要素を削ぎ落とすことで、説明不要なスタンダードを追求した結果なのだろう。

最近は大規模複合系の物件や、固定的なイメージが強い病院や住宅にも興味がでてきたという。「普通はこうなる」という言い訳に満ちた状況を打開したいと指向するその先の新たな“一般解”が提示される日も近いのではないだろうか。

聞き手 杉山美納（東畑建築事務所）
 写真撮影 河合止揚

建築硝子総合施工、内装工事・アスベスト工事

伊藤硝子産業 株式会社

〒652-0803 神戸市兵庫区大開通10丁目1番8号

TEL: 078-576-6465(代) FAX: 078-577-6146

URL: <http://www.itoh-glass.co.jp/>

金属製建具工事

製作・販売



株式会社 兵庫機工

代表取締役 中西 利文

■本社・工場 〒671-0219 姫路市飾東町豊国字仲田 790 TEL. 079-253-2225 FAX. 079-252-4402

■神戸営業所 〒650-0044 神戸市中央区東川崎町 1丁目 8-5 TEL. 078-371-1305 FAX. 078-371-6699

URL: <http://www.hyogokiko.co.jp> E-mail: info@hyogokiko.co.jp



株式会社 明治大理石

大 阪 本 社 〒540-0027 大阪市中央区鎗屋町 2-3-10

TEL. 06-6941-7488 FAX. 06-6944-0165

e-mail(代表): web@osaka-meiji.co.jp

石 材 セ ン タ ー 〒579-8025 東大阪市宝町 10-26

URL: <http://www.osaka-meiji.co.jp>



建築鉄骨製作
国土交通大臣Hグレード認定工場

株式会社 本岡建設工業

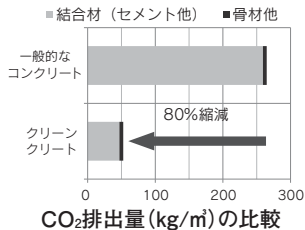
〒673-0433 兵庫県三木市福井2123-2
TEL. 0794-82-0227 FAX. 0794-83-2579
E-mail: motooka-miw@k9.dion.ne.jp

低炭素型のコンクリート「クリーンクリート®」の建築物への適用

辻 靖彦

(株)大林組設計本部構造設計部課長

大林組は、地球環境保護が声高に叫ばれる現代社会の要求に応えるため、地球温暖化ガスであるCO₂排出量を最大80%削減できる低炭素型のコンクリート「クリーンクリート®」を開発し、東京都内の新築物件の地下躯体に適用した。



開発経緯

クリーンクリートの開発は、構造性能や施工性を確保しながらCO₂排出量原単位の高いセメントをいかに低減することができるかがポイントであり、高炉セメントC種よりもセメントの混合割合を低減することを目指した。2007年に開発に着手し、試し練りや実機試験と並行して混和剤の改良を進め、JISA5308に適合する材料構成とすることで、一般確認申請での建築物への適用が実現した。

CO₂が削減できる理由

CO₂排出量は、コンクリートを構成する各材料の生成から運搬などの過程で発生するCO₂排出量原単位(図1：インベントリデータ)に、調合重量を乗じて算出される。

図1の構成材料を比較すると、セメントのCO₂排出量原単位が突出して多いのに対して、他の結合材(高炉スラグ微粉末やフライアッシュ)の数字は小さいことが分かる。つ

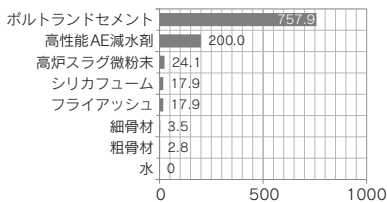


図1 二酸化炭素排出量(kg/t)
土木学会・日本建築学会資料

表1 クリーンコンクリートの特徴

項目	フレッシュ性状			構造的性能				施工性			コスト
	スランプ	空気量	コンクリート温度	構造強度	乾燥収縮	中性化	凍結融解	充填性	圧送性	作業性	
クリーンクリート	○管理可能	○管理可能	◎温度上昇量の低減	○今回はFc27	○同等	△かぶり厚さを増して対応	○同等	○同等	○同等	○高強度CONと同等	△ほぼ同等
評価方法	試し練り、実機試験、各種構造試験							施工試験			見積

まり、セメントを他の結合材に置き換えることで、コンクリートとしてのCO₂排出量を削減することが可能となる。

クリーンクリートの特徴

クリーンクリートの代表的な性能を表1に示す。

1) フレッシュ性状など

スランプは運搬時間や外気温によって変動幅が異なるが、2cm程度のロスを見込んで出荷することで荷卸時点でのスランプを規定値内に管理することが可能である。

空気量は出荷時と荷卸時のロスは概ね1%以内で、一般的な調合のコンクリート(以下、一般調合と呼ぶ)と同等である。

断熱温度上昇量は、セメントの使用量が少ないため、一般調合より小さく抑えられる。マスコンクリートとなる部位の温度ひび割れ低減には効果が高い。

2) 構造性能

圧縮強度は、水結合材比を調整することで目標強度に管理できる。また、曲げせん断実験やクリープ試験などを実施し、構造性能が一般調合に劣らないことを確認した。

乾燥収縮量は、単位水量を低減できるため、一般調合よりも小さくなる。

中性化速度は、セメント置換率の増加に伴って増大するため、セメント量の少ないクリーンクリートは一般調合よりも中性化が速く進行する。しかし、鉄筋に対するコンクリートのかぶり厚さを増せば、一般調合の耐久性能と同等になる。

凍結融解に対する抵抗性は一般調合と同等である。

3) 施工性

ポンプ圧送性や充填性、打継・打重ね、仕上げ作業性を確認するため、実大施工実験を実施した。(写真2)

フレッシュ状態の粘性が若干大きくなるため、ポンプ圧送時の圧送負荷はやや高くなるが、充填性に関しては一般調合との違いはな



写真2 SRC柱部材充填状況

い。また、ブリーディングが少ないので、表面の仕上げ(コテ押し)には、高強度コンクリートによく使用されている表面養生剤が必要となるものの、これを用いれば十分に施工可能であることを確認した。



フレッシュ試験の状況

4) コスト

現状では、一般調合より若干高くなっているが、コンクリートの供給量が増えれば同程度まで抑えられる見込みである。

実物件への適用

東京都内の地上9階、地下2階建の店舗・事務所で構成された物件の地下躯体部分にクリーンクリート(設計基準強度Fc27:約4,900N/mm²)を打設した。



コンクリート打設状況

確認申請・適合性判定機関には、クリーンクリートの取り扱いを確認申請前に相談し、採用可能であることを確認した。

打設前までに実機試験や施工試験を行い、関係者全員で入念な打ち合わせをすることで、施工上の問題は生じなかった。

施工後半年を経ているが、有害なひび割れなどの不具合は発生していない。

今後の展望

結合材の種類(セメント、高炉スラグ微粉末、フライアッシュ)が多いため、一般のプラントではサイロの確保が問題となる。普及を推し進めるためにはプレミックス化なども今後の課題である。また、コンクリート製品への適用やコンクリート強度のバリエーション、中性化の進行抑制技術も検討中である。

(つじ やすひこ)

●辻靖彦

1962年生まれ。1988年東北大学大学院工学研究科建築学修了。同年株式会社大林組入社。

所在地／大阪市中央区備後町2-5-8
 設計／渡邊建築事務所(本館・新館とも)
 施工／清水建設(本館は清水組)
 竣工／本館・昭和6年12月
 新館・昭和37年11月
 構造／鉄骨鉄筋コンクリート(本館・新館とも)
 規模／本館・地上六階・地下一階・塔屋
 新館・地上七階・地下一階・塔屋
 種別／本館・会館・新館・業務ビル

■はじめに

本館の論考は、すでに多くの論賢によりなされているところであるが、あまり触れられていない新館と本館の関係、これに焦点を当てた。

新館(昭和37年竣工)は、渡邊節長男・渡邊道輝(1914-1988)が中心となり設計、監理が行われた。本館(昭和6年竣工)設計者・渡邊節(1884-1967)は、高齢ではあったが、多くの増築建築計画上の指示を与えている記録が残る。詳細については、後でふれることになる。

渡邊道輝は、昭和12年(1937)京都大学建築学科を卒業後、鹿島組(現・㈱鹿島建設)を経て、昭和26年(1951)渡邊建築事務所に入所している。

倶楽部建築と事務所建築の差であるとともに、60年代という時代の要請でもある。

本館が六階建に対し、新館は七階建である。事務所建築として階高を抑え、床面積を確保することが要求される。¹⁾

外壁は、特殊タイルにより意匠の継承に努めている。しかし、平面構成は著しく異なる。

私事ではある。私は、昭和49年(1974)春、綿業会館3階談話室にいた。

私を含め、渡邊建築事務所の新人3名の歓迎会に参加するためである。この時以来、約40年にわたり、綿業会館にかかわってきた。

事務所に入ってから初期は、改修に伴う監理、その後渡邊節研究の調査、検証のためである。

この本館の様式建築を概論すると、「ヨーロッパからもたらされた様式建築がアメリカで簡素化され、再々度、日本でアレンジされ

た」と推察する。

■本館-近世復興式(コロニアルスタイル+ネオ・クラシシズム) 昭和6年(1931) 竣工

『建築と社会』(第15輯7号、昭和7年7月号)にその記録が残る。(次頁に記載)

竣工時と現在は、家具を含めた調度品や、アイアン・ワークス等で異なる。(昭和17年6月の鉄柵、シャンデリア等の金属類献納による。)

渡邊節は次のように述べている。

「近代の建築は昔の建築と違って、一人の建築家が一人の力でそれを完成するということとはとうてい不可能です。あらゆる技術の総合的な産物ですからね。それにはいろんな技術者が要る」。²⁾

これを実証するかのように、村野藤吾(1891-1984)、須藤員雄(1904-1941)を所員として抱え、内藤多仲(構造)、北浦重之(設備)をコンサルタントとして外に求めている。

渡邊は、平面構成、外観・内部様式、建築材料の選択等、村野・須藤は、詳細(ディテール)に特化していた。

今回資料³⁾の検証の結果、永山美樹(京都高等工藝学校図案科・明治40年(1907)卒、宮内省、高島屋)が、グリル、アイアン・ワークの意匠に携わっていたことが判明した。

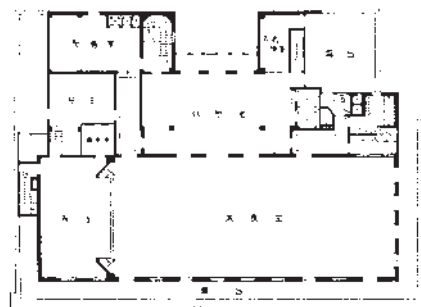
永山は、大正7年(1918)、帝国議会議事堂の競技設計に、同窓の吉武東理(京都高等工藝学校図案科、宮内省、大蔵省臨時議事院建築局、自営)と共同で応募した。この案は、3等1席に入賞している。永山と吉武の師は、武田五一である。⁴⁾



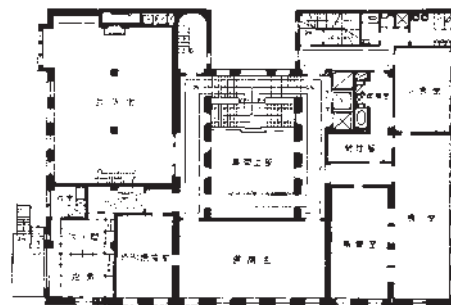
①南西側より、本館・新館を望む。様式の相違を見てください。(現在)



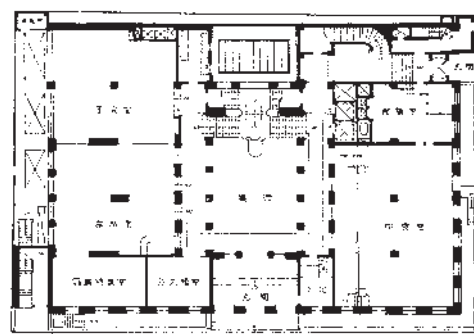
②綿業會館外觀 基壇は石積みで、それより上は五階まで特殊タイル、六階は人造石ブロック、蛇腹や窓周りは、テラコッタが施されている。



③六階平面図



④二階平面図



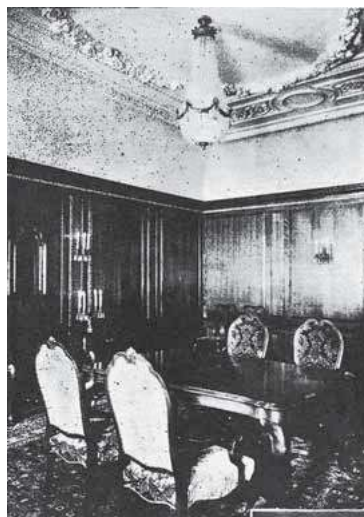
⑤一階平面図



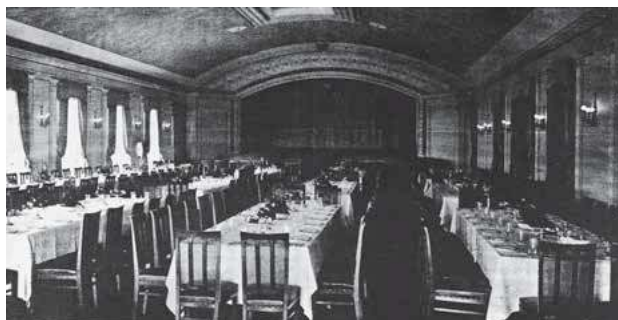
⑥二階（3階）大談話室（*）



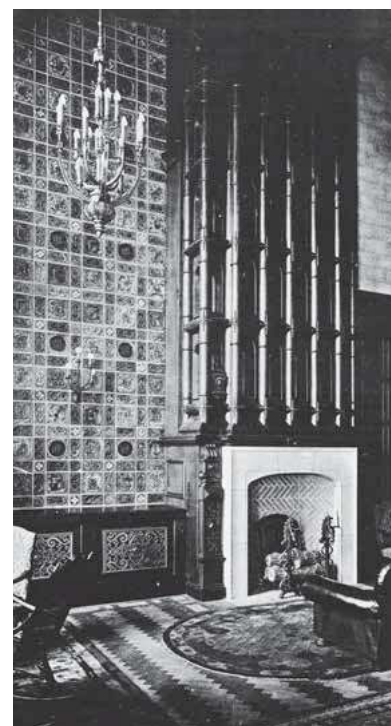
⑧一階中食堂



⑨二階（3階）特別應接室（*）

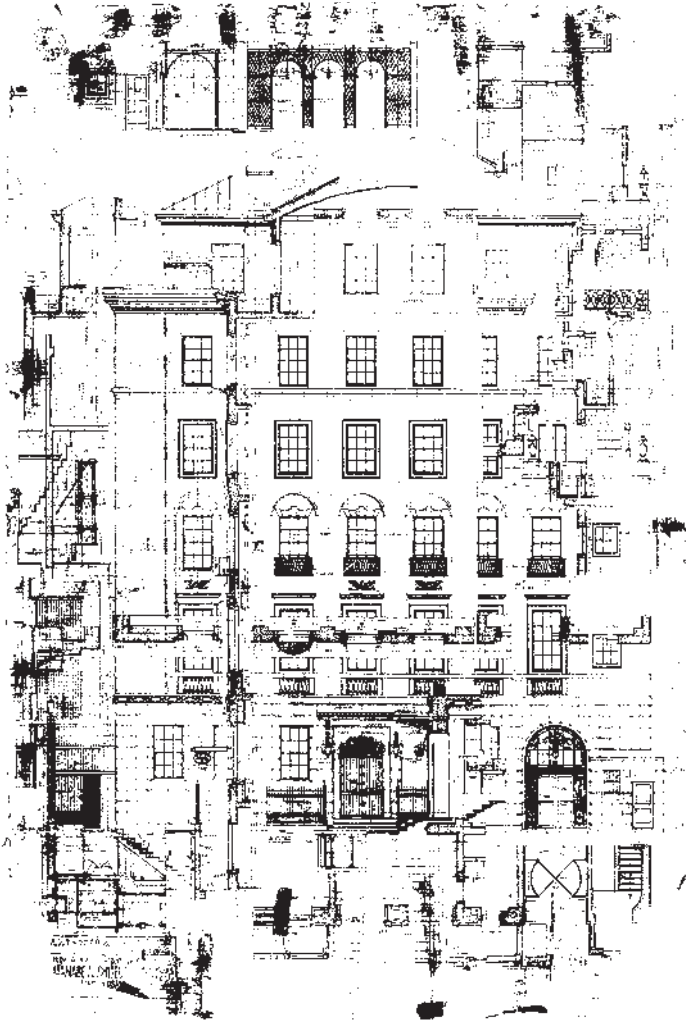


⑦六階（7階）大食堂（*）



⑩二階（3階）大談話室（*）
ジャコビアン様式のファイアー・プレース
とタイル・タピストリー

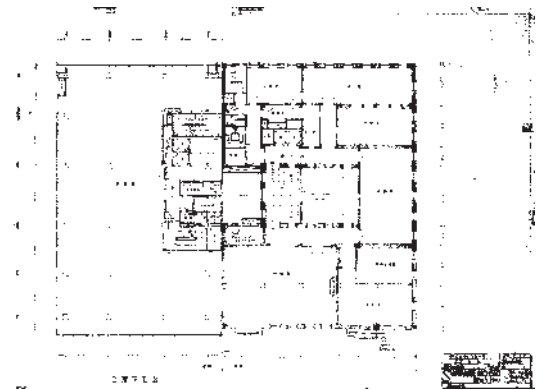
*印：新館竣工後の階数を洋数字で、
本館竣工時の階数を和数字で表示した。



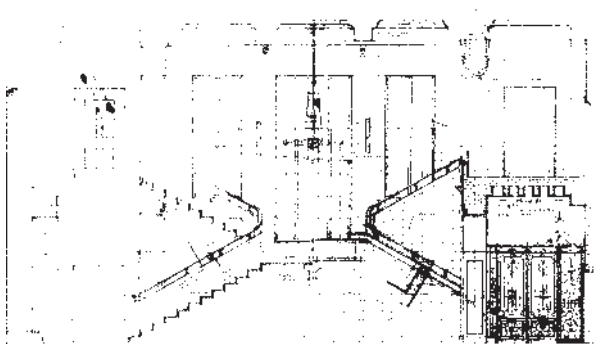
⑪ 矩計図 (個人蔵)



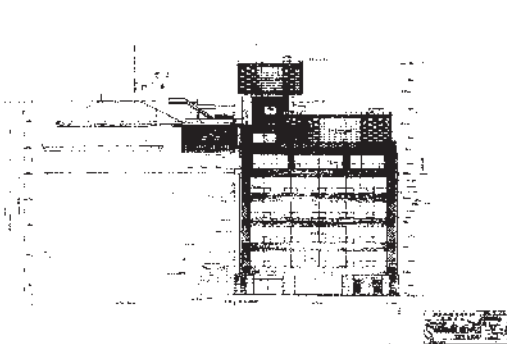
⑫ 新館と本館 (『日本綿業倶楽部50年誌』より)



⑬ 3階平面図 (株渡辺建築事務所東京事務所・提供)



⑭ 玄関ホール東面展開図 (個人蔵)



⑮ 南立面図 (株渡辺建築事務所東京事務所・提供)



⑯ 新館南外観『ひろば』昭和41年5月号p131、近畿建築士会協議会発行



⑰ 新館2階より本館玄関ホール吹き抜けをみる。



⑱ ボストン公立図書館 (マッキム、ミード&ホワイト設計) 渡邊家蔵

綿業会館本館は、名建築と称賛された。

幸いにも戦禍を免れ、孤高に建つ写真はいまも残る。

様式別に纏めると、

- ・イギリス／17C初期ジャコビアン—3階談話室、18Cクィーン・アン—3階特別室
- 18Cアダムス—7階大食堂
- ・フランス／19Cアンピール—3階会議室
- ・イタリア／ルネッサンス—1階玄関ホール
- ・アメリカ／ミューラル・デコレーション—1階中食堂

大正9年（1920）9月、渡邊は、アメリカ、ヨーロッパに3ヶ月間建築視察に出ている。

その折入手した、ボストン公立図書館（マッキム、ミード&ホワイト建築事務所）の写真が、大切に保管されている。その後大正11年（1922）再訪している。

マッキム、ミード&ホワイト建築事務所⁵⁾の作品集が、渡邊事務所の教本である。

本館の外観は、三層構造になっている。基壇部（ベース）は、白ヒシャ石の粗石積（ルスティカ）、ドライエリアを用い、西面中央アプローチを際立たせている。胴部（ボトム）は、二～五階の特殊タイル市松模様とテラコッタで構成して、微妙な陰影を醸す。頭部（トップ）は、テラコッタによる五階の軒蛇腹（バラペット）、四、五階をわける、胴蛇腹（ストーリング・コース）の水平線で形成されている。

それまでに、一般に多用されていた1/20図面を、1/50にする。

この図面をみると、一葉に平面図、断面図、立面図、矩計図、建具図、詳細図等が1/50で記述されている。これによりかなりの図面が省略され、空間を理解する助となる。

この手法はあきらかに、下記のキュウビズムの絵画手法のようである。

ポール・セザンヌに始まり、パブロ・ピカソにより完成する2次元を重層して、3次元を、形成する表現。

二階談話室に対して、「内外部の設計を通じて一番苦心したのは談話室であって、あれくらい天井が高くすべてが堂々としている部屋はない。これも設計が一応おわってから、どうも談話室だけが気になり、費用もかかったがさらに一ヵ月の期間をもらい、設計を変更して二、三階を打ち抜くことを考案して出来上がったものである。タイルなどは京都の泰山という店が精魂をこめて焼いてくれたものを使い、一枚一枚全体のコンビネーションを考え助手を使わず私一人でこつこつと仕上げた」。⁶⁾

また、磯崎新は、タイル・タピストリーを

迷宮として、次のように分析する。

「執拗にはりめぐらされた陶板、ひとつの部屋の一隅に乱数的な記号で塗り込められている」。⁷⁾

上記のように、東側のタイル・タピストリー（4m×6m）は渡邊節が自らプロポジションを考えて施工したといわれている。突然、吹き抜けにより発生した西側の階段は、おそらく、村野藤吾に委ねられたであろう。⁸⁾

本館は、平成15年（2003）重要文化財となり、文化的価値の高い建築が数多く解体されたなか、大切に歴史を刻む。

■新館—現代建築 昭和37年（1962）竣工、そして本館との比較

50年前竣工した新館を見てみよう。本館の東側の空地に、増築を試みる。

倶楽部建築と事務所建築の差は歴然である。ル・コルビジェの近代5原則を手本としたような建築が出現する。

1階はピロティとして、立面においては構造体からファサードを自由にして連窓を採用している。垂直に及ぶ壁面によって本館と分節する。外壁は、本館に倣いリブのある特殊タイルを市松模様に施す。本館がボツ窓にて構成されているのに対して、連窓にて、水平性を強調する。

渡邊節は、次のように記述する。

「さて、新館の話ですが、（中略）旧館1階から2階への階段の途中の踊り場を、新館2階へ極くわずかの差で結ぶことを考えた。それにそこは光線を採る窓のあったところで窓さえ潰せば問題はなかった。あとは各階とも同じ方式でただ最上階だけは新旧館の床面を同一に揃えた。出来てしまえば何でもないとなのであるがそこに落ち着くまでにはいろいろと案を練った」。⁹⁾

2階（玄関ホールの階段踊り場と）、7階にて同レベルで連結する。1階、4、5、6階は数段の階段にて床レベルを調整している。

平面計画を見ると、本館が、様式建築を目指し、西面の正面玄関を中軸に左右対称の構成をもち、厚い壁で、各室を限定する。

しかし、新館は、西サイド（本館側）の南北中央部にコアを持つ平面である。南面を正面とし、連窓のカーテンウォールにて自由な間仕切りの可能な現代建築となっている。この本館と新館増築との関係性を目にして、想いおこす建築がある。それは、東大寺三月堂（法華堂）である。正堂（奈良時代）に増築された礼堂（鎌倉時代）の構成と同じように時代の異なる様式が、一体となり、その魅力を一層増す。

■まとめ

「アメリカ折衷主義は独特の一貫性をもち、その成果は少なくとも様式的法則についての信頼がかなり広がっている限りはしばしば価値あるものであった。リチャードソンのネオ・ロマネスクがそれのもとであるヨーロッパのモデルよりもある部分優れているのと同じように、マッキム、ミード、ホワイトのネオ・クラシシズムあるいはR.フッドのネオ・ゴシックは同じようなヨーロッパの試みよりも大きな厳格さと幅をもっていた」。（『近代建築の歴史（下）』レオナルド・ベネヴォロ著・武藤章訳、鹿島出版会267P）

建築とは、まさに空間性と時間性の産出物である。

2人の建築家は、まさしくその時代を表現していた。

私が、綿業会館と出会えた喜びを、建築を愛する皆様に伝え、記述のために、再訪する。「建築は見るだけの芸術でない。」²⁾と言説した渡邊節の意を、享受するために一。

- 1) 新館竣工後、本館の中二階を2階として二～六階を3～7階という名称に変更したのである。洋数字は新館竣工後の階数、和数字は本館竣工時の階数と分けて表現した。
- 2) 「渡邊節と田中孝の対談」『建築夜話』（昭和40年10月8、13、15、20、22、25、29日）日刊建設通信新聞社
- 3) 出席者：武田五一、池田實他の記録「座談会—綿業会館他について」『建築と社会』昭和7年7月
- 4) 安達英俊（平成14年4月）「国会議事堂—帝国議会議事堂」『HIROBA』近畿建築士会協議会
- 5) マッキム、ミード&ホワイト建築事務所とは、19世紀末～20世紀にニューヨークを中心に設計をおこなった。Charles.F.McKim（1847—1909）William.R.Mead（1846—1928）Stanford.White（1853—1906）の3者の共同建築事務所である
- 6) 『日本綿業倶楽部五十年誌』昭和57年 日本綿業倶楽部
- 7) 『日本近代建築史再考』昭和49年10月 新建築社 pp202
- 8) 安達英俊（平成21年）「渡邊節建築事務所時代の村野藤吾」『村野藤吾建築案内』TOTO出版
- 9) 「綿業会館の設計と私」『月報』昭和44年5月 日本綿業倶楽部（この文での旧館は本館のことである）

参考文献

- ・「渡邊節特集号」『ひろば』昭和41年5月号
- ・向井正也「渡邊節」『ひろば』昭和61年10月号
- ・坂本勝比古「渡邊節」『INAXREPORT／188』平成23年10月
- ・鈴木博之他『都市の記憶』白揚社

（あだち ひでとし／安達英俊建築研究所）

「建築と社会」 賞入賞発表

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

作品部門

竹中技術実務研修センター 想

〈2011年3月号〉

所在地一兵庫県川西市柳谷隠場41-1

建築主一株式会社竹中工務店

設計・監理一株式会社竹中工務店

施工一株式会社竹中工務店



竹中技術実務研修センター 想（おもい）は、建物の「品質のつくり込みのプロセスを確実に次世代に伝承する」という基本方針のもと、「見て・触れて・体得する」という体験型研修をコンセプトとした施設です。五感を研ぎ澄ませて学ぶ「ものづくり精神伝承の場」として、作業所の状況に近い半屋外の環境をつくり、内外装の素材や構造をそのまま活かすことで全体に切り詰めたデザインとしました。工事中の建物を再現した実物大躯体や様々な展示物、講義室を内包する大空間では、照明や空調設備に頼らずに快適な研修を行えるよう、敷地南側の高台にある既存樹木群と大きな軒庇による日射負荷低減、自然通風を活かした温度差換気、トップライトからの屋根面採光など、自然の力を活かしたパッシブな環境技術を最大限に活用しています。また、敷地の緑豊かな景観を維持し、既存の研修施設群との連携を図ることで、人と自然をつなぐ研修環境の形成を目指しました。



川合智明 かわい・ともあき

1984年竹中工務店入社、

現在大阪本店設計部長

主な作品

YHP神戸事業所（1992）

三宮ビルディング南館（1999）

清荒神清澄寺 史料館（2008）



大平滋彦 おおひら・しげひこ

1988年竹中工務店入社、

現在大阪本店設計部副部長

主な作品

新日本海フェリー敦賀ターミナル（1996）

聖ヨゼフ学園京都暁星高等学校（2003）

関西大学高槻ミュージアムキャンパス（2010）



田中光典 たなか・みつのり

1989年竹中工務店入社、

現在大阪本店設計部課長

主な作品

日本近代文学館成田分館（2006）

三井ガーデンホテル汐留イタリア街（2007）

関西大学堺キャンパス（2011）

撮影：古川泰造

作品部門

池田泉州銀行夙川支店

〈2011年4月号〉

所在地—兵庫県西宮市寿町

建築主—株式会社池田泉州銀行

設計・監理—株式会社大林組大阪本店一級建築士事務所

施工者—株式会社大林組



閑静な住宅街『夙川』にふさわしい“まちに溶け込む銀行”、また、池田泉州銀行合併後の第1号店として“新たなイメージを発信する銀行”を目指しました。

店舗面積500㎡以下という地区計画の制約の下、敷地全体を最大限利用した平屋建てとし、極限までコンパクト化した店舗ボリュームと制約外の駐輪場ボリュームを、駐車場を兼ねた中庭で繋げ、それらの上にコの字型の大屋根を載せかけ、全体を一つに纏めました。『1枚の屋根+パネル壁』というシンプルな形態を、『ガラス・白・緑』の3つの要素で構成し、この地にふさわしい端正さを表現しています。

中庭は、ガラススクリーンを介して内部空間に明るさと広がりをもたらすと同時に、透明感と開放感を強調し、敷地内外の境界を曖昧にし、自然と人々を引き寄せています。また、屋上の四季折々の彩りある風景は、阪急電車や周辺から見る人に安らぎを与え、この街に一層の豊かさを提供しています。中庭を中心とした地表面での景と併せ、新たなイメージの発信を実現することができました。



井上雅祐 いのうえ・まさひろ

1990年 大阪大学大学院工学研究科 修了

1990年 株式会社大林組入社

1999年 東ロンドン大学ディプロマコース修了

現在 大阪本店建築設計部

主な作品

空港施設閑空格納庫（2002）、天聖真美会宣教本部（2005）、太陽生命姫路ビル（2007）、太陽生命京都ビル（2010）



杉本憲祐 すぎもと・けんすけ

1994年 大阪大学大学院工学研究科 修了

1994年 株式会社大林組入社

現在 大阪本店建築設計部

主な作品

関西学院大学スポーツセンター（2000）、大阪梅田池銀ビル（2007）、天聖真美会世界会館（2010）



伊藤 翔 いとう・しょう

2006年 京都大学大学院工学研究科 修了

2006年 株式会社大林組入社

現在 大阪本店建築設計部

主な作品

キッザニア甲子園（2008）、池田泉州銀行夙川支店（2010）

撮影：河合止揚（アトリエリベラ）



作品部門

龍谷ミュージアム

〈2011年 6 月号〉

所在地 一京都市下京区西中筋通正面下丸屋町117他
建築主 学校法人龍谷大学
設計監理 株式会社日建設計
施工 株式会社浅沼組



※



※

龍谷大学創立370周年事業のひとつとして開設された仏教に関する総合博物館である。

堀川通りと油小路にはさまれた敷地は、東側は大通りをへだてて西本願寺と向かい合い、西側には小路に沿って門前町が広がっている。

展示室を堀川通り側 2、3 階に配置し中庭の明るさが通りから感じられるように、1 階はスパン約35メートルのピロティの奥をガラス張りとした。また、建物の下をくぐって東西ふたつの通りをつなぐ通り抜け路地を設けることで開かれたミュージアムを具体化し、周

ゝ辺の門前町に貢献することに配慮した。

西側ファサードの簾状セラミックルーバーは、展示室のコンクリートの量感を視覚的に和らげるだけでなく、西日が直接壁にあたらないように日射遮蔽の役割も果たしている。波打つ躍動的な形は西本願寺が所蔵する国宝「三十六人歌集」の中から水の流れを描いた伝統模様を建物にあわせて翻案し、ミュージアムの活発な活動が波紋のように広がる様をイメージしながらデザインした。



赤木 隆 あかぎ・たかし
1972年 兵庫県立兵庫工業高校建築科卒業
1972年 (株)日建設計に入社
現在 設計部門デザインパートナー
主な作品
龍谷大学大宮図書館（日本建築学会作品選奨）（2008）、
華頂短期大学葵の広場計画（2009）、神戸危機管理セ
ンター（2011）、福岡大学中央図書館（2012）



下坂浩和 しもさか・ひろかず
1988年 神戸大学工学部建築学科卒業
1989年 ワシントン大学（シアトル）
1991年 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻修了
1991年 (株)日建設計に入社
現在 設計主管
主な作品
宇治市源氏物語ミュージアム（1998）、大阪府済
生会中津病院 北棟（2002）、日本興亜日本橋ビ
ル（2009）

撮影：※東出清彦、他近代建築社

ストック活用時代の夜明け

〈2011年1月号〉

巽 和夫

公営住宅においてストック活用が始まったのは、1975年頃、2戸1改造や1室増築という方法で行われました。それから7～8年遅れて公団・UR住宅が同様のやり方でスタートしました。住戸の床面積を拡げることが眼目でした。その後、公営と公団・UR住宅は相次いで住戸内部の改修や設備の改善に向かい、2000年代に入る頃からストックの総合的な活用計画に取り組むことになったのです。

2007年にURが「ルネサンス計画1」を発足させ、ひばりヶ丘団地と向ヶ丘第一団地を対象に、住戸のみならず住棟単位の改修技術を開発することになりました。このプロジェクトは団地再生のスケールの改修となり、画期的な成果を挙げました。「ストック活用時代の夜明け」の論考は、向ヶ丘第一団地プロジェクトへの評価を契機として執筆したものです。

私はこのプロジェクトを高く評価していますが、今後の課題は少なくありません。築後年数の長い団地住宅ストックはおしなべてスケルトンの質水準が低いので、これをどのように扱うか、また改修の経営採算面からの検討も必要です。こうしたバリアを斬新な技術開発やシステム構築によって乗り越えなければなりません。将来、UR住宅における技術的成果がURの3倍にも及ぶ戸数を持つ公営住宅団地に生かされることになれば、ストック時代の「夜明け」は終わりをづけ、いよいよ本格的な活動期を迎えることになるでしょう。



巽 和夫 たつみ・かずお
1929年京都府生まれ。1968年京都大学工学部教授。1993年同名誉教授となり現在に至る。建築社会システム、ハウジングを専攻。(社)都市住宅学会会長、建設省住宅地審議会委員などを歴任。現在、全国建築審査会協議会会長。日本建築学会大賞、建設大臣表彰などを受ける。

「サードプレイス」考

〈2011年4月号〉

舟橋國男

どなたが拙稿に一票を投じられたか、お礼申し上げますとともに、世間の眼は恐ろしいものだと感じている。ここ数年、「建築社会研究」を僭称している一人として、権威ある「建築と社会」誌に場を頂いた上に、伝統ある協会から授賞下さったことに深謝し、年寄の冷水を顧みず、いま暫くの励みとしたい。

昨年3月4日締め切りであったが、間もなく大地震が起こり津波とメルトダウンにも見舞われるという、大自然は法則通りにプレートを動かすべく既にじわじわと準備しつつあった時に、そんなこととは露知らず正に想定外、能天気な拙文を弄っていた。

その後の一年数ヵ月、猶生きている者は自らの無力と不明を忸怩たる思いで責め、無能冷酷な政府・官僚を攻撃して憂さを晴らしているが、状況は一向に好転せず混迷を深めつつある。そしてまたどこかで、今、プレートが跳ね断層がズレ私の人生が途中でプツンと終わる、かもしれず…

「ファースト」も「セカンド」も根こそぎ場所を剥奪された多くの人々のこれからはどうなるか、果たして「サードプレイス」を論じる意味はあるのか。固より人々は共に生き続けざるを得ぬ以上、「サードプレイス」的なものを求め生み出す動きはあろうけれど、災害便乗の「創造的復興論」に惑わされることなく、先ずは「ファースト」たる住まいと「セカンド」たる仕事の確保こそ絶対の要件である。

飽くなき欲望のまま刹那にしか生き得ない我々の性を如何せんと思いつつ、しかし一方では、「そんなこと言えたオレか」という声も耳底に響いて止まない。



舟橋國男 ふなはし・くにお
1940年生。大阪大学名誉教授。建築計画学、環境行動論を専攻。近年「建築社会研究」を模索。「環境行動論に関する一連の研究」により1997年度日本建築学会賞（論文）受賞。
編著「建築計画読本」2004年、大阪大学出版会。

「東日本大震災の被災地を訪ねて」と「日常を失った生活空間」

〈2011年5月号〉

北川啓介・米澤 隆
荒木省吾・坂本 睦

昨年4月上旬の当初の原稿の締切日のこと。ひょんなことから、あと10～12頁、一週間ほどで執筆できないでしょうか、と相談をいただきました。30分ほど博士後期課程の米澤隆君と打合せ、当時、メディアで毎日報道されていた通常寝泊まりする前提で計画されていない避難所での住まい方について建築分野としてルポすべく、その翌々日には、名古屋を発って岩手経由で宮城県内の避難所へ入りました。名古屋に待機した荒木省吾君と坂本睦さんには、現地からメモや写真を送りつつ電話で打合せすることで、限りある時間の中で手描きの平面パースを描きあげてもらいました。長い歴史を有する建築と社会誌を通して、被災地への、これからの建築計画への精神一到の想いでした。

そのときの経験が大きく、昨夏より、月に数回、宮城県牡鹿半島の復興計画にて名古屋から現地へ赴く際に、時をみれば、被災後、数日、数週間、数ヶ月、一年の、刻々と変わりつつある避難所や仮設住宅のお話を伺っています。その度に、大きな社会、小さな社会の中で、刻々と様相を変化させる建築や都市について深く再考せざるをえないことばかりで、昨春のルポがあくまで被災地の時間の経過の一断面であったことを思い知らされます。

ひょんなことからではあるものの、私たちへ貴重な機会を与えてくださった建築と社会誌へ繰り返し感謝申し上げます。(北川啓介)

北川啓介 きたがわ・けいすけ (写真左上)
1974年愛知県生まれ。現在、国立大学法人名古屋工業大学大学院工学研究科准教授、名古屋大ラジオ局長、ナゴヤラジオ局長。著作：『もうひとつの建築設計資料集成』など。受賞：2008年度日本建築学会東海賞、第23回名古屋市都市景観賞（2010年）、SD Review2011入選など。

米澤 隆 よねざわ・たかし (写真右上)
1982年愛知県生まれ。現在、国立大学法人名古屋工業大学大学院工学研究科博士後期課程／同大学設計助手／HAP+associates主宰。作品：『公文式の建築』など。受賞：SD Review2008入選、京都デザイン賞、AR Awards 2011 Highly commended賞など。

荒木省吾 あらき・しょうご (写真左下)
1987年島根県生まれ。現在、国立大学法人名古屋工業大学大学院工学研究科博士前期課程。

坂本 睦 さかもと・むつみ (写真右下)
1985年埼玉県生まれ。2011年名古屋市立大学大学院博士前期課程修了。現在、株式会社名古屋テレビ事業。



選考委員講評

摂南大学教授

田中直人

読者と選ぶ「建築と社会」賞は、本会誌「建築と社会」の趣旨にふさわしい、社会性・環境などを配慮した有意義な建築作品や論文記事を顕彰するものとして、2001年に制定されたものである。第11回目の顕彰にあたり、「建築と社会」2011年1月号から12月号に掲載された建築作品および論考記事について、読者からの投票結果を基に2012年3月13日、本誌編集委員会で第1次選考を行い、建築作品11点、論考記事13点が選定された。これに対して同年4月19日に最終の選考委員会において、委員長として最終選考を担当させていただいた。候補作品、論考はいずれも魅力ある作品、また、興味深い論考であったが、熟議の末、建築作品3点、論考3点が選ばれた。

まず、作品部門であるが、「**竹中技術実務研修センター 想**」は、建築の社会性について考えさせられるシンプルかつ丁寧なつくりで、統一された空間が洗練された印象を与える。「**池田泉州銀行夙川支店**」は、敷地全体を使って街並みを連続させるなど、街に開かれた空間の提案が評価された。「**龍谷ミュージアム**」は、西本願寺側の正面と裏面とのつなぎの部分の中庭や通り抜け路地空間の連続性が秀逸を極めている。

論考部門の北川啓介チームによる「**東日本大震災の被災地を訪ねて**」と「**日常を失った生活空間**」の5つのルポは、テーマが面白く、加えて、雑誌としてアピールする表現力が高く魅力的な内容であった。最近の論考は当たり障りのない、神秘性を感じられないものが多いなか、現場の状況を実にわかりやすく表現する内容であった。挿絵のタッチがとても魅力的で、印象をより深いものとさせた。「**ストック活用時代の夜明け**」は、筆者の考えが見えてこないとの意見もあったが、ストック活用型がいかに重要であるかを認識させるものであった。建築企画として新規の大規模開発を目指すこれまでの流れとは異なるストックの意味や新たな価値創造や再生の手法を求める社会への問いかけともいえる。「**サードプレイス**」は、長年にわたる筆者の建築と社会に関わる識見が巧妙にかつ明快に示されたもので興味深く読ませる記事である。サードプレイスを論じる前に問われるファーストプレイスやセカンドプレイスの在り様についても深く考察する視座から、多様で曖昧な社会における人間環境の本質的な意味について問いかけている。「建築と社会」賞にふさ

わしい論考であると思う。

以上いずれも優れた作品および論考で「建築と社会」賞にふさわしいものである。今回、選外となった作品および論考のなかにも優れたものが多かった。広く読者の声を反映させた賞の選考を実現するためにも今後普遍的に「建築と社会」の編集や執筆において、会員の積極的な参加や参画のもと、多くの意見をいただくことが大切であると思われる。今後とも本賞の趣旨にふさわしい記事が「建築と社会」誌上に躍動し会員諸氏に発信することを期待したい。

選考委員講評

武庫川女子大学講師

井上雅人

2011年には東日本大震災があり、建築の世界も大きな影響を受けた。「絆」や「コミュニティ」といった言葉とともに、人と人を繋ぐことが問われた一年であった。『建築と社会』もそのことと無縁ではなかったが、それにしても興味深いのは、今回受賞することとなったうち二つの論考が、震災前に書かれたにもかかわらず、あたかも震災後の社会を見通していたかのようであることだ。「**ストック活用時代の夜明け**」と「**サードプレイス 考**」は、どちらも震災後に書かれたと言われても疑問に思わないことだろう。

しかし、それはまた当然のことでもある。震災後の諸問題は、そのほとんどが日本社会の積年の構造疲労によって生み出された、以前から存在していた問題だからだ。使い手のない「ストック」建築をどう活用するか、家庭でも職場でもない「サードプレイス」は必要なのか、といった問いかけは、縮小しつつ希薄になっている日本の社会を見事に描写している。大きな事件があると、それ以前の記憶が吹き飛んでしまいがちになるが、冷静になってこういった過去の文章を読むと、問題の継続性がとてもよく見えてくる。「**東日本大震災の被災地を訪ねて**」と「**日常を失った生活空間**」の5つのルポのような秀逸なレポートが震災直後に書かれたのも、調査の中心を担った北川氏が、日頃から漫画喫茶のような場所を丹念に観察していたからに他ならないからだろう。日頃から都市のなかには避難所とでも言うべき場所が存在し、そこが持っていた問題がそのまま震災後の避難所にもスライドしていったということが、非常に良く分かる。

こうして論考部門を見ると、近代化の過程を一周して、もはや追いつける相手もおらず、ひたすら自分の内面との戦いに突入してしまった日本社会のほころびを、どうやって繕っていく

かという問題が浮上してくる。では、そういった視点は、作る側に生かされているのだろうか。

2011年に関西圏で話題になったのは、「大阪ステーションシティ」や「あべのキューズタウン」といった大阪都心部の複合的な商業施設を中心にした再開発であったが、その一方で、「天理教河原町教会信者詰所」、「御影神愛キリスト教会」、「西宮神社祈禱所」などの宗教施設や、今回受賞した「**竹中技術実務研修センター 想**」、「**池田泉州銀行夙川支店**」、「**龍谷ミュージアム**」など、目的が明快な単機能の建築に秀逸なものが多く見られた。これらの建築はモニュメンタルな性格をもちながら、周りから屹立することなく、風景として、街の機能の一部として、調和することを目指す傾向があった。しかしこれらの建築が、「ストック」、「サードプレイス」、「避難所」といった言葉の背後に潜む、持続可能なコミュニティ構築の要請に応えた建築に成り得ているとまでは言いがたい。もちろん、建築は計画から完成まで長い年月をかけるので、今の空気をすぐに反映することはできない。今後、建築家たちがそういった問題と、いかに格闘していくのが注意深く見守りたい。

選考委員講評

関西大学教授

江川直樹

建築作品は、一次選考に残った11作品のすべてについて現地に赴き、素材、周辺環境との関係等の確認を行った。「**竹中技術実務研修センター 想**」は、地図を見たときに、山の中のどこからも見えないような場所にあるようで困ったなあと思いつつ行っただが、とても気持ちの良い建築だった。四角い箱ではあるのだが、設計者の意図とデザインがとてもうまく合致していると思った。入れ子になっている内部との関係も優れており、内外の連続性、素材、ディテール、どれもが納得できるものであった。「**龍谷ミュージアム**」も同様で、すべてに丁寧さが感じられる。高さの制限もあって地下に沈められた中庭と東西の道を繋ぐ配置構成もこの場所にふさわしく、素材やディテールの選択が心地よく、掲載の写真以外の部分もとても良いと感じた。「**池田泉州銀行夙川支店**」は、掲載の写真が良くないが、駐車場を中庭として取り込んだ配置構成が優れている。一般に、この周辺も含めて殆どこの規模の銀行が、敷地の半分が建物、残りの半分が駐車場という形式で、まちなみをつくる視点に欠けているものが多い中、沿道性を意識して駐輪場や駐車スペースを取り込んでいる。山手幹線沿いの処理には若干疑問も感じるが、素材も悪くなく、受賞作品と

した。

惜しくも受賞には至らなかったが、「西宮神社祈祷館」は、既存の神社のど真ん中に新たに建物を増築した配置上興味深い作品で、池の西側の茶店からの風景等、成功していると思える。ただ、建物の内部両脇にある細長く気持ちの良い廊下の真ん中が框戸で仕切られているのだけはどうしても納得がいかなかった。さらに、出口のところの橋の素材、ディテールにも違和感を感じた。「大阪富国生命ビル」は、意欲的な取り組みがなされた作品であるが、なんといっても二面が面する阪急東通商店街との関係が良くない。連続する商店街の空間を途切れさせているのがまずい。商店街への構えも良くなく、建物を道路からセットバックさせて配置しただけのようにになっているのが大変残念である。「豊橋市保健所・保健センター及びこども発達センター」は、出入り口の重要なアプローチの途中、左手に駐輪場、受水槽室があり、結果的に、アプローチの際に見えてしまうこの部分のデザインが良くなく残念である。中庭を囲む駐車場の車もダイレクトに見えており、ここも残念なところ。その他の作品についても、丁寧に出来ている部分とそうでない特に裏や脇の部分の素材やディテール、扱いに差のあるのが残念だった。

論考部門は他の審査委員講評を参照されたい。

選考委員講評

大阪市立大学教授

谷口与史也

作品部門について、エンジニアの末席から印象を述べます。

「竹中技術実務研修センター 想」の第一印象は「どのような人が研修に訪れるか分からないが、洗練された外観と無骨な内観のギャップを楽しんでほしい」というものであった。設計担当の田中光典氏と研修所長の尾崎正明氏に建物とプログラムについて現地で解説を頂く機会を得た。ひとことで言うと建築躯体を中心としたもの造り技術の伝承の場を提供している。床面積1100平米あまりの約半分を使ってRC躯体の施工途中のモックアップが中央に据えられている。約300の不具合事例を盛り込んであり、上級社員でも全問正解が難しい。さて外皮としての建築作品に目を向けると北側斜面の敷地の南側に建物を配置し、南からの直射日光を避けるとともに深い軒庇を設けて、温度差換気によるパッシブ空調としている。建設現場の体験学修とい

う意味でも適度な気象条件を提供している。建物足元は引き戸が設けられており広い外部空間と直結できる。そして外壁の3面を取り囲んでいる山の高さ150ミリの金属折板と合わせて校倉造を連想させるようなデザインとなっている。設計者の弁はイニシャルもランニングもローコストであれという絶対条件から、素材を活かす、自然換気を用いる、躯体は拡張可能でかつシンプルということを考えて設計した結果生まれた和風建築のエッセンスがそう感じさせるものになったということである。本作品の印象は「愚直な技術伝承の場とそれに負けない洗練された建築エンジニアリング・デザイン」に改めることにする。

「龍谷ミュージアム」は西本願寺の正面に堀川通りを挟んで西向きに建てられている。正面前壁のセラミックルーバーはコンクリートの圧迫感と西日による環境負荷を同時に和らげている。堀川通りからエントランスホールを臨むと暗く切り取られた空間の向こう側から中庭の樹木の青さが目に飛び込んできてなんと心地よい、まさに京都を感じることが出来た。しかも誘われるように踏み込んで東側の油小路に抜けることができ、周辺との調和を配慮した優れた建築作品である。

「池田泉州銀行夙川支店」は通称山手幹線と大沢西宮道路の交差点に面しており、施工中は自動車販売のショールームかと思っていた。その意味で銀行建築の印象を重厚なものから軽快なものに変えている。車や自転車に乗ってふらっと立ち寄れそうな雰囲気である。実際に歩行者、自動車、鉄道利用者といった全方向からの視線・アプローチを意識した設計になっており、商業建築としても秀逸である。

論考部門については専門外の論文を久しぶりに熟読した。強い印象を受けたのは「東日本大震災の被災地を訪ねて」と「日常を失った生活空間」の5つのルポであり、非常時の公共空間の活用をつぶさに調査しており、現場の状況が挿絵によって一層迫力のある論考である。また、『「サードプレイス」考』はパブリックの概念がようやく定着してきた感のある我が国において、サードプレイスは重要なキーワードとして当分私の中でも残れると思われる。「ストック活用時代の夜明け」は公的住宅の改修、再生問題を論じ、新たな方向を示している。選には惜しくも漏れたが、「海水煉り・海砂コンクリート人工岩塩層」は現在極めて有用な技術であり、RC構造の常識を覆す論考である。さっそく大学院の講義に用いさせていただいた。

第11回読者と選ぶ「建築と社会」賞 選考経過

○1次選考

2012年3月13日 本会編集委員会において、読者投票の結果を踏まえた1次選考を行った。

1次選考により選出された作品・論考

【作品部門—11点】

- ・大阪富国生命ビル（2011年2月号）
- ・竹中技術実務研修センター 想（2011年3月号）
- ・豊橋市保健所・保健センター及びこども発達センター（2011年3月号）
- ・池田泉州銀行夙川支店（2011年4月号）
- ・龍谷ミュージアム（2011年6月号）
- ・あべのキューズタウン（2011年7月号）
- ・第百六十二母屋 天理教河原町大教会信者詰所（2011年7月号）
- ・医療法人 篤友会 坂本病院（2011年9月号）
- ・御影神愛キリスト教会（2011年10月号）
- ・西宮神社 祈祷殿（2011年12月号）
- ・京都東宝公衆ビル ロイヤルパークホテルザ京都（2011年12月号）

【論考部門—13点】

- ・ストック活用時代の夜明け（2011年1月号）
- ・BIMによる設計で見てきた「改革」（2011年2月号）
- ・「サードプレイス」考（2011年4月号）
- ・『「東日本大震災の被災地を訪ねて」と「日常を失った生活空間」』（2011年5月号）
- ・新大阪ビルディング（2011年6月号）
- ・建築と土（2011年7月号）
- ・鉄道が都市を活性化する（2011年8月号）
- ・駅と街の記憶（2011年8月号）
- ・新しい大阪駅 OSAKA STATION CITYの誕生（2011年8月号）
- ・性能による防火設計と木の活用 木材開館（2011年10月号）
- ・海水煉り・海砂コンクリート—人工岩塩層—（2011年11月号）
- ・構造教育と社会（2011年12月号）
- ・阪神・淡路大震災の教訓を伝える（2011年12月号）

○2次選考

2012年4月19日 選考委員4名による選考委員会において、2次選考を行い、作品部門入賞3点、論考部門入賞3点を選出した。

選考委員（敬称略）

田中直人／摂南大学教授（委員長）

井上雅人／武庫川女子大学講師

江川直樹／関西大学教授

谷口与史也／大阪市立大学教授

①KATAGAMI Style —もうひとつのジャポニスム

「KATAGAMI／型紙」は、そこに見られる豊かで洗練されたデザインと高い技術によって、今日世界で注目を集めている。しかし型紙はすでに19世紀半ばから産業化が進む社会において、時代に即した新たな造形表現を求めている欧米で積極的に収集され、多くの芸術家やデザイナーに影響を与えた。本展ではこの型紙がアーツ・アンド・クラフツ運動をはじめとする美術・デザイン改革運動期の欧米でどのような役割を果たし、それがいかに現代に受け継がれているかを約400点で紹介する。

期 間 7月7日(土)～8月19日(日)
9:30～17:00 毎週金曜日と8月16日(木)は20:00まで
(入館は閉館の30分前まで)
休館日 月曜日
(7月16日、8月13日は開館)

会 場 京都国立近代美術館 (岡崎公園内)
京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL.075-761-4111

観覧料 一般1,400円、大学生1,000円、
高校生500円



コロマン・モーザー テキスタイル《神託の花》
1901年デザイン (21世紀製作)
バックハウゼン・インテリア・テキスタイル社

②ベルリン国立美術館展 学べるヨーロッパ美術の400年

19世紀、プロイセン帝国の首都ベルリンに国立美術館が誕生し、国をあげて美術品が蒐集された。本展は、その壮大なコレクションの中から、15世紀から18世紀までのヨーロッパ美術を総覧する。

ボッティチェッリをはじめミケランジェロを含む珠玉のイタリア・ルネサンスの素描や板絵の他、ドイツを代表するリーメンシュナイダーの彫刻、クラーナハの描く肖像画、そしてオランダ黄金期の巨匠レンブラントとフェルメール。僅か36点とも言われるフェルメールの自筆作品の中でも傑出した作品と誉れ高い《真珠の首飾りの少女》は日本初公開。

ベルリン国立美術館が誇る選りすぐりの絵画33点、彫刻45点、素描29点から、ヨーロッパ美術における黄金の400年を紹介する。

期 間 9月17日(月・祝)まで
9:30～17:30 金曜日は20:00まで
(入館は閉館の30分前まで)

休館日 月曜日 (7月16日、8月13日、9月17日は開館、7月17日は休館)

会 場 国立西洋美術館
東京都台東区上野公園7-7
TEL.03-5777-8600

観覧料 一般1,500円、大学生1,200円、
高校生500円



ヨハネス・フェルメール《真珠の首飾りの少女》
1662-65年頃 ベルリン国立絵画館
©Staatliche Museen zu Berlin

③開館20周年記念 マックス・エルンスト・フィギュア×スケープ

シュルレアリスムの代表的な画家として知られるマックス・エルンスト (1891-1976) の作品を、本展では「フィギュア (像)」と「風景」という二つのテーマに沿って紹介。鳥、人物、天使、動植物、怪物など、作品のなかに登場する多種多様なフィギュアは、偶然性を取り入れた独特の空間表現と密接に結びついた存在として描き出される。国内外約120点の作品を通して、シュルレアリスムの枠を越えたエルンスト独自の関心に迫る。

期 間 7月13日(金)～9月9日(日)
10:00～18:00
金曜日は20:00まで
(入館は閉館30分前まで)
休館日 月曜日
(7月16日は開館、7月17日は休館)

会 場 愛知県美術館
名古屋市東区東桜1-13-2
(愛知芸術文化センター10階)
TEL.052-971-5511

観覧料 一般1,200円、大高生900円

④ハウステンボス美術館所蔵 M.C.エッシャー展 変容・無限・迷宮

トリックアートともいわれる「トロンプ・ルイユ（だまし絵）」で世界中の美術ファンを魅了するオランダ出身の版画家M.C.エッシャー（1898-1972）。現実ではありえない世界を描き、人々を魅了し続けるエッシャーは、風景や動植物、建築デザインや幾何学的な図形まで、綿密に計算し、卓越した版画技法を築き上げた。本展では長崎のハウステンボス美術館が所蔵するコレクションより約130点を公開。初期から晩年に至るまでの全貌をご紹介します。

期 間 7月14日(土)～9月2日(日)

9:30～17:00

(入館は16:30まで)

※8月18日(土)はコンサート開催のため、19時まで開館

(入館・作品鑑賞は18時まで)

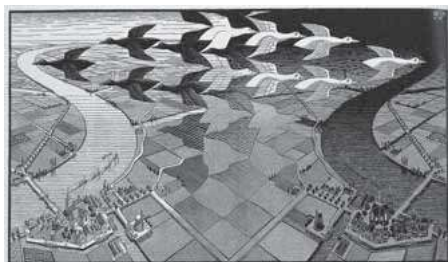
休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

会 場 佐川美術館 特別展示室

滋賀県守山市水保町北川2891

TEL.077-585-7800

観覧料 一般1,000円、高大生600円



M.C.エッシャー《昼と夜》1938年 ハウステンボス美術館
All M.C. Escher works & copy; Escher Holding B.V.-Baarn-The Netherlands

⑤美術の遊びとところV 三井版 日本美術デザイン大辞展

「美術の遊びとところ」シリーズは、古美術入門編として定期的に企画している展覧会。今回のテーマは「飛び出す美術辞典」。「葦手絵（あしでえ）」「雲母摺（きらずり）」「誰が袖（たがそで）」「饗餐文（とうてつもん）」「吹抜屋台（ふきぬきやたい）」などといった、あまり耳なれない古美術の用語を、実際の美術品を見ながら学ぶ贅沢な試み。絵画や書跡、陶磁器、漆工品、金工品、染織品など様々な美術品にまつわる、文様や画題、技法や材料などの専門的な用語と、それに関連する作品を50音順に辞書形式で紹介する。

期 間 8月26日(日)まで

10:00～17:00

(入館は16:30まで)

休館日 月曜日(7月16日、8月13日は開館、7月17日は休館)

会 場 三井記念美術館
東京都中央区日本橋室町2-1-1
三井本館7階
TEL.03-5777-8600
(ハローダイヤル)

観覧料 一般1,000円、大高生500円



狩野探幽筆《雲龍図》寛文11年(1671)
京都・真宗興正派 本山興正寺社

⑥夏季特別展 空想動物の世界 —聖なる古代の物語—

古代より、人々が畏れ敬ってきた空想上の動物たち。それらの多くは、ライオン、蛇、鷲や人が合体した姿で表され、人々が目に見えない存在に対して抱いた様々な想いを反映している。あるものは神に従い、人や土地や宝物を守護する聖獣として、またあるものは超自然の力で災厄を起こす忌避すべき魔物として、様々な物語が紡がれてきた。本展は、MIHO MUSEUMの古代美術コレクションに、タジキスタン国立考古博物館など国内外からの出陳作品を加え、メソポタミア、ギリシア・ローマ、東南アジア、中国などで生みだされた様々な聖獣、怪物などの作品を通して古の物語を探訪する。

期 間 7月7日(土)～8月19日(日)

10:00～17:00

(入館は16:00まで)

休館日 月曜日

(7月16日は開館、7月17日は休館)

会 場 MIHO MUSEUM

滋賀県甲賀市信楽町田代桃谷300

TEL.0748-82-3411

観覧料 一般1,000円、大高生800円、
中小生300円



《仔鹿形リュトン》黒海周辺地域 前4世紀
MIHO MUSEUM

⑦企画展Ⅱ 京都画壇の画家シリーズⅣ 没後70年 竹内栖鳳展

動物を描けばその匂いまで描くと評され、京都画壇の総帥として活躍した竹内栖鳳。洒落な動物画は誰もが驚くリアリティーを備え、今なお人々を魅了し続けている。また、栖鳳画塾竹杖会は松園をはじめ、小野竹喬や徳岡神泉など多くの画家を輩出し、指導者としても優れた功績を残した。本展では、人物画や風景画なども交え、「東の大観、西の栖鳳」と称えられた栖鳳芸術の神髄を紹介する。

期 間 7月18日(水)～9月2日(日)

10:00～17:00

(入館は16:00まで)

休館日 月曜日

会 場 松伯美術館

奈良市登美ヶ丘2-1-4

TEL.0742-41-6666

観覧料 一般800円、小・中学生400円



竹内栖鳳《蹴合》1926年

▶「建築仕上診断技術者」講習

公益社団法人ロングライフビル推進協会(BELCA)は、建築仕上ならびコンクリート部の物理的な劣化診断、安全性診断、社会的劣化診断など、多方面から診断を行い建築物の維持保全に適切な提言ができる技術者を育成し、建築仕上を良好な状態に維持することを目的に「建築仕上診断技術者」(ビルディングドクター〈非構造〉)の資格取得講習会を開く。

東京(定員200名) 9月19日～9月21日

大阪(定員110名) 9月26日～9月28日

福岡(定員100名) 10月3日～10月5日

名古屋(定員100名) 10月10日～10月12日

申し込み受付は7月27日まで。

受講料50,400円(消費税、テキスト代含む)

詳細は<http://www.belca.or.jp/>に掲載。

本欄掲載の①～⑦の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手(80円)を日本建築協会事務局までお送りください。

暑中お見舞申し上げます

平成24年盛夏

岡 本 慶 一

日 建 設 計
代表取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4-6-2 TEL(06)6203-2361

理事

佐 野 吉 彦

株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役社長

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

長 谷 川 博

株式会社 大林組 大阪本店
専務執行役員 大阪本店長

〒540-8584 大阪市中央区北浜東4-33 TEL(06)6946-4578

会長

香 西 喜八郎

株式会社 東畑建築事務所
代表取締役社長

〒541-0044 大阪市中央区伏見町4-4-10 TEL(06)6202-0391

副会長

設 楽 貞 樹

株式会社 安井建築設計事務所
常務取締役

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

理事

中 井 進

日 建 設 計
代表取締役副社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4-6-2 TEL(06)6203-2361

近 藤 徹

不二熱学工業 株式会社
代表取締役

〒542-0081 大阪市中央区南船場2-1-1 TEL(06)6261-4321

立 成 良 三

一般財団法人 大阪住宅センター
理事長

住宅保険、評価、住宅情報相談、住宅展示場他

〒542-0081 大阪市中央区南船場4-4-3 心斎橋東急ビル4F
TEL(06)6253-0071 FAX(06)6253-0145

辻 文 三

一般財団法人 日本建築総合試験所
理事長

〒565-0873 吹田市藤白台5-8-1 TEL(06)6872-0391
<http://www.gbrc.or.jp>

名誉会長

佐 野 正 一

株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役相談役

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

立 野 純 三

株式会社 ユニオン
代表取締役社長

〒550-0015 大阪市西区南堀江2-13-22 TEL(06)6532-3188

沼 田 亘

株式会社 昭和設計
代表取締役社長

〒531-0072 大阪市北区豊崎4-12-10 TEL(06)7174-8787



暑中お見舞申し上げます

平成24年盛夏

設計事務所有志

株式会社 伊藤建築設計事務所

代表取締役会長 森 口 雅 文

代表取締役社長 小 田 義 彦

本社・名古屋事務所 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 (桜通ビル) TEL (052) 222-8611

東京事務所 〒101-0021 東京都千代田区外神田3-5-12 (聖公会神田ビル) TEL (03) 5294-6211

株式会社 瀬戸本淳建築研究室 ISO9001

代表取締役 瀬 戸 本 淳

〒650-0024 神戸市中央区海岸通1-1-1 神戸郵船ビル TEL (078) 333-0138

<http://www.jsao.co.jp>

株式会社 東畑建築事務所

代表取締役社長 香 西 喜 八 郎

本社 〒541-0044 大阪府中央区伏見町4-4-10 TEL (06) 6202-0391

大阪・東京・名古屋・九州・東北・上海

<http://www.tohata.co.jp>



日建設計

代表取締役社長 岡 本 慶 一

東 京	102-8117	東京都千代田区飯田橋2-18-3	TEL (03) 5226-3030
大 阪	541-8528	大阪府中央区高麗橋4-6-2	TEL (06) 6203-2361
名 古 屋	460-0008	名古屋市中区栄4-15-32	TEL (052) 261-6131

安井建築設計事務所

代表取締役社長 佐 野 吉 彦

本社 〒540-0034 大阪府中央区島町2-4-7 TEL (06) 6943-1371 (代表)

支社 大阪・東京・名古屋・広島・九州 <http://www.yasui-archi.co.jp/>

建設業有志

地球に笑顔を



ODAYASHI

株式会社 大林組

取締役社長 白石 達 専務執行役員 大阪本店長 長谷川 博

本社 東京都港区港南2-15-2 TEL 03(5769)1111
大阪本店 大阪市中北区北浜東4-33 TEL 06(6946)4400

100年をつくる会社



KAJIMA CORPORATION

本社：東京都港区元赤坂1丁目3番1号
関西支店：大阪市中北区城見2丁目2番22号・マルイトOBPビル
電話06(6946)3311
<http://www.kajima.co.jp/>

子どもたちに誇れるしごとを。



清水建設株式会社

取締役社長 宮本 洋一 取締役副社長関西事業本部長 小橋 鴻三

本社 〒105-8007 東京都港区芝浦一丁目2番3号 シーバンスS館 Tel. 03(5441)1111
関西事業本部 〒541-8520 大阪市中北区本町三丁目5番7号 御堂筋本町ビル Tel. 06(6263)2800



For a Lively World

社長 山内 隆 司
常務執行役員 山田 丈 啓
関西支店長

<http://www.aisei.co.jp/>



株式会社 竹中工務店

取締役社長 竹中 統一

〒541-0053 大阪市中北区本町4-1-13 TEL(06)6252-1201(代表)

学校



大阪工業技術専門学校

OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY

建築学科・建築学科II部(夜間)・建築設計学科・建築設備学科・大工技能学科・インテリアデザイン学科・建築士専科

〒530-0043 大阪市北区天満1丁目8番24号 ☎ 0120-0910-19 🌐 <http://www.oct.ac.jp/> Tel. 06-6352-0093

団体



社団法人

日本建築材料協会

会 長 藤 井 實

〒550-0003 大阪市西区江戸堀1-4-23 撞木橋4階 TEL (06) 6443-0345 FAX (06) 6443-0348
<http://www.kenzai.or.jp/>



社団法人

日本建築協会

会 長 香 西 喜八郎

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 TEL (06) 6946-6981



社団法人

日本建築協会京都支部

支 部 長 上 林 研 二

〒604-0944 京都市中京区押小路通柳馬場東入 京都建設会館別館 TEL (075) 211-2857



社団法人 日本建築協会中国支部

支 部 長 高 松 隆 夫

〒732-0048 広島市東区山根町28番22号 下岸建設株式会社内 TEL (082) 264-0709



社団法人 日本建築協会東海支部

支 部 長 福 田 泰 造

〒460-0008 名古屋市中区栄4-3-26 (昭和ビル5階) TEL (052) 261-1451



理事会

第2回常任理事会

5月30日(水) 16:00~17:30

出席者 中井会長ほか7名

- 議事(1) 平成23年度事業報告(案)について
(2) 平成23年度収支決算報告(案)について
(3) その他

編集委員会

第2回編集委員会

5月9日(水) 18:00~20:20

出席者 米井委員長ほか6名

- 議事(1) 6月号特集「ZEB(ネット・ゼロ・エネルギー・ビル)を目指して」
(2) 7月号特集「建築と窓」
(3) 8月号特集「巨大地震に備える」の報告と検討
(4) 9月号特集「第59回青年技術者」の選評結果を紹介
(5) 10月号特集「超高齢化社会」の報告と検討
(6) 11月号特集「歴史的建造物の保存活用」の協賛広告を検討

第2回構造分科会

5月11日(金) 18:00~19:40

出席者 橋本幹事ほか3名

- 議事(1) 「構造の頁」の企画
(2) 2012年8月号特集
(3) 12月号構造特集の企画

第3回構造分科会

5月31日(木) 18:00~20:15

出席者 橋本幹事ほか6名

- 議事(1) 「構造の頁」の企画
(2) 12月号構造特集の企画

第2回設備分科会

5月2日(水) 18:00~20:00

出席者 赤澤幹事ほか4名

- 議事(1) 見学会の企画
・関西電力堺太陽光発電所
・スマートハウス(大阪ガス+積水ハウス)
(2) 「設備の頁」の企画
・6月号候補「東洋陶磁美術館LED事例紹介」
・8月号以降候補「省エネモーター」「超省エネモーター」
(3) 10月号以降候補について

第2回施工材料分科会

5月8日(火) 17:00~18:00

出席者 高橋幹事ほか3名

議事(1) 8月号特集企画について

(2) 11月号特集企画について

第2回法令分科会

5月16日(水) 15:00~17:20

出席者 平山幹事ほか7名

- 議事(1) 「法令コーナー」の企画
・6月号4月施行の京都市伝統的な木造建築物の保存及び活用に関する条例→京都市
・7月号大阪府庁本館5階「正庁の間」復元→大阪府
・8月号京都市都市計画マスタープラン→京都市
・住教育→大阪府
・建築審査会の建議を受けての京都市細街路対策→京都市
(2) 10月号法令特集の方向

第2回作品作風小委員会

5月24日(木) 19:00~20:40

出席者 稲垣副委員長ほか6名

- 議事(1) 作品の選定(仮称)日之出住宅
(2) 作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
(3) 「gallery」掲載報告・予定

第2回広告企画小委員会

5月9日(水) 17:00~18:00

出席者 米井委員長ほか4名

議事 広告依頼先検討 6月号~11月号

事業委員会

第2回情報見学小委員会

5月10日(木) 18:00~18:50

出席者 瀬戸川委員長ほか5名

- 議事(1) 本年度事業について
・「村山龍平邸(香雪美術館)」見学会について
・「フェスティバルホール」見学会について
(2) その他 本年度の見学案

教育委員会

第1回講習会小委員会

5月25日(金) 18:00~19:00

出席者 山形委員長ほか4名

- 議事(1) H23年度講習会実施報告
(2) 本年度の方針

出版委員会

第2回出版委員会

5月17日(木) 17:00~18:30

出席者 上原委員長ほか7名

- 議事(1) プロのノウハウと特装本の経過報告
(2) 進行中のテーマについて
・「建築技術者のための品質トラブル予防のポイント」
・「ゼネコン設計部見聞録からの失敗対策」
(3) その他

特別委員会

第2回10年委員会

5月17日(木) 18:30~20:00

出席者 設楽委員長ほか5名

- 議事(1) 学生のための見学会について
(2) 大阪「かくれたええとこ」そうせい(創生)プロジェクト「アイデアコンペ」について

第1回 群像

5月16日(水) 18:30~19:45

出席者 本多「関西の建築界/群像」編集委員会代表ほか4名

- 議事(1) 2012年8月号以降の群像登壇者の選出およびインタビュアー担当者について
(2) 4期メンバー選出について

第35回 群像(インタビュー)

5月22日(火) 13:30~19:00

出席者 杉山 美納(インタビュアー)

- 場所 ストロングビルディング、福寿園
議事 関西の建築界「群像」登壇者の人間像に迫るためのインタビュー
(株)竹中工務店大阪本店設計部第3設計部門設計担当課長代理 須賀 定邦 氏

監事監査

平成23年度監事監査

5月25日(金) 13:30~15:00

出席者 杉山監事ほか2名

空調・衛生・クリーンルーム設備
(設計・施工)

 **朝日工業社**

本社・本店 東京都港区浜松町1-25-7 電話03(3432)5711
大阪支社 大阪市淀川区加島1-58-59 電話06(6302)2270
支店 北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設計 施工

 **ダイダン株式会社**

本店・大阪本社 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号 電話(06)6441-8231
東京本社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号 電話(03)3261-8231
支店 名古屋・福岡
支店 札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・
広島・高松・熊本
営業所 帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・
福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所 旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店 シンガポール・ホノルル
技術研究所 〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地 電話(0492)58-1511

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応するために**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761/FAX.06-6976-8765
東京事務所 〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1丁目9番地ニュー御茶ノ水ビル601号
TEL.03-3526-5580/FAX.03-3526-5582
<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社日本電気化学工業所

<http://naci.jp> E-mail:sc@naci.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市池田西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

コンクリートのひび割れ対策に

高性能膨張材

デニカパワーCSA

NETIS 登録済み
KT-040018-V

DENKA
DENKI KAGAKU KOGYO KABUSHIKI KAISHA

特 性

- ・乾燥収縮の低減
- ・自己収縮の低減
- ・水密性の向上(防水性)
- ・温度ひび割れの低減

主な用途例

- ・合成デッキスラブ
- ・土間スラブ
- ・RC 構造物
- ・自己充填コンクリート
- ・マスコンクリート 他

膨張材以外にも

- ・無収縮グラウト材 (タスコン)
- ・躯体防水材 (シャガード)
- ・ポリマーセメントモルタル (RIS シリーズ)

など、各種混和材(剤)を
ラインナップしています。

●資料のご請求お問い合わせは・・・

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社 本社
〒629-3101 京都府京丹後市網野町網野 126
TEL 0772-72-2220 FAX 0772-72-2888
舞鶴営業所・福知山営業所・豊岡営業所

金森藤平商事株式会社 大阪営業所
〒561-0817 大阪府豊中市浜 1 丁目 1 番 7 号
TEL 06-6332-6861 FAX 06-6332-6884

小浦産業株式会社
〒550-0004 大阪府大阪市西区靱本町 1 丁目 14 番 6 号
TEL 06-6443-6181 FAX 06-6443-6270



自然風力換気窓



ウインブレス

W I N B R E A T H

風の力で窓が開閉し、自然換気による
快適な室内空間を生み出します。

窓から夢をひろげていきます

不二サッシ

不二サッシ株式会社 開発営業統括部 〒141-0031 東京都品川区西五反田4-32-1

TEL.03-5745-1235

大阪支店 〒541-0047 大阪府大阪市中央区淡路町3-5-13 (創建御堂筋ビル) TEL.06-4706-4106

http://www.fujisash.co.jp/

四六判・220頁
定価2310円(本体2200円)元ゼネコン技術部長がやさしく解説!
施工管理技術者必携の読本

現場直伝!

躯体工事の
100ポイント

イラスト・写真満載

主要目次

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 技術者としての心構え | 5 型枠工事 |
| 2 鉄筋工事 | 6 土工事・杭工事 |
| 3 コンクリート工事 | 7 PCa工事・PC工事 |
| 4 鉄骨工事 | 8 耐震補強工事 |

日本建築協会(企画)
中川 徹(著)

中川 徹

1946年三重県生まれ。1971年3月名古屋大学工学研究科修士課程修了。同年4月清水建設入社。1992年大阪支店(現関西事業本部)建築技術部長、2005年関西事業本部大阪支店品質長、2011年7月清水建設退社。共著に『建築を志す人びとへ』(学芸出版社、1997年)、『建物の結露トラブル事例と解決策』(学芸出版社、2003年)。



本文イラスト: 石田芳子

学芸出版社

〒600-8216
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入Tel 075-343-0811
Fax 075-343-0810http://www.gakugei-pub.jp/
E-mail info@gakugei-pub.jp